



世界少年少女名著大系(21) 金の星社編・装幀寺内萬治郎畫伯

母を尋ねて三千里(夕子)

四六判箱入美本
内容一九〇頁
挿畫三色版外數頁
定價九拾錢
送料六錢

本書は伊太利文豪アミチスの作つた世界的名作であります。「夕子」の名で、全世界の少年少女から熱烈な愛読を受けました。
さて、「夕子」は何によつて有名かといひますと、「月次講話」といふ幾つかの物語りがあるからであります。で、本書は、その「月次講話」の中で最も有名であり、又最も讀んで見て面白いものばかりを集めました。
「母を尋ねて三千里」「難破船」「父ちゃんの看病」「少年斥候」「少年筆工」「ローマニヤの血」「少年鼓手」等何れも不朽の名作であります。三千里の道を遙々と母を尋ねて行く少年の哀話もあり、又難破船に乗り込んで自分の身を捨て、少女を救ふ勇敢な少年の話もあり、各篇とも一生忘れられぬ物語りばかりです。
名著大系の第二十一篇として發行された本書こそ、是非皆さんの一讀せねばならぬ尊い名著であります。

町坂勳郷本京東
社星の金
番六九五九五京東替振

オハナシ

四六倍假裝全五册
紙數各册八十餘頁
定價各壹圓
送料各八錢

重話も
重話も
昔のこと
今のこともある
面白くて
爲めになる
オハナシ

巖谷小波 鹿島鳴秋 著
橋本邦助・太田三郎
細木原静枝・岡野榮
杉浦非水 畫

日本一の畫

袖珍假裝全三十五册
紙數各册三十餘頁
定價各貳拾五錢
送料各金四錢

繪が一頁に
お嘶が一頁
繪が踊れば
お嘶も踊り出す
これこそ本統の
日本一の畫嘶

巖谷小波 著
岡野榮・小林健吉
杉浦非水 畫

オウギトウ

四六倍列假裝全三册
紙數各册三十餘頁
定價各八拾錢
送料各六錢

歌と繪と
次々に續いてゆく
印象の濃い本
牛若丸は？
舌切雀は？
運動會の賞品は！

巖谷小波 著
太田三郎・岡野榮
細木原静枝 畫

通橋本日京東
社會式株善丸

札幌
仙台
福岡
東京
神戶
大阪
京都
名古屋
京都
大阪
神戸
東京
名古屋
京都
大阪
神戸

ルビ丸・田三・田神—京東

理科研究書

歷史研究書

國語研究書

(最新刊)

定價各五十錢

卷五
卷九

定價各六十錢

卷六 卷十一

同
•
卷十三



(近刊)

定價各八十圓

第五年用

2

第六年用

(姪刊)

定價各六十錢

第四年上卷

第四卷 下卷

野
五
早
下
卷

六
年
上
卷

第六年下卷

10

內容の正確豐富なる
理想的自學自習書

體驗より生れたる
懇切なる指導案

(二) 小學校アソシエツトド
イニシアチブナカヘトビデシ
カウダ。

(三) 日ササモ、ウチノテツダイ
チシナガラ、ヨーザロクアベ
ンキウウシガ、トンキナト
田口ウハ、トウキウウノ、チ
ミガガタヘハイシテ、ナマ
ケチ、カシドウシヤシン、バカ
ミテアルイダ。

二十ネンホドオツテ、シ
キチハ、ヨツバナカイシヤノ
シヤチ四ウニナリ。田サタハ
ソナカイギインニナラセガ
トンキチトヨロウハ、オナ
サケア、シキチノカイシヤ
エツカツテモラツタイル。

六五六三 込牛話電 院書アデイ 込牛市京東 所行發
三二四五 込京東替振 四一町伏山

系大傳人偉女少年少界世

錢六料送・錢十九金價定・頁數外版色三畫挿版六四

大木雄三先生著・挿畫 寺内萬治郎畫伯
柳田謙吉畫伯

(編一第)

ジャンヌ・ダルク

可憐なる一少女ジャンヌ・ダルクが、奮ひ起つて、母國を滅亡から救ふ健な氣な物語は、如何に讀者の血を跳らせるでせうか。教訓と興味ある一大雄篇。

偉人英雄の一生を書いた面白い物語！

霜田史光先生著・挿畫 寺内萬治郎畫伯
柳田謙吉畫伯

(編二第)

ローマ英雄 シーザー

世界的英雄、ジュリアス・シーザーの一生を書いたもので、その幼年時代から、ローマの元老院で刺し殺されるまでの、大活躍を現した歴史物語です。

番六九五九五京東替辰 社星の金 郷町本京東
番七八三五川石小話電

語物篇名界世女少年少

錢二十料送・錢十九金冊各價定・本美入箱判六四

田中實編◇高坂元三裝幀挿畫

第四編 水滸傳物語

頁四八一文本
葉數十畫挿

行發々愈

伏魔殿からとびだした一百八人の魔王即ち一百八人の豪傑物語です。智多星吳用の様な軍師もあれば、黒旋風李逵の様な敵中へかけ入つて人を斬ること草の如し等といふ豪傑や、景陽岡で虎を退治した武松の話等、勇ましくも心躍り又時には涙なくして讀む事の出来得ない様な悲しい物語に満ちてゐる支那四大奇書の一つです。

第五編 膝栗毛物語

第六編 三國志物語

第一編 赤穂義士物語

第二編 八犬傳物語

第三編 クオ・ヴァ・ヂ

番一〇七一六京東替辰 社蘭金 外市京東
番七四六七草淺話電



風

薫

る

(金の星書)

岡本歸一畫

畫

ん め ご ん め ご



（いさ下覽御を「んさ辨んさ要」）

畫郎治萬内寺

石 森 延 男 著

高 島 華 宵 畫 伯 裝 幀

最 新 刊

少年少女慕はしき人々 文學物語

裝美入箱列六四
圖貳金價定
銀貳拾料送

祖國に生れた文學にあたり縁遠いやうに思はれる日本の現代の兒童には、恰も母性の温かさな惠まれぬやうなものである。美しき故郷をひそめてゐるこの昔に育つた兒童の日本文の現代的兒童には、恰も母性の温かさな惠まれぬやうなものである。祖國の文學が兒童の胸に明く思ふ吉田半次郎の繪と相俟て、中等學生には國語漢文の魂を振るひ、勤勞の熱と力とを以て、與ふる高尚優美の名著である。

女子學院教授 射手矢貞三先生著

少年太平記

下・上
二卷

各冊菊判美本
三百餘頁輸入
各定價壹圓八十錢
各冊送料十錢

古來幾多の志士義人を感奮せしめた千古の名文。太平記の全篇を少年少女にも是非讀ませたい爲、平易に現代文化されたもので、華易にも消々ましい文字は夕日の前に舞ひ散る櫻花のやう、一巻の悲壯な戦給である。しかも原文の妙味は古文のまゝ味讀を容しても『慕はしき人々』と同様絶の著述である。

七六二三京東書振
二九八四手大話電

館 風 培 區 田 神 京 東
目 丁 一 町 錦

沖野岩三郎先生著・装幀柳田謙吉畫伯・四六判箱入三二〇頁
定價金壹圓八拾錢・送料六錢

日本の兒童と藝術教育

問題の著名
！る現よいよい

本書一冊によつて讀者の思想に大變化を來さすべき使命を帯びた一大著述であります。沖野先生の三十年來の體驗と思索から生れ出た本書こそ、わが國の兒童教育及文學にたづさはる何人も、一讀せねばならぬ本であることは言ふまでもありません。内容三百餘頁、一々一大警鐘となつて皆さんの胸を打つてせう。

殊に「現代の日本の兒童に如何なる童話を與ふべきか。」に就ての著者の大抱負を聴かれよ。

町坂動郷本京東
社の星の金
番六九五九五京東替振

沖野岩三郎先生著（最新刊）
裝幀鈴木保徳畫伯
挿畫田中行一畫伯

勞働の少年

鐵山に勞働者となつて働く二人の少年の物語りです。兄の春吉は常に靜かなる野を慕ふ詩人の如き心を持ち、弟の岩吉は常に英雄を夢見て争闘を好む熱烈な少年です。二人は地下何百尺の鐵穴に入つて、生きるが爲めに鐵夫等と共に暮します。

この間に如何なる事件が勃發したでせうか。金山を震駭させる恐怖すべき血腥い事件は頻頻として起り、絶えず二少年の魂を脅します。しかし、二人は、父が鐵夫等の爲めに殺され孤兒とはなりましたが、父が最期に残した教訓を胸に抱いて、兄の春吉は遂に農夫となつて靜かなる一生を送り、弟の岩吉は最後まで鐵山に踏み止つて地下の大湖水を發見して人々を救済するといふ、沖野先生作の長篇一大傑作です。讀まねば不幸といふ程の名作です。

町坂動郷本京東
社の星の金
番六九五九五京東替振

四六判箱入美本
内容二六〇頁
挿畫三色版外澤山
定價金壹圓貳拾錢
送料六錢

金社の星 世界少年少女名著大系

第四判入題本・定價各冊金十九錢・送料金六錢

第一編

ロビンソン漂流記

船乗りになつて、遠い國々へ行きたいとあこがれてゐたロビンソンが、途中で難船に出遇ひ、無人島へ流されて、艱難辛苦して再び本國へ歸るまでの長い物語りです。これ程渾身讀まれた本はない。この本を讀まない者は、一生の不幸です。

第二編

ナポレオン物語

ナポレオンの一代記です。地中海の小島コルシカに生れた一少年ボナパルトが、ナポレオン大帝と稱せられて歐洲を征服する榮華の時代から、遂に南大西洋の一孤島セント・ヘルナで淋しい死を遂げるまでの變化極まりない物語です。

第三編

ドン・キホーテ

イスパニヤの有名な物語。毎日騎士の物語りを讀んでゐる内に、氣が少し變になつて、自分が騎士になつたやうに思ひ込んでしまひ瘡馬に乗つて本當に武者修業の旅に出かけ、到るところで大失敗をして、遂にあはれな死をとげるといふ痛快な物語りです。

第四編

コロンブス物語

アメリカ大陸を發見した大偉人コロンブスの物語りです。コロンブスがあらゆる困難と戦つて、遂にアメリカ大陸を發見するまでの變化極まりない運命を書いた血と涙の物語りです。この偉人の傳記を書いた本は餘りないので、非常にめづらしい本です。

第五編

大人國小人國めぐり
ガリバアー旅行記

ガリバアーが、難船して小人國に漂流して、奇想天外の滑稽をやリ、再び航海に出て大人國に漂流し、そこでさん／＼な目にあひ、漸く覺にさらはれて、本國に歸つて來るまで實に面白い物語りです。

金社の星 世界少年少女名著大系

第四判入題本・定價各冊金十九錢・送料金六錢

第六編

ロビン・フッド物語

英國に傳へられた有名な物語りです。もとは伯爵であつたロビン・フッドが悪い男のために國を奪れて遂に義賊となつて、シャーウッドの森にかくれ、王を救ふ難を起したり、悪い僧正をやつたり、そして最後に毒殺されるまでの變化の多い物語りです。

第七編

アラビヤンナイト

アラビヤン・ナイト程面白い物語りは、世界の童話文學を通じてないといはれてゐます。千年餘の間語り傳へられた物語りである事を考へても、如何にこの物語りが讀者に興味を興へてゐるかかわかりません。アラビヤン・ナイトの中でも、特に面白いのばかりが集つてゐます。

第八編

ギリシヤ神話
オデッセー物語

ギリシヤの詩聖ホーマーの作であつて、世界中で一番古い、そして又一番面白い物語りです。トロイの戦争に遙々海を越えて出征した勇士オデッセーが神の怒にふれ、途中ありとあらゆる困難に出遇ひ、遂に乞食となつて本國に歸る迄の物語りです。

第九編

シェークスピア物語

有名なシェークスピアの芝居の中で、面白いものばかりを選んで、物語り風に書いたものです。『テンペスト』『御意のま』『ハムレットの商人』『ア・ミ・ノ・女驎』『夏の夜の夢』『冬の夜はなし』等、是非一度は讀んで置くべき物語りです。

第十編

グリム童話

グリムの童話は改めて述べるまでもなくドイツの有名な童話研究家グリム兄弟の作つたもので各篇ともドイツの各地に傳へられた國民童話である。しかしグリムの童話は今ではドイツ一國のものでなく、少年少女の珍寶として譯ばれてゐる程有名なものになつてゐる。本書の中に集められてゐる有名なものだけでなく、最も有名で面白く、作はグリムの數多くの童話の愛好者及研究家の御讀を待つ。

金社の星 世界少年少女著名大系

六四判箱入頗美本・定價各冊金十九錢・送料金六錢

第十編 入繪 イソップ物語

イソップ物語は古くから知られてゐる話だけに、これまで、随分澤山の書が出てゐる。しかし本書の如く、一つのお話に一枚づゝの立派な挿入絵、お話を讀むと兩方面白く讀ませる本は他にない。金の星社が最も自慢の本の一つとして、是非皆さんに見ていただきたい。

第二十編 日本神話 古事記物語

『古事記物語』ほど立派な神話は、恐らく世界の何れの國にもあるまい。實際驚く程立派な、面白い物語りである。日本の國がはじめて出来た話から始つて神々の誕生や、天照大神や、大國主の命の話を、それからすつと末になつて、雄略天皇の御代までの神話である。

第三十編 子供キリスト傳 新約物語

二千年後の今日まで、世界の救世主としてあがめられてゐるイエス・キリストの一生を聖書に従つて最も正確に書いた本である。この尊い人の一生を子供のために書いたものは他にない。本書はわが國にあらはれた最初の子供キリスト傳として廣く世に紹介したい。

第四十編 西遊記

支那から印度へ、はる／＼お経を取りにゆつた玄奘三蔵の旅を書いたもので、お供には悟空、八戒、沙悟淨の三人の怪物がついて行き、途中で様々の怪物に出遇ひ奇々怪々の物語。一度讀み出したら本を置けない世界的名作。この本を讀まない者は不幸である。

第五十編 ローマ英雄物語

ローマの英雄を中心に、ローマ歴史を書いたもので、すから、面白い一大英雄傳です。ローマを最初に開いたロムルスとレマスの不思議な物語りから、シーザーや、ハンニバルなどの大英雄の合戦の話など、順々にあらはれ息もつけぬ面白い物語りです。

金社の星 世界少年少女著名大系

六四判箱入頗美本・定價各冊金十九錢・送料金六錢

第六十編 こども聖書物語

『バイブル物語』とも呼ばれ、歐米各國の少年少女が、幾度となく繰返し讀む有名なお話です。日本の『古事記』のやうなお話で、ユダヤの國の昔にあつた、神様と人間との不思議な物語りです。『新約物語』と一しよに讀んだら、聖書のことがかつて面白味で深いでせう。

第七十編 奴隸トム物語

白人種のために犬猫同様にあつかはれてゐた奴隸の物語りです。偉人リンコンが現れるまで、米國のあはれな奴隸たちの生活を書いたもので、それから最初の頁から最後の頁まで涙なしに讀めぬ本です。博大、崇高な氣持が、この本によつてどんなに愛はれることとせう。

第八十編 ギリシヤ英雄物語

日本にはじめて紹介されたギリシヤ英雄の物語りで、原著は有名な英國文豪キングスレーです。傳説に従つて書かれたものだけに、その面白さは格別です。どの勇士のお話も、實に面白くて、胸をおどらせるものばかりです。かういふ面白い話を知らずに済ませるのは残念です。

第九十編 アンデルセン童話

世界第一の童話作家アンデルセンの童話は何人も讀んで置かなければならぬほど尊い世界の寶です。本書に收めた作は、アンデルセンの作の中でも最も代表的なものになつてゐる立派な作ばかりです。から、本書一冊を讀めばアンデルセンの作が全部わかるわけです。立派な傑作集です。

第十二編 小公子

幼くして父を失ひ、神の如く氣高き母を持つた小公子の運命を書いた物語りです。世界的に有名な家庭小説にして我が國にも早くから知られてゐました。が少年少女のために紹介されたのは本書が最初です。原作はバーネット女史の作で、全篇清い愛と涙と教訓に満ちたてなりました。

世界少年少女偉人傳大系(3) 三井信衛先生著・裝幀 寺内萬治郎畫伯



四六判箱入頗美本
内容一九〇頁
挿畫三色版外數頁
定價金九拾錢
送料六錢

勇將ネルソンの名は、ナポレオンと同様に知らない人はいないでせう。トラファルガルの大
海戦に打死したネルソン！ その勇壯な場面は、永く傳へられて歴史を飾つてゐます。
命を賭けての戦は幾度であつたか知れない軍神ネルソンは、そも／＼如何なる人であつた
か。先づ本書を一讀せられよ。
幼い時からあらゆる困難と戦ひ、負けず嫌ひで十二歳の時から水夫生活をはじめ、忽ち
して英國の大海軍の指揮者となつて、幾度か母國の危機を救ひました。正義の念に強く、國
家を愛し、部下には慈父の如く慕れ、しかも、常に鐵の如き意志を以て事に望んだネルソン
こそ、世界的偉人として恥しからぬ人であります。
諸君！ 爲すあらんと欲する人は、先づこのネルソン傳を讀まれよ。そして、弱い心を鞭
うたれよ！

町 坂 動 郷 本 京 東
社 星 の 金
番 六 九 五 九 五 京 東 替 振

狼少年

英國文豪キツプリング原著・小島政二郎先生譯・寺内萬治郎畫伯裝幀

- 【次 目】
- 第一 狼少年
一 大虎あらはる
二 狼に助けらる
三 熊と豹の親切
四 虎の野心
五 赤い花
六 狼會議
- 第二 虎！虎！
一 人間の世界に歸る
二 鐵砲の名入
三 水牛の突撃
四 大虎退治
五 プルデオとの決闘
- 第三 狼の町
一 狼の同情
二 鷹の使
三 大蛇の加勢
四 狼の町へ着く
五 大戦争はじまる

頁二一三本美入箱判六四
山澤外版色三畫挿
錢六料送・錢十九圓壹金價定

『狼少年』は日本圖書館協會より、過去一
ケ年間に少年少女から愛讀された良書の中
で、最もよい本の一つとして名譽ある推薦
書に舉られました。本書が如何に面白くて
良い本であるか、これを以ても知られます。

青眼の人形

野口雨情先生著・裝幀 落谷虹郎畫伯
挿畫 寺内萬治郎畫伯
細表紙箱入美本・定價壹圓八拾錢
内容二二〇頁・送料六錢
雨情先生の童話集で先生の最も圓熟せる時
代の傑作のみを集めた本書こそ、童話研究
家の座右になくてならぬ名著である。

番 六 九 五 九 五 京 東 替 振
番 七 八 三 五 川 石 小 話 電
社 星 の 金 郷 町 本 京 東 動

の語好大るす表代を界曲作謠童本日
集譜曲謠童星の金

錢六金料送・錢拾八金下以轉三・錢拾六金各科二輯一

第十一輯 夢の國	第十輯 名所めぐり	第九輯 あの町の鳥	第八輯 べんべん	第七輯 お人形さんの夢	第六輯 子守唄	第五輯 夢ご	第四輯 赤い靴	第三輯 青い空	第二輯 一つお星さん	第一輯 人買船
本居長世作曲・野口雨情作謠	本居長世作曲・野口雨情作謠	中山晋平作曲・野口雨情作謠	小松耕輔作曲・達崎龍作謠	本居長世作曲・野口雨情作謠	本居長世作曲・野口雨情作謠	小松耕輔作曲・野口雨情作謠	本居長世作曲・野口雨情作謠	本居長世作曲・野口雨情作謠	本居長世作曲・野口雨情作謠	本居長世作曲・野口雨情作謠
(目曲)	(目曲)	(目曲)	(目曲)	(目曲)	(目曲)	(目曲)	(目曲)	(目曲)	(目曲)	(目曲)
夢のお國、兎が来い、赤い櫻ンぼ、猫さんお手まり、櫻の歌、砂の敷	お乳館、石山寺の秋の月	長柄の橋、柱ぐり、阿彌陀池、宮城野の森、	お人形さん、七つの子、鵜と雀、鶏さん、象の鼻、四丁目の犬	青い空、燕、雨夜の傘、でん／＼鳥、雀の酒盛り、呼子鳥	赤い靴、山彦、三ヶ月さん、姥捨山、朝鮮船屋、眠り龜の子	夢とり、おしやれ棒、つげ子、十と七つ、雲雀の水汲、雀の機織り	子守唄、櫻と小鳥、乙姫さま、はぐれ鳥、意坊主、藪の下道	お人形さんの夢、釣鐘草、啼いた啼いた雉子、芒の穂、お馬のお耳、草遊び、霜柱	べん／＼鳥、螢のお使、仔牛、赤い子馬車、紅殻蛸、さみだれ	あの町この町、雀踊り、木の葉のお船、高野山、鼠の小母さん、謹誠寺の狸囃

番七八三五川石小話電
番六九五九五京東替振

社星の金 郷本京東
町坂板動

金の星

五月號



(通卷第七拾八號)

蛙 遊 び

作曲 本居長世

作詞 野口雨情



三



二

蛙遊び (遊戲唄)

野口雨情

蛙ゲッコ〜

こつち見てお啼き

明日は小豆の

飯煮てやろよ

飯のお惣菜に

肴買うてやろよ

肴はおいしい



よい肴やろよ

蛙ゲッコ〜

こつち見てお啼き

【説明】この「蛙遊び」は幼稚園級から尋常一

二位のお方々のために試みた遊戯唄で

す。甲(蛙)は兩腕を左右にひろげ、ゲッコ

ゲッコと蛙の啼き聲をしながらビヨン〜

と跳ね跳ね、乙(蛙でない方)を追ひます。

乙は甲と一時間程離れて向ひ合つて、この

唄を歌ひながら甲に追ひつかれないやうに

啼き立てながら後へ後へと歩きます。これ

は、大勢でも同じ仕方です。



日本にほんの犬いぬ

菊池寛
岡本歸一畫



加藤清正の虎退治は誰でもよく知つてゐます。だが日本人で、朝鮮へ渡つて、虎退治をした人は、清正の外にも幾人かあります。神功皇后の三韓征伐の後に、朝鮮が日本の屬國であつた頃、腆巴提使と云ふ人が虎を殺しましたが、加藤清正と同じ時、朝鮮へ行つてゐた人に黒田長政の家來で、母里太兵衛と云ふ人がやつぱり虎を退治しました。いや、退治したと云ふよりも、退治しか、つたのですが、相手の虎が、最初の一突きで、脇腹の皮を突き通されながら、槍をつかみながら、だん／＼太兵衛の手許へせまつて來ました。槍を持つてゐるとき



槍の柄をつかみ乍ら、段々側に寄られる事は、非常に困ることです。相手が人間であつても虎であつても同じです。槍を離して刀を抜かうとすれば、その暇に、飛びつかれるにきまつて居ます。それかと云つて槍を持つて居れば、段々手元に來て食ひ付かれるのにきまつてゐます。母里太兵衛は、雄將黒田長政の家來の中で、指折りの勇士ですが、このとき許りは本當に困つてしまひました。ところが丁度その時に折りよく通りかゝつたのが、太兵衛の友達の後藤又兵衛基次です。此の人は後に、大阪城へ入城して、秀頼の爲に、目に餘る關東の大軍を、引き受けて、勇戦奮闘した豪傑ですから皆さんも御存じでせう。ところが又兵衛は、中々意地が悪く、太兵衛が虎に、噛みつかれそうになつてゐるのを見ながら、なかなか助けやうとしません。太兵衛も、勇士ですか





らどんなに危険でも、自分から助けてくれなどは云へないのです。

『おい、なか／＼あなそうだね。』又兵衛はにや／＼笑ひながら云ひました。

『うむ。』太兵衛は、柄で虎を、岩角へ押しつけ乍ら、答へましたがなか／＼苦しそうです。

『おいどうだ。俺が横槍を入れてやらうか。』

『頼む。』太兵衛は弱り込んでゐるのです。

『だがたゞちやいやだよ。所望があるが、さくか。』

『何が所望だ、云つて見ろ。』虎はもう、太兵衛の三尺許り近くへせまつて来てゐます。虎が柄に縋り乍ら、手元へ寄らうとする勢ひは物凄程でした。

『お前の持つてゐる槍が所望だ。』

『ううむ。』さすがの太兵衛も、これには當惑しました。太兵衛の持つてゐる槍は、日本號と云ふ有名な槍です。この槍は太兵衛が、福島正則から貰つた槍で、日本中に名の聞えてゐる名槍です。だが、虎はもうすぐの前に迫つてゐるので、自分の命には替へられませんか、

『うむ仕方がないからやらう。』と云ひました。

それで又兵衛が横合から、一突きに虎を突き殺してしまひました。

こうして殺した虎の皮は、珍らしい朝鮮土産として、太閤様の所へ送つて來ました。

太閤様は珍らしい虎の皮を見て、大變よろこびましたが、しまひに、死んだ虎の皮でなく生きた虎を見たりになりました。それで遂々朝鮮征伐の兵士に命じて、虎を一匹生どりにさせまし



た。そしてそれを、京都の近くの伏見桃山にあつた御殿へ連れて來させました。

今でも動物園にかつてある虎は、生きた餌でなければたべません。よく動物園で生きたにはとりなどを食べさせてゐます。だから此の時もやつぱり生きた餌をやる事になりました。それで手當り次第に犬をとらへて、虎の檻の中へ投げ込みました。犬こそ災難です。

今でも狂犬病の豫防のため、野良犬はよく追ひかけ廻されてゐますが、この時も、伏見桃山の近所の犬は、毎日二三匹づつ虎の餌食になりました。お終ひには野良犬が居なくなると、飼犬まで、どし／＼とさらはれてゆきました。可愛い飼犬をとられた人達は、なげき悲しみましたが、相手が太閤様の家來でありますから皆泣きね入りです。

丁度その時でありました。逢坂山の山のふもとに、一人のお婆さんが住んでゐました。この人の亭主は、獵師でしたが、もう十年も前に死んで仕舞ひました。子供は一人もありません。たゞ良人の獵師が使つてゐた早太郎と云ふ犬が、今でも生きてゐます。これがお婆さんの用を何でもして呉れます。お婆さんに取つては子供の代りにも家來の代りにもなるのです。

お婆さんのお使ひもして呉れます。時々山へ行つて、兎や雉子などをくわへて來てくれます。お婆さんは、身寄りの者は何もないのですが、只この犬のおかげでどうやらこうやら其の日を暮して居たのです。處がある朝起きて御飯をたいてゐると、武士が二三人どや／＼と這入つて來ました。

『おい、お上の御用だからお前の家の犬を連れてゆくぞ。』



そう云ふと、お婆さんの横に寝そべつてゐた早太郎の首に縄をつけて、ぐんぐん引つばつてゆきます。お婆さんは驚いてしまひました。
『もしもしお武士様。その犬だけは、どうぞおゆるし下さい。私には、かけがへのない犬です。』と泣き乍らすがりつかうとしましたが、
『無禮者め、太閤様の御用だと云ふのが分らないか。』と云ひ乍ら、弱いお婆さんを突きとばして、いやがる早太郎を、二三人でぐんぐん引つ張つてゆきました。
むろんお婆さんも、早太郎が、虎の餌食になることが分つて居ましたので、自分の子供をとられたやうにおいおい泣きました。だが
相手が相手ですからどうすることも出来ません。其の上、つ
きとばされたとき、
ひどく胸を打つたので、床の上へ這ひ上
ることは這ひ上りま
したが、そのまゝ床



一〇
に就いて、其の日も明くる日も、起き上る事は出来ませんでした。
其の上早太郎がゐないと、誰も世話をし呉れる人がないので、お婆さんは、たゞ死ぬのを待つより外はありませんでした。

二

お武士に引つばつてゆかれた早太郎は、其の晩一晩つながれて、明く



へたばつてしまふものですが、早太郎は、犬として、長い間、狼や猪と闘つてゐる丈けに自分體の五六倍もある虎の姿を見ながらたゞ低い唸り聲を出すだけで、恐れる様子はちつともありませんでした。

朝、虎の檻に投げ込まれる事になりました。つまり虎の朝の御飯になるわけです。たいていの犬は、自分が殺されることが分ると、悲しそうに泣きわめいて、少しの間も、じつとしてゐないものですが、早太郎は悠々として、御飯を食べ、女々しい泣き聲等はちつとも出しませんでした。



「さあ、今日の犬は大き
いから食ひでがするよ。」
役人はそんな冗談を云
ひ乍ら檻の天井にあって
ある餌をやる口から早太
郎の首筋をつかんで檻の
中へ投げ込みました。虎
は餌物を見ると、今まで
寝込んでゐた體を、さつと立ち上らせました。そして無造作に、のそのそと早太郎の方へ近づ
いて來ました。今まで虎の餌食になつた犬は、虎の檻に這入ると、隅つこの方へちよこまつて
たゞ悲鳴を上げてゐるだけなのですが、早太郎は、兩足を前に揃へて、いつでも飛びつける姿
勢を作り乍ら、虎の方を見て、するどくうなりました。虎は一寸意外に思つたらしく、
「おや、こいつ生意氣な犬だな」と云ふやうに中途で立ちどまり、じつと早太郎を見ました。
早太郎は虎にくらべると大人と子供のやうに小さいのですが、でも普通の犬の二倍も三倍もあ
りました。お母さんは普通の犬でしたがお父さんは山犬ではなかつたかと云はれてゐただけに
眼が鋭く、口が尖つて、普通の犬よりはすつと恐ろしそうです。それが自分の死を充分覺悟し
て、かなわないまでも、相手に最後の、一撃をあたへやうとしてゐるのですから、虎が一寸た



めらつたのも無理はありません。
「おやこの犬はなか／＼強い犬だなあ、だが虎にかゝつちや一たまりもないだらう。」と役人た
ちは面白がつて見てゐました。
虎は一寸氣味わるく思つたが、無論犬などにおそれる様なけだものではありません。一寸と
びかゝる姿勢を作つたかと思ふと、真正面から早太郎に飛びつきました。だがその瞬間、早太
郎は、ばつと體を翻すと、とびかゝつて來る虎の體の上を飛び越してゐました。
虎が怒つてふり返ると、早太郎は、早くも向きなほつて
又前足を前に揃へ乍ら戦ひの姿勢をとつてゐました。役人
たちはわあツと聲を立てました。
「これは面白い。どうも大へんな犬だ。こんな強い犬は初
めてだ。」そう云う聲を聞きつけて、桃山城にゐる武士た
ちがたくさん檻の側へ集つて來ました。虎は、最初の失敗
を何とも思つてゐないらしく、又無造作に、早太郎に飛び
掛りました。早太郎は今度もするりと虎の右をぬけて、虎
の後へまわりました。
虎もすかさず身をかはして、早太郎にとびつきました。
早太郎は檻の格子にすれ／＼に虎をさけて逃げまわりました。





た。其の度に、檻の周囲の武士や役人たちは聲をはなつて叫びました。

「あゝとても面白い。だがいくらもがいてもとうてい助からないだらう。」

「だがこれだけ逃げまわるだけでも感心だ。」

武士達が口々に、こんなことを言つてゐましたが、とう／＼檻の隅に早太郎を追ひつめた虎は、バツと早太郎の脊骨へ噛みつきました。そして、太い前足で、早太郎の體を押へつけました。

「あゝとう／＼やられたな、可哀想に。」

早太郎の體からは見る見る眞赤な血が流れ出しました、虎が早太郎の肉を噛み裂いてゐる音が

ぱり／＼と物凄くひびき

ました。一分、二分三分

そうした恐ろしい光景が

つゞきました。すると、

早太郎を、食ひ裂いてゐ

る虎が、妙に身もだへを

し初めました。

「おいおかしいせ。虎の方



らしいせ。」

早太郎の頭は、虎の體の下へ這入つて見物人に

はちつとも見えませんでした。

した。だがふと氣がついて

見ると虎の咽喉の黄と

白い毛とが交つてゐる處

から、眞赤な血が、ぼと

／＼と檻の床の上へ流れ

てゐるのが見えました。

「おや、虎もやられてゐ

るのだぞ。」

「うむ、たしかにそうだ。

犬が咽喉へかみついてゐるんだ。」

「えらい犬だなあ。」

「まけるな、日本の犬、まけるな。」そう云つて早太郎を應援して呉れる武士もゐました。

早太郎の脊中に見る／＼喰ひさかれて、眞赤な血の中から白い骨が見える様になりました。





一六
だが喰ひ裂いてゐる虎の方も、だんだん苦しがり初めました。早太郎の脊中が、半分ほど喰ひ裂かれた時、虎は急に、今まで喰ひついてゐた口を離すと、立ち上りながら、前足で早太郎の體を引きはなそうとあせりました。
虎が立ち上つたために早太郎の體は見物人によく見える様になりました。早太郎は體を半分噛みさかれながら、虎の咽喉笛へ喰ひついた口を離してゐないのです。虎の前足で、體の半分が引き裂かれそうになつてもまだ口をはなさないのです。
虎は苦しうにうなりながら、早太郎の體を振り離そうとして首を振りました。そして早太郎の體を格子へすりつけました。でも早太郎は噛みついたまゝ離れないのです。虎の咽喉から出る血は段々多くなりました。
早太郎は、眼も鼻も口も虎の血でいつばいになり乍ら、尚、喰ひついたまゝはなれないのです。離れない許りでなく、だん／＼肉の中へ喰ひ入つてゆくのです。虎は苦しうに叫び乍ら、身もだえをしました。
だが虎がどんなに身もだえしても早太郎ははなれないのです。
とう／＼虎は早太郎の體を、前足で押へ乍ら、自分の咽喉をぐつと後ろへ引きました。無理にも、咽喉に喰ひ入つてゐる早太郎の口を離そうとしたのです。
だがそのために、肉の中にあつた早太郎の鋭い牙は突き込んだ刀を引き廻すやうに、美事に、虎の頸動脈にふれたのです。

其の瞬間、虎の咽喉から、一筋の太い血が、烈しい勢ひで流れ出しました。頸動脈が切れると虎だつて人間だつて助りつこはありません。
虎は急に勢ひが弱つて、早太郎をふり離そうと、二三度身悶へすると、もの凄うなりを立て乍ら、床の上へうづくまつてしまひました。脊中から半分に裂かれてゐる早太郎ももう息があるわけはありません。でも、まだ虎の咽喉笛には喰ひついてゐました。

大切な虎が死んだので虎の係りの役人は、蒼くなつて太閤様のところへお詫びにゆきました。でも太閤様は餘りお怒りにはなりませんでした。

『日本にもそんな強い犬がゐるか。人間は日本人の方が強くつても、日本のけだものは、虎には敵はないと思つてゐたが、そんな強い犬の居たのは日本の國のはまれぢや。そんな強い犬は厚く葬つてやれ。犬の飼主へは何か褒美をやれ。』

太閤様の御言葉に依つて早太郎の飼主のお婆さんに、お金を澤山下さる事になりましたが、お役人が、お金を持つてお婆さんの處へ來た時には、お婆さんは、早太郎とわかれた悲しみの爲めに、もう此の世の中には生きてゐませんでした。

(を は り)





要さん辨さん

上京の巻

沖野岩三郎

寺内萬治郎畫

一八

要さん辨さんは、も一度顔を洗ひ直しました。それから朝御飯を食べる時の、はづかしいこと。

朝御飯がすむと、要さんは小さい聲で、

「どうぞ、お辨當をこしらへて下さい。」と女中さんに頼みました。すると、女中さんは、

「汽車でお買ひになる方が、よろしうございませ

二

それから二人は、すつかり支度をして、待つてゐますと、女中さんが、細長い箱を新聞紙に包んで、もつて来ました。

「それが、お辨當ですか。」

辨さんは驚いたやうに申しました。

「えエ、お辨當でございます。」

女中さんは、又たにこくと笑ひました。二人は、さまりが悪いので、さつさと二階を降りて、帳場で會計をすませました。そして、お茶代を二十錢置いて、逃げるやうに、其の宿を出て停車場へ行きま

した。

梅田驛は和歌山市驛よりも、すつと大きいので、どこで切符を買つていいのか、どこから乗車するのか、さつぱりわかりません。二人は、あちらこちらと、大まごつきに、まごつきましたが、やつと出札口を見つけて、新橋驛までの三等切符を買ひました。改札が始まつたので、二人はブラットホームに入



う。」と申しましたが、要さんは、汽車の中で、どうしてお辨當を買つていいのか、それがわかりませんので、

「やつぱり、もつて行く方が、自分の食べたい時、勝手に食べられますから、どうぞこしらへて下さい。」と、頼みました。

一九

つて、後をふり返つてみましたが、多勢の中に長髓
彦の源治はゐませんでした。

『もう、この汽車に乗込めば、追手につかまる氣づ
かひはない。』と思つた二人は、悠々とブリツヂを渡
つて、汽車をまつてゐますと、やがて神戸發の新橋
行の汽車が、けたましく構内に入つて來ました。

要さん辨さんは、汽車が着くと同時に、大急ぎで
飛び乗りました。そして成るべく廣く席をとつて、
『さすが、東京行の汽車だ。この立派なことを見
い。』

『ねえ、和歌山の汽車は、貧乏たらしかつた。これ
は氣持がいい。』

など、話してゐました。其時辨さんは、風呂敷包
を首にしばりつけてゐました。要さんは二人分のお
辨當を風呂敷に包んで、腰にしばりつけてゐました。
間もなく汽車は動き出しました。要さん辨さんの
乗つてゐる到車の中には、立派な紳士や淑女が多勢

た。けれども要さんにも、辨さんにも其の意味がわ
かりませんので、要さんは、

『何ですか。』と聞きました。

『これは三等の切符です。一等に御變更なさるなら、
お二人で十六圓六錢お出し下さい。』

車掌さんは、一寸笑顔を見せながら申しました。

二人のお金を、すつかり出してしまつても、もう
五圓足らずしかありません。それに十六圓六錢出せ
と云はれて、要さんも辨さんも蒼くなりました。

『そんなお金はありません。どうぞ、このまゝ新橋
までお乗せ下さい。』

要さんは泣聲を出して頼みました。すると、車掌
さんは、ていねいに、

『お金を出すことが出来ないなら、三等の車へお出
で下さい。そしたら一厘も出さないで宜しいので
す。』と申しました。

要さん辨さんは救はれたやうに思つて、急いで、

乗つてゐます。その真中に、田舎者の二人が、首へ
風呂敷をしばりつけたり、腰へお辨當包をまきつけ
たりして、ちよこなんと坐つてゐます。二人は何だ
か、はづかしくてたまりません。

しばらくすると、車掌さんが入つて來まして、
『毎度御面倒までございますが、乗車券を拜見い
たします。』と、云ひました。

要さん辨さんには、其の言葉の意味が、わかりま
せんから、ぼんやりしてゐますと、車掌さんは、片
つ端から一々切符を改めて、それに小穴をあけま
した。

『切符を調べるんだぞ。』と要さんは小聲で辨さんに
注意しました。

二人が財布の中から切符を取出して待つてゐるう
ちに、車掌さんは二人の前に來ました。そして、二
人の切符を受取つて、

『一等に御變更ないますか。』とやさしく申しまし

次の車室へ逃げて行きました。

『二等だつたのだ。あんまり、きれいだと思つた
よ。』

『二等へ乗ると、此上まだ十六圓あまり出すのだつ
て、馬鹿らしいネ。一等だつて、三等だつて、さう
違はないぢやないか。』

二人は、ぶつ／＼云ひながら、青色のクシヨンに
腰を卸してゐると、前の車掌さんが通りすがつて、
『あなた方、こゝは二等ですよ。三等はこれから二
つ向ふの車です。そちらへお出で下さい。』と申しま
した。

『おや／＼、又た追つばらはれるのか。』

要さんは小聲でさう云つて、べろりと舌を出しま
した。

『長髓彦の源治が來なかつた代りだよ。』

辨さんは首をすくめながら言ひました。

さて二人は三等室へ入つてみようと、そこには軍

人さんが一杯乗込んでゐて、坐席も何にもありません。やつとの事で真中の方に割込んで、立つてゐますと、背囊を負うて、鐵砲をかついだ軍人さんが、頻りに出たり入つたりします。その爲に二人は押されたり、揉まれたり。要さんはお辨當を押つぶされまいと、並大抵の心配ではありません。

一時間程汽車が進行しました時、一人の士官が来て、

「下車だ下車だ、全員下車だ！」と號令するやうに云ひました。其時要さん辨さんは、列車に残つてゐればよかつたのですが、全員下車だと云つたので、自分達も下車して別の車に乗かへるのかと思つて、軍人さんと一緒に下車しました。ところが軍人さんたちは、みんな鐵砲かついで改札口の方へ出てしまひました。

「要さん、吾々は降りるんぢやないぞ。乗つてゐるんだよ。」



ちます。けれども辛抱しなければなりません。お腹が空きました。乗客はみんな、お茶を飲みな

がらお辨當を食べてゐますが、要さん辨さんは、どこで、どうしてお茶を買ふのだから知りませんから、

辨さんは大聲で呼びました。けれども要さんは不安でたまらないから、鐵道の役人らしい人に、東京行はこれに乗つて行けばいいのかと尋ねました。

「さうです。早くお乗りなさい。直ぐ發車ですよ。」と云はれたので、二人は太急ぎで乗込みましたが、いつのまにか車内はもう乗客で一杯でした。どこを尋ねたつて、坐席一つありません。

要さん辨さんは、怨めしうに、ぼんやり立つてゐましたが、二時間三時間たつうちに、もうたまらなくなりました。

「辨さん、こゝへ坐らう。」

要さんは落散つてゐた古新聞を拾つて、それを通路へ敷いて、その上に坐りました。辨さんも坐りました。

「御免なさい、御免なさい。」と云つて、ひつきりなしに、乗客が、要さん辨さんの肩の上を越えて行きます。下駄や靴の泥が、其のたびに二人の着物に落

通り路へ坐つたまゝ、お茶無しでお辨當を食べはじめました。

「要さん、この辨當箱は、上手に出来てるネ。」

辨さんは感心したやうに、さゝやきました。

「ねえ、釘一本使はないで、うまくこしらへたものだ。御飯をきれいに食べて、この空箱を東京の兄きに、土産にしようぢやないか。」

「それは善い事を考へた。さうしませう。」

二人は、きれいに御飯を食べて、お辨當箱をいねいに風呂敷に包みました。そのお辨當箱といふのは、宴會に使ふ折箱でした。

要さん辨さんの生れた村では、折箱を知つた人は殆どありません。知つてゐるのは、丸いお辨當、四角な重箱だけです。

折角景色を見ようと思つて、わざ／＼大阪を朝立つやうにしたにもかゝはらず、景色どころか、腰を

かける場所へありません。それでも夜になると、そのまゝぐすり寝込んでしまひました。

『品川……品川……』と呼ぶ聲に驚いて眼を覺した要さんは、直ぐ辨さんを揺り起しました。辨さんの風呂敷包は、首に縛りつけてありましたが、要さんの膝に載つけてゐた大事の大事の、兄さんへのお土産がありません。

『辨さん辨さん、お辨當箱が無い！』

要さんは顔色を變じて叫びました。二人は起ち上つて、きよろ／＼尋ねてゐますと、三間程向ふに、たしかに夫れらしいものが見えます。

『あつた／＼』と云つて、要さんは走つて行つて拾ひ上げましたが、これはしたり、大事の大事のお土産は、べしやんこに踏みびしがれて、風呂敷は泥だらけです。

『困つたなあ、困つたなあ。』と云つてゐるうちに、汽車は新橋驛へ着きました。

う。

『さうだなあ、では人力車に乗らう。』

要さん辨さんは驛前の人力車に乗りました。二人は人力車の方が、鐵道馬車よりも五六倍高い賃金を拂はなければならぬといふことを知らなかつたのです。

傳は銀座通を真直ぐに走りました。始めて西洋作りの家を見た二人



『新橋だ、新橋だ。』

二人は、あわてゝ汽車を出ました。その時辨さんは、

『しまつた、僕の羽織の紐が……』と叫びました。氣づいてみますと、要さんの羽織にも紐がありません。

『しかたがない。このまゝ行かう。』

二人は構外へ出ました。所が、さつぱり方角がわかりません。

『要さん、君の兄さんのゐる所は、どこだい？』

『下谷練塀町の東洋館といふ家だよ。』

『こゝから、どうして行く？』

『さあ、あそこを馬車が走つてゐるネ。あれへ乗らうか。』

要さんは其頃あつた鐵道馬車を指さしながら云ひました。

『馬車はえらい人の乗るもんだよ。人力車にしよ

は、目が廻るやうに思ひました。

程なく傳は練塀町の東洋館に着きました。

見ますと、それは大きな旅館でした。入口の門に新しい表札が一枚掛つてゐます。それは『警視廳巡查海谷亮太』と書いてありました。これは要さんの兄さんに當る海谷巡查が、此の旅館の一室に下宿してゐるので、旅館では物貰ひやユスリが來ないやうに、特に表へ巡查の肩書ある表札をかけて置いたのです。その代り海谷巡查は、下宿料を四圓五拾錢だけ拂へばいいことになつてゐたのです。そんな内情を知らない要さんは『兄きも出世したものだなあ。』と思ひ乍ら、すん／＼と玄關さきへ行きました。そして、

『海谷亮太はゐますか。』と申しました。すると番頭さんは、ていねいな言葉つきで、

『唯今お役所へ御出勤ですが、御用でござい

ましたら、電話でお知らせいたしませう。」と申しました。すると、要さんは何の氣なしに、

『紀州から堺と海谷とが来たと言つて下さいませんか。』と申しました。番頭さんは、『かしこまりました。』と云つて、直ぐ電話をかけました。要さん辨さんは、そこで又た不思議なものを見たのです。それは汽車、電氣燈の次に現はれた電話です。

『あんな所から、警視廳まで話が通じるのかなア?』と二人は、呆氣に取られて電話室の方を見てゐますと、やがて番頭さんは、電話をきつて、

『さ、どうぞお上り下さい。』と、それはそれは、ていねいに申しました。女中さんが二人出て來ました。宿のお妻さんらしい人も出て來ました。

田舎綿の木綿で、しかも紐無羽織を着た二人は、三階の十畳へ案内されました。絹の坐蒲團、黒塗の丸火鉢、黒檀の机、繪で見たばかりの殿様の凭れる脇息、話にきいてゐた呼鈴。床の間には大理石の眞

白い鷺鳥の彫刻があります。

『お客様、どうぞお風呂をお召し下さいまし。』と一人の女中が云ひました。

『え、お風呂に?』

要さんは眼を圓くしました。お風呂といふものは、夜でなければ浴るものでないと思ひ込んでゐる二人には、女中さんの言葉が不思議でたまりません。

『お疲れでございませうから、ごゆっくり、お風呂にでもおはいりなさいまし、その間に御飯の用意をいたして置きますから……』

『もうお風呂が沸いてゐますか。』

辨さんは念を押して問ひました。すると女中さんは、

『ええ、もう早あくから、わいてございます。』

と云つて、二人を浴室へ案内しました。要さん辨さんは、まだセメントを見たことがありません。飾瓦も見始めです。

『何と立派なお風呂だなあ。』と云つてゐるところ

へ、風呂番の男が來ました。そして二人の脊をていねいに洗つてくれました。

お風呂を出て、坐敷へ行つてみますと、これはまあ、何といふことです。二人に對して四つのお膳が出てゐます。要さんも辨さんも二の膳といふことを知らないのです。お膳の前には小さい盃があります。女中さんはお銚子を取りあげて、

『どうぞ、お一つめしあがれ。』と申しました。要さん辨さんは顔を見合せました。

『辨さん、飲もうや。』

要さんは、思ひ切つたやうに、さう云つて盃をさし出しました。續いて辨さんも盃を取上げました。

二人は顔が眞紅になるまでお酒をのんで、それから御飯を食へました。生れて以來、食へたことの無い御馳走ばかりです。

食事のあとで、二人は縁側へ出ますと、そこには二脚の簾椅子がありました。で、二人はそれに腰を

かけて、賑かな町を珍らしさうに見てゐました。

『あれが二頭馬車だぞ。』『あそこへ軍人が來た、士官だ土官だ。』二輪車が來た。よく轉がらないもんだなあ。』など、云つてゐる所へ、金光燦爛とした一

臺の馬車が、向ふから走つて來ました。

『おい、要さん、立派な馬車だなあ。あれは大臣の乗る馬車だらうか。』

『ねえ、立派な馬車だなあ、金の飾がしてある。あれは天子様から偉い人に下賜された恩賜の馬車かも知れないぞ。』言つてゐる所へ女中さんが、お茶を入りに來ましたので、

『ねえさん、今、この前を通るあの立派な馬車には、誰が乗つてゐるんですか。』とききました。すると、女中さんは硝子越にのぞいてみて、

『あれは葬儀馬車です。死んだ人のお棺を運ぶ馬車です。』といつて可笑しくて可笑しくて、たまらないやうに笑ひました。(つづく)



（傳説巡禮）

藤戸の笹無山

織田 小星
樺島 勝一 畫

二八

謡曲で「藤戸」と言へば源をさそう悲しい物語の一つでありますが、其備前藤戸の笹無山には、それにからまる傳説が今に残つて居ります。

あの一の谷の戦に、平家の一門おほかた討たれ、宗徒の侍また半ばを失つて、再び旗をあげ勢を盛り返すの望みもうすく、嘗ては九重の雲の上に春の花をもてあそんだ平家の全盛も今は夢と消えて、風寒

い屋島の浦に秋の月を悲しむ運命におちた時、源氏は天下の政權を一手に握つて、今こそ平氏の殘黨を木つ葉微塵に攻め亡ぼさなければならぬと、三河の守範頼を大將軍に押し立て、平家追討の軍三萬餘騎、白旗を風になびかせ都を立つて播磨の室に到着したのは元暦元年九月半でありました。

之を聞いた平家の大將軍、小松の新三位の中將資

盛は、悪七兵衛景清などを先頭に立て、五百餘艘の兵船に打ち乗つて備前の兒島に押しよせたので、室の源氏の軍隊は直ちに行動を起し、佐々木の三郎盛綱、土肥の次郎實平の精鋭いち早くも、藤戸海峡を隔てた兒島の對岸備中日間山へ陣地を布き、幅員二十餘町の潮流の速い海峡を中に挟んで源家の白旗と平家の赤旗とは、こゝに睨みあつたのでありました。

當時瀬戸内海を航行する船と言へば、今の様な蒸汽船はもとより無く、造船術もそれ程發達してゐなかつた時のこと、船の数も少ないのでありましたが、而も平家の敗軍が海を渡つて退却して行く時そのあたりに有つた大形のは大部分徴發されてしまつたのでせう、源氏の兵が浦づたひにいくら舟を探しても一艘だになく、只目と鼻ほどに波を隔てた兒島に二千餘騎の敗兵を眺めながら徒に日を送るばかりでどうすることも出来ませんでした。

その有様を見て取つたか、其月の二十五日の晝前のこと、平家方の若い兵どもが小舟に乗つて對岸近くまで漕ぎよせて來ました。

さて何をやるのかと見てゐると扇を出してあふぎながら「さあ早く、こゝを渡つて兒島まで來い」と人を馬鹿にした様に招きますので、源氏の兵どもも黙つてはゐず敗けずに言ひ合ひましたが、前に申した様に舟が無いため手の出しようもなく、じだんだ路んで口惜しがるだけでありました。

此の様子を眺めてゐたのは佐々木の三郎盛綱です。若しこの儘に日數を送つて敵の嘲を受けて居たならば部下の兵の士氣もくちげ自分の威令も行はれなくなるのは必定で、それに日間山の守を命ぜられ陣を布いて而も敵を攻めるの術もないとなれば、源家一方の將としての才能も疑はれ、其實を負はなければならぬと考へたのでせう、盛綱はどんな事をしてもせひ藤戸の海峡を渡らなければならぬと考

へては、もう一刻も猶餘は出来なくなりました。そこで兵どもに手分けをし、土地なれた者を探させた處、一人の若い漁夫で此の海の様子をよく知つてゐる者があると聞き込み、その男を陣中につれて來ました。盛綱は喜んで其若者を側近く呼び寄せ、人を拂つてから、

「實は折り入つて頼みがあるのだが、せひ聞いてくれ。それは今平家の兵が立こもつてゐる彼の兒島に渡らうと思ふのだが、浦には舟はなし、さればとてこのまゝにして徒に日を送る様では武士の名譽にかかはる次第、此の際せひお前の智慧を借り何とかして島に渡りたいと思ふのだ。」と言葉を低くして頼みますと、漁夫は暫くためらつてゐましたが、

「そりや方法が無いではありませんが、うつかり申しまして若しそれが平家方に知れたなら私共の命は御座いませぬ……」と、もち／＼してゐるのを見て盛綱は、

様な氣がします。

やがて二人は裸になりましたが、若い男は何處から持て來たのか笹の葉を抱へて先にたちながらザブザブと水の中に入つて行つては、目標にと其笹竹をたてゝ行きます。盛綱も背中に刀を斜に背負ひながらすぐ後からついてゆきましたが、男の言つた通りそれほど深くはありませんでした。腰まで水にひたされたと思ふと又急に淺く、鬢のぬれるほどの所もあれば膝位の所もあります。身丈の立たない深い所は游いで又淺瀬に辿りつき、瀬戸の半ばも過ぎた頃、前にたつた漁夫は振り返つて、

「お武家様、こゝまで參ればもう向ふに渡つたと同じ事で御座います。これから南は今迄よりを淺くすつと樂で御座います。それに今向ふには平家の兵が弓矢をかまへて待つて居りますので、若し二人が見つかりでもしうものなら、いくらお立派なお武家様でも裸ではどうとも致し方が御座いませぬ。參り

三〇
「いやそんな心配なら無用である。其方法さへ教へてくれるなら速刻お前を侍にとり立てゝ褒美を思ふまゝに取らせてやる。」となだめ、すかして頼むので、漁夫もいつか其氣になり、

「實は藤戸の海峡は一寸見ますと一色の海に見えますが、其中に恰度、川の瀬の様な所が御座います。月の出ばなにはその瀬が東に現れ、沈む頃には西に出てまゐりますが、此の事を知つてゐる者は浦でも殆んど稀で、淺瀬のあはひ海の面十町ばかりも御座いませうか、お馬に召されたなら譯もなくお渡りなされる事と思ひます。」と言ふのを聞いて盛綱は小躍りして喜びながら、

「辱けない、有り難い。それでは今晚、闇を幸ひ、人目をさけてお前と二人で其實際を測つて見たい。」と直垂、小袖、大口白鞘巻などを漁夫に與へ、夜の暗さにまぎれて海邊へと出て來ました。松の小松を吹く濱風にも秋立つて、くだける波の音も心冷たい

ました淺瀬には笹の目標も立てゝ置きましたから、今日はこれで濱にお戻りなされた方がよろしう御座います。」と言ふので盛綱も血氣の勇は戒めて、戻ることにしました。

二人は速い潮流にとかく足をさらはれそうになるのを踏みしめて、もと來た浮州や、岩根を辿つてゆくうち、ふと盛綱の心に浮んだ事があります。

「フウ、そうだ。明日自分はこれで兒島への先陣の功を立てる事が出來て、さすがは佐々木殿じやと武士の面目をほどこす事が出来るが、若し此の淺瀬の事を外に知る者があれば今迄の苦心も水の泡だ。功を他人に奪はれた上部下の兵どもには笑はれすごと旗を收めて歸る様なことが有たら、特に藤戸の守りを命ぜられた大將軍公に對し何の面目あつて顔が合せられよう。そうだ此の藤戸の淺瀬は少くとも明日まで秘密にしなければならぬ。然しそれに付て心配なのは此の若者だ。淺瀬の秘密に過分の褒美



を貰つた味を覺
 て、他の者にも
 その秘密を洩す
 様な事が有つた
 ら、それこそ此
 の盛綱の運命は
 決つてしまふ。
 そうだ……不憫
 だが、そうだ……
 ……と彼は何か
 心に決めた様子
 で、急に前に行
 く若者を呼び止
 め、
 「いやほんとに
 御苦勞で有つ
 た。之で私も安



心した。所で此
 の淺瀬の秘密は
 味方の軍の浮沈
 にかゝるはもと
 とより、此の盛
 綱生涯の運命の
 決する所、その
 秘密を守るため
 可哀相だがお前
 の命を貰つた
 ぞ。」
 と言ふと『ア
 ツ』と驚く若者
 の胸には光る水
 の及、二刃刺し
 て浮洲の此方水
 の深みへと屍を

沈めてしまひました。

明くれば二十六日、平家方の兵どもは又小舟に打ち乗つて漕ぎ出し扇をあけて源氏の兵どもをあざけりましたが、かねて浅瀬の案内知つた盛綱は緋絨の鎧着て連錢革毛の馬に跨り、家の子郎黨共に七騎笹竹の目標を辿つてザンブ／＼と白波蹴立て、突進しましたので、遙に之を見てゐた三萬餘騎の源家の將卒、彼處に浅瀬ありとばかり一勢にくつわを並べて突撃に移り、日の暮るまで戦つてとう／＼兒島を占領し、平家の軍兵は兵船に逃れて沖に浮び其夜讃岐の屋島へと漕ぎ退いてゆきました。

盛綱が藤戸の先陣華々しく頼朝の威狀に武士の面目をほどこした時、一方藤戸の瀬戸に恨を吞んで沈んだ漁夫に一人の老母が残されてゐました。あの夜獨り子が佐々木の陣中に伴はれて行つたまゝ待てど暮せど家に戻つて來ないので、不審に思つてゐましたが、その中に惡事千里を走るの例にもれず、瀬戸

の秘密を教へたのが仇となり、何の科もないのに盛綱に胸を刺されて海の藻屑と消へたその噂がそれからそれへと傳はつたので、聞いた老母の嘆きは一通りではありませんでした。

よる年波を今日まで生き永らへて、漁村の苦しい生活に餘命を保つて來たのも只可愛い子供が有るから、それが無慘な最後を遂げて再び歸らぬ彼の世の旅にあると聞いては、どうして盛綱を恨まないでゐられませう。老の涙の泣き暮れ泣き明し、氣も狂亂の如くよもぎと髪をふり亂し、裏の小山にかけ登ると其處一面に茂つてゐた笹の葉をむしり取ては又むしり捨て、呪の言葉を浴せては笹の根を一本一本引き抜いてしまつたので、笹はそのまゝチリ／＼に枯れ、老母の呪そのまゝ小山には再び笹の影すら無く、又植えても育たないと言ふ所から後の世にその小山を笹無山と呼ぶ様になつたと言ふことで、今でも旅人の袖をしぼる話の一つとなつてゐると言ふ事でありませう。(をばり)

親不知子不知 (推薦)

東京 河野 壽 朔

親は子知らず 子も識らず

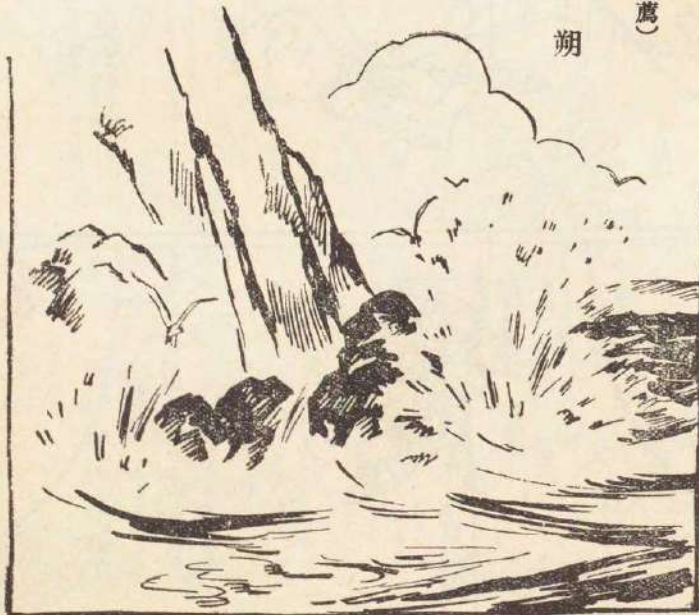
千鳥も子知らず 親知らず

こゝは越後の 親不知

子不知悲しい 波の音

安壽の母さま 佐渡ヶ島

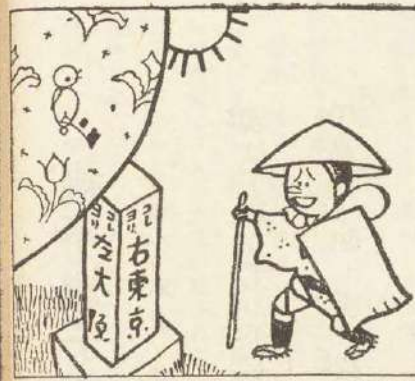
子千鳥かなしい 波が打つ



コロサ座

四

正直な人が居て旅をしました。



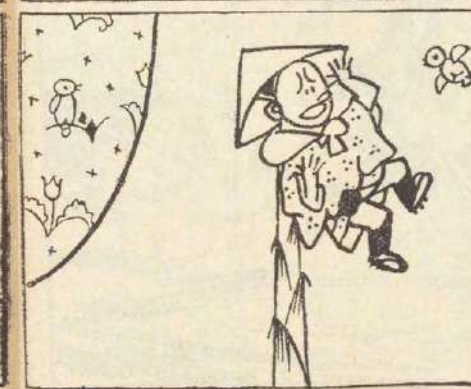
二

途中で、日が暮れて大暗い。竹藪の中で終る事になりました。



三

翌朝。鳥の聲で目が覚め、吃驚いたしました。と云ふのは一晩の内に、箱が伸びて、旅人は空へ突上げられてゐたのです。



四

スル／＼と降り様としたが、オットドッコイ。下には虎が待ち構へてゐました。仕方なしに又箱の上で日を暮しました。



五

夜になつても虎はどきません。そして、晝間起きてゐましたから、虎もつひトロ／＼と目てしまひました。



六

*嬉しかつたに違ひありません。

明ける夜、虎の周りに箱がのりついて居る。旅人は手打つて、嬉しうた。*



愛犬物語

小島政二郎

寺内萬治郎畫



三八

十

しかし、北地の旅行のことについてはなんにも知らないメルシードは、キツバリ頭を振つて聞き入れませんでした。その間に、チャールスとハルとは、どうにかかうにか、荷物を橋の上に山のやうに積み上げました。

「それが引ッ張れると思ふのかい。」と、見物の男の一人がまた云ひました。

「引ッ張れなくつて。」と、チャールスが景氣よく答へました。

「さうかい。そりやまあ結構だ。唯わしは少し頭が重過ぎやしないかと思つただけだよ。」

チャールスはそれには答へずに、彼等に背中を向けて、荷物の上へわたした縛り革をウン／＼云ひながら引き締めてゐましたが、不馴れの悲しさには、ちつとも締つて来ませんでした。

それを見た見物の男の一人が、また、

「なあに、大丈夫だよ、犬がいゝから、その位の大荷物は引きすつて行くよ。」と、からかひ面に云ひました。

「えゝゝ、さうですとも。」

今度はハルが、わざと丁寧に冷かし返しました。

やがて、荷物の方の支度が出来てしまふと、バツクを始め一同の犬が、それ／＼の位置に革具を附けられました。ハルは片手に鞭を振り上げて、

「ムツシュ。そら、ムツシュ。」と、號令を掛けました。

犬は一齊に胸革に乗りかかつて、ウンと力を込めました。が、すぐ綱を弛めてしまひました。彼等の力では、とても橋を動かすことが出来ないのです。

「畜生、怠けてゐるな。」

ハルは腹を立てゝ、矢庭に犬を鞭で打たうとしました。

「あら。」それを見たメルシードが、あわてゝ鞭を取り上げてしまひました。

三九

「ハルさん。そんな亂暴なことをしては駄目よ。さ、これから先き、決してそんなひどい目に合はせないと約束しなければ、私この鞭を返さなくつてよ。」

「姉さんは犬のことをなんにも知らないから、そんなことを云ふんだよ。まあ、僕にまかせてお置きよ。奴等は怠けてゐるんだよ。鞭をくらはせなければ動きやしないよ。犬なんて、そんなものなんだよ。誰にでも聞いてごらん。あの人達にでも聞いてごらん。」

すると、見物の一人が、

「全くのところ、奴等はヘト／＼に疲れてゐるんだよ。本當を云へば十日もユツクリ休みたいんだよ。」

「休みなんぞくれて堪るもんか。」と、ハルはブンブンして云ひ放ちました。

彼は姉の手から鞭を取り戻すと、いきなり、

「これでも引かないか。」と、犬を打つて廻りました。彼等は仕方なしに、また胸革に乗りかゝつて、

ないよ。梶棒にウンと力を入れて、右と左とにゆすぶつてごらん。」

この忠告には、ハルも従はない譯には行きませんでした。

「ムツシュ。そら、ムツシュ。」

今度は、流石の重い橋も、にじり始めました。ハルは大喜びで、鞭を打ち振りながら、犬達を勵ました。

百間ばかり行くと、路が曲つて、急な坂になつてゐました。この頭の重い橋を、そこでチャンとして行かうと云ふのには、餘程熟練した腕前がなければ出来ないことでした。ところが、ハルには勿論そんな腕があらう譯がありませんでした。曲り角を過ぎる時、橋は忽ち引ッ繰り返つて、荷物の半分ばかりは、ゆるい縛り草の間から崩れ落ちてしまひました。

しかし、犬達はとまらうとしずに、横倒しになつたまゝの橋をドン／＼引ッ張つて行きました。彼等は、これまでに受けた虐待と無理な積み荷とのた

踏み堅めた雪の中に足を滅り込ませながら、力のあリツたけを注ぎかけました。しかし、橋は錨のやうにビクとも動きませんでした。とう／＼力盡きて、犬はハア／＼息を切らしながら立ちどまつてしまひました。

「畜生、まだ怠けてゐるか。」

鞭は情容赦なく打ち卸されました。メルシードは堪へ切れずに、

「ハルさん。ちよつと待つて。」と押しとめて、雪の上に、バツクの前に膝をついて「まあ／＼、可哀想に……。なせお前達はもつときつく挽かないの？さうすりや、あんなに打たれやしないのに。」

その時、見物の三人男の中の一人が、

「ねえ、お前さん達がどうあらうとわし達は構つたことぢやないが、犬が可哀想で見えてゐられない。なあ大將、その橋を少しズラしてやつてごらん。さうすりや、犬は大助りだ。この儘ぢや、まるで迂り板が凍り附いてしまつてゐるんだから、引けよう譯が

めに、怒つてゐたのでした。殊に、バツクは一番腹を立てゝゐたので、橋の輕くなつたのを幸ひ、逸散に走り出しました。それにつれて組犬全體も走り出しました。ハルはあわてゝ、

「ホー、ホー、止まれ、止まれ。」と叫びましたが、バツクは耳にも入れませんでした。そのまゝ、橋はスカグエーの町の本通りを突き進んで、残りの荷物を、そこら中に振り撒いてしまひました。

十一

親切な町の人々が犬をつかまへて、振り散らされた荷物を集めてくれたばかりでなく、荷物を半分にして、犬の數をもつとふやさなければ、とてもドーソンまでは行けないだらうと教へてくれました。で、三人は仕方なく、その忠告に従つて荷物の整理を始めましたが、中から罐詰が出て來たりすると、町の人達はをかしがつて笑ひました。橋の永旅に、罐詰は一番不向きなものとされてゐたからでした。

「半分でも多過ぎらあ。捨て、おしまひなさい。それから、そのテントもよしておしまひなさい。それから、そのお皿はどうする氣なんだい。誰がどうして洗ふと云ふんだい。お前さん達は、汽車にでも乗つて行く氣でゐなされるのかね。」町の人達は、手傳ひながら笑つて云ひました。

こんな譯で、餘計な品物は片ツ端から選り捨てられました。それでも、まだ随分ありました。で、チャールズとハルとは、夕方出掛けて行つて、六匹の外國犬を買つて來ました。これで、合計十四匹になつた譯でした。

この無經驗な三人は、櫛犬を十四匹持つてゐると云ふことが自慢でした。成程さう云へば、外の多くの櫛が峠を越えてドーンンに向ひ、或はドーンンからやつて來るのを見ましたが、十四匹と云ふ多くの犬を連れた櫛はまだ一つも見ることがありません。しかし、本當を云ふと、北極旅行をするのに、この櫛に十四匹の犬を附けないと云ふのには譯があるの

でした。それは、一つの櫛では十四匹分の食物が運べないからです。しかし、チャールズもハルも、この大事なことを知りませんでした。

翌朝遅く、バックは長い組犬を導いて、町の通りを進んで行きました。彼も仲間も、他を噛むでもなく、挑むでもなく、一體に元氣が少しもありませんでした。その上、バックは、この二人の男と一人の女が頼みにならないことを、ボンヤリと感じてゐました。

實にダラシのない旅行でした。路は拂らないし、案の定食物は不足して來るし、真先に、外國犬が斃れてしまひました。元の組犬だつて、二千五百マイルの長旅の疲れが、まだ本當に直つてゐない上に、空腹のために、誰も彼も夢のやうにヨロ／＼してゐました。

とう／＼或日、ダグズが斃れ、續いてビリーが弱つてしまひました。これで、十四匹の犬が六匹になつてしまつた勘定でした。どの犬も／＼、みんな骨



と皮ばかりになつてしまひました。それでもバックは猶先頭に立つてゐましたが、しかし、衰弱のためには目も昏んでゐる時が多く、ただ僅に朦朧たる足觸りで、まぼろしの如き雪道の歩みを續けてゐました。時は、麗かな春が近づいて來てゐました。すべての物が溶け、ゆるみ、割れようとしてゐました。ユートン川に張り詰めてゐた一面の水の上に、處々風穴が出来たり、龜裂が入つたりし始めました。丁度その頃、この三人の一行は、漸く危険な川の縁まで辿り着くことが出来ました。見ると、そこに、一人の男がキャンプを張つてゐました。それは、ソートンと云ふ人でした。――橋は、このソートンのキャンプの前まで辿り着くと、バツタリ止まつて、それと同時に、犬がみんな打ち殺されたやうに倒れてしまひました。

「どうだらう、渡れるだらうか。」かう尋ねたハルに答へて、ソートンは、斧の柄を削りながら、「命が惜しかつたら止めるこつたね。」と、ブツキラ棒に云ひました。一目見るが否や、ソートンは、

しかし、犬達は、命令通りに起き上らうとしませんでした。ハルは痼癪を起して、鞭を激しく振り卸しました。それを見たソートンは、思はず唇を噛み締めました。――痛さに堪へ兼ねて、ソルが第一番に這ひ起き、その次に、ジョーが鳴きながら立ち上り、バックは蹶けて二度立ちをこねて三度にやつと起き上ることが出来ました。

しかし、バックばかりは、倒れたところにちつと寝つたまゝ、最後まで動かうとしませんでした。ビシリ、ビシリ、と幾度も鞭が體を打ちました。――彼は喘ぎもせず、跳きもしませんでした。――ソートンは、堪り兼ねて何遍か口を出さうにしましたが、また氣を變へて黙つてしまひました。彼の目には、涙が溜まつてゐました。鞭の音が尙續くのを見て、彼は矢庭に立ち上りましたが、決心がつかぬらしく、そこを رفتりつゝ戻つてゐました。とうとうハルは痼癪を起して、鞭を捨て、棍棒を振り上げました。それでも、バックは動かうとしませんでした。彼は、仲間と同じやうに、やつと起き

この三人の旅行家が、決して人の忠告を聞き入れる人達でないことを知つたのでした。

「やつぱりさうかね。もう少し前に逢つた人もさう云つてゐたよ。しかし、さう云はれても、僕達はやつて來たのさ。」ハルは、このしまひの文句を、さも得意さうに云ひました。

「みんなの云ふのが本當さ。氷はもういつ割れるか知れやしない。馬鹿でなくつちや、今頃この川を渡る者なんかあるまいよ。わしなんだあ、アラスカ中の金をみんなくれるツたつて、この氷の上を渡るのは御免だね。」

「そりや君が馬鹿でないからさ。僕達は、どうしてもドーンンまで行かすにはおかない決心で來たんだからね。――さあ、起きろよ、バック。起きろ。」

ソートンは、そのまゝ黙つて、斧の柄を削り續けました。馬鹿が馬鹿をやるのに掛り合ふのは馬鹿だと考へたからでした。二三人の馬鹿がゐたつてゐなくつたつて、世の中の運びに變りはあるまいと考へたのでした。

上るだけの力はありませんでした。しかし、仲間と違つて、彼はもう起きまいと決心をしたのでした。彼は河岸へ着いた時から、何か危険の近附くのを感じてゐました。今主人が追ひやらうとするあの向うの水の上に、必ず何か危険が待つてゐると感じたのでした。

もうヘトヘトに衰弱し切つてゐるので、雨のやうに打ち卸される棍棒の痛さも、左程には感じませんでした。たゞ微かに、自分の體に棍棒のおつかる音が聞えるだけでした。しかも、それは自分の體ではなくて、遙か遠いものを打つてゐるやうな感じでした。バックは氣を失ひかけてゐたのでした。

その時、ふいに、ソートンが何とも分らぬ叫び聲を上げて、棍棒を振り上げた男へ飛びかゝつて行きました。ハルは、倒れかゝる大木に打たれたやうに、激しく撥ねとばされました。

ソートンは、バックをうしろに庇ひながら、「もう一度この犬を嚴つて見ろ。貴様を殺してしまふぞ。」と、恐ろしい目をして睨みつけました。

(つゞく)



笑はぬ鐵之助

神山 寛

水島爾保布畫

外にはジメ／＼と暗い五月雨が降りしきつて、夜は次第に更け渡つて來ましたが、松前鐵之助は唯一人まんじりともせず宿直の室に坐つて若君の守護をして居ました。

近頃此の伊達邸には恐ろしい事件が持上つて居ま

かしかつたので鐵之助は思はずぶつと噴き出して、『何だ、小鼠一匹がそんなに恐いかい、これはいい眠氣さまだ。アハハハハ。』

と笑ふと、からかはれたお茶坊主は眞赤になつて忌々しさうに鼠を追駆け始めました。鼠はびよんびよんと身輕に跳廻つて又室の外に逃げて了ひます。その格構が又更に滑稽なので鐵之助はいよ／＼おかしくなつて來ました。

『おい鼠を相手の喧嘩はよせ。見つともないぞ、ウフフフ』

お茶坊主はすつかり悄氣切つてこそ／＼と疊にこぼれたお茶を拭き取つて、室を退きました。鐵之助は今の光景を思ひ出すと、一人になつてもどうして笑ひが止らずに、くすくすと忍び笑を續けてゐました。

其時、突然彼の後ろの襖を破つて電光の様な速さで一條の槍が首筋目がけてつき出て來ました。これ

四六

した。それは伊達侯の御分家で伊達兵部といふ心の邪な人が原田甲斐といふ腹黒い江戸詰家老を手先に使つて、本家七十萬石の横領を謀み、隙があれば未だいとけない世嗣の鶴千代君を殺さうとかつてゐる事です。忠義な家來達はこの恐ろしい企みを看破つて夜も日も寝ずに若君を守つてゐました。其爲に鐵之助は今夜も斯うして宿直をしてゐるのです。

眞夜中近くなつた頃鐵之助は何だかしきりに眠たくなつて來ました。これはいけないと思つたのでボン／＼と手を叩いてお茶坊主を呼んでお茶を持つて來る様に言ひつけました。間もなくお茶坊主がお茶を運んで來て鐵之助の前に置かうとしますと、チロ／＼と障子の透間から一匹の小鼠が匍出して來て何う血迷つたものかいきなり坊主の足に飛びつきました。

『キヤッ！』氣の小さいお茶坊主は吃驚して叫ぶとお茶をひつくり返して了ひました。餘り其様子が

が他の人なら聲も立て得ずにころりと參つた所でしたが、流石は昔に聞えた武術の達人、突嗟の氣合に身を轉はして空を流れた槍先の千段卷きをえいと掴むが早いが、早くも立ち直つて抜打に襖に斬りつけました。すると悲鳴と共に聲と倒るる人の氣配がしたので、襖を蹴破つて次の間に這入ると、其處には黒装束の怪しい曲者が倒れてゐます。

『狼藉者だ。鐵之助は叫んで手負ひの黒装束を押へつける。と、寢て居た人々が押取り刀で馳せつけました。顔を検めて見るとそれは原田甲斐の家來で秋葉大作といふ忍術使です。

『貴様は何人に頼まれて御邸に忍び込んだのだ。さあ眞直に白狀してしまへ。』

鐵之助が睨みつけますと、曲者はいきなり舌を噛み切つて、ばつたりと前に突つ伏して了ひました。後で身體を調べると懷ろの中から鼠を入れた袋が出て來ました。大作は先づ小鼠を室に放つて鐵之助に

四七

油断させたのです。

翌朝鐵之助は、大作の死骸を持つて原田甲斐の家に乗り込みました。今日こそ動かぬこの證據をつきつけて、甲斐や兵部の惡計を發いてやらうと思つたのです。

併し甲斐は其位の事に恐入る様な奴ではありません



「その大作とか言ふ奴は不都合の事があつて、すつと以前に邸を逐ひ出したものだ。多分何か盗みにでも行つたものだらう。それにしても宿直の武士たる者が、殿様の御寢間近く迄曲者の忍び込むのを知らずに居たとは何たる油断ぢや。後で嚴しい罰を申付くるから其積りで居れ。」

と反對に烈しい權幕です。何しろ當の曲者が死んで了つたので何うする事も出来ません。鐵之助は齒噛みして口惜しがりましたが、遂に百日の閉門といふ罰を申渡されて、屋敷にとち籠らねばなりませんでした。

二

鐵之助は殘念で殘念で仕方がありませんでした。その上氣懸りなのは若君の身の上です。政岡といふ氣丈な老女や其他の人々がついては居ますが、腕達者な者は一人も居ないので、先夜の様な手剛い曲者



が忍び込んだら危い事この上ありません。

鐵之助は或夜こつそり邸をぬけ出して、八幡大社に詣でました。そして神鈴を鳴らし柏手を打つて涙乍らに御祈りしました。

「南無八幡大菩薩。何卒若君の御身の上を御護下されませ。其爲には私の壽命を御縮め下さいまして

もさら／＼厭ひませぬ。又先夜は大事の場合に油断して笑つてゐたばかりに、曲者を奥の間迄忍び込ませ、返つて惡人の爲に謀られて若君の御守護が出来なくなりましたのは、遍へに私の忠義の心が足りなかつた故で御座ります。今よりは如何なる事があらうとも鐵之助決して笑ふことを致しません。何卒／＼此誠心を御汲取り下さいまして、若君を御助け下されます様御願申上します。南無八幡大菩薩

其翌夜も又其翌夜も彼は熱心に祈り續けました。

丁度五十日目の夜の事です。夕暮から怪しかつた空模様は物凄しい嵐となつて雷さへ鳴りはためき出しました。神前にぬかづいてゐた鐵之助は何故かしきりに胸騒ぎを覚えて、ついふら／＼と伊達侯の邸の邊り迄歩いて來ました。そして裏門に沿ふた高塀の處に來た時、ふと前方を眺めますと怪しい黑影が塀の上を匍つて居るのを發見しました。折からの稻妻の光りを透して見ると、それは確かに合羽を纏つた

武士の姿です。

「うむ、さうだ！」鐵之助は疾風の様に馳せ寄つていきなり黒影に飛びつくと、塚から引摺り下ろして組み伏せました。思はぬ敵の襲來に曲者も立ち直る暇もなく案外脆く括り上げられてしまひました。

「やあ、各々方出で會ひ候へ、松前鐵之助、唯今

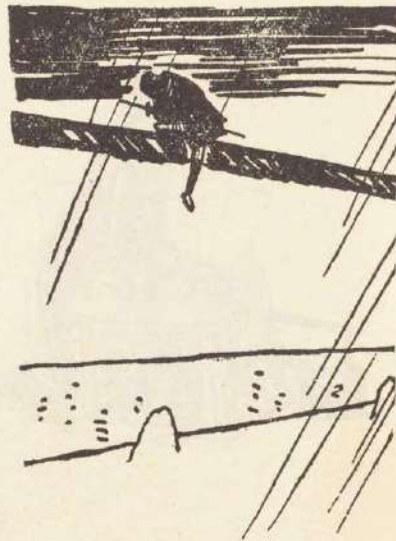


曲者を召捕つたり。」
吹き荒む風雨、轟き渡る雷鳴の中に鐵之助は勇氣凛々として大聲に呼ばはりました。

三

鐵之助が其夜捕へた二度目の刺客がすつかり泥を吐いて了つた爲に、遂に兵部や甲斐の陰謀は明るみにさらけ出されて、幕府の裁判が開かれ、其結果悪人達は皆夫々重い御咎を受けました。そして鶴千代君は無事に家を繼ぎ、政宗以來の奥州隨一の名家には何等の疵もつかずに済みました。

これといふのも鐵之助の厚い忠義の賜物だと、殿様は一方ならず彼の手柄を賞め立てて、重い役目に取り立てました。そして一も鐵之助、二も鐵之助と片時も離さずに寵愛されるのでした。伊達の御邸には和やかな春の光りが惠まれた様に見えました。併し斯うした平和の中に唯一つ殿様の心を悩ます



事がありました。それは大事な大事な家來の鐵之助が、どんな喜ばしい事があつても決して笑顔を見せたことがないといふ事です。何時も彼は眞面目な鑑め面をして殿様の側に控えて居ます。それが殿様には何となく陰氣臭く見えて心配でなりません。そこで殿様は鐵之助の心を心から笑はしてやらうと思つて、面白い趣向を考へつきました。それは其頃流

行つて居た猿芝居といふものを殿中に呼んで演らし
て見様といふ計畫です。
或日のこと、いよ／＼猿芝居が邸の庭でやられる事になりました。庭の櫻の木々に五色の幔幕を引き廻して、其前に廣い舞臺がかゝり、殿様始め家來一同は櫓側から庭先までずらりと居並んで見物しました。

賑やかな囃子につれて先づ小猿の踊りが始まりました。赤い顔に白粉を塗つて綺らびやかな着物をつけた女猿や、紫烏帽子に淺黄の水干を纏ひ腰に竹作りの刀をさした大猿や、ちんちくりんの袖無しに禪一つの小猿やが、笛太鼓の音に足拍子手拍子面白く浮かれ舞ふ珍妙な光景に、流石いかめしい武士達もどつと笑ひくづれました。其中に番組が進んで浦島太郎の芝居が始まりましたが、どうした機ひか、乙姫様になつて居た猿と、浦島太郎の猿とが喧嘩を始めてしまひました。すると腰もとの女になつてゐ

た猿共も一緒になつて「キャツ〜」と啼き叫んで舞臺の上は大騒動、囃子方の男が三味線を握つた儘飛び出して来る、幕の中の小猿が泣き出すといふ始末、芝居は目茶苦茶になりました。見物して居た一同は噴き出してしまいました。殿様もこの番狂はせの喜劇の餘りのおかしさに、腹をかへて大笑ひし乍



らふと、側らの鐵之助を見ると、鐵之助は相變らずの變めつ面で眠と舞臺を睨んでゐます。折角の催しに、鐵之助が矢張り笑はないので殿様は張合のないことおびたしく、はては少し不機嫌にさへなつて來ました。そして、
「どうだ鐵之助、面白くないか。」と云ひますと、鐵之助はいつもの通り、
「はい。面白う御座います。」と眞面目な顔で答へます。

「面白ければ笑つたらいいではないか。今日の催しは實はそちを喜ばせたいと思つてしたのだ。もう少し陽氣になつたらどうだ」と叱る様に言ひました。鐵之助は、
「はつ」と頭を下げて「私の事を斯くまで細心配下さる御心中、鐵之助は何と御禮申していゝか判りませぬ。併し私には笑へぬ譯が御座います。それはかつて私が八幡様に御願を立てた事があるので



殿様は鐵之助の手を取つて言はれました。それから幾年か経つて鐵之助は重い病氣にかかりました。とても生命は覺束ないといふので、殿様は直々自分で鐵之助を見舞つて、其枕許に坐つて申しました。

「永い年月の忠義を有難く思ふ。今お前に何か望む事があるなら言つて呉れ。何でも叶へてやるから。」
「いえ御前様」鐵之助は微かに重たい頭を振つて「何も取り立てゝ望む事などは御座いませぬ。唯一生の中に一度、心から笑はせて下さいませ。」

殿様は「よし〜」と領いて、手眞似表情面白くカチカチ山の噺を始めました。

鐵之助はじつと聞いて居ましたが、

「ワハハハッ」

と、絶えて久しい快活な笑聲を上げながら、次第に息たえて行きました。

「す。」と言つて一部始終を話しました。始めて其話を聞いた殿様は、そんなにまで自分の爲に苦勞して呉れたかと思ふと、胸の中が我知らず熱くなつて來ました。
「叱つたのはわしが悪かつた。ゆるして呉れ。そちの忠義は死んでも忘れぬ。」



牡丹の詩

五四

(玄宗皇帝と李白)

大木雄三

寺内萬治郎臺

一

のどかな春の日の晝過ぎです。眠くなるやうな風が、空を吹いて、羽の弱い雲雀さへも心配なく思ひきり高くへのぼつて行く日でありました。

玄宗皇帝は、たゞ一人で宮廷の廊下に、ちつと一つところを眺めてをりました。錦のはでな袖に、風が何か囁いて通りました。

玄宗は、につこりして後を振向いて、

「貴妃。」

と、爽やかな静かな聲で言ひました。

「はい。」

るがよい。」

楊貴妃の美しい瞳が微笑んで、

「みなの方がどんなに喜ぶでありません。花も賑やかな酒宴を喜ぶに相違ございません。花までが陛下のお恵みにうるほでございませう。」

と、言ひました。玄宗はそこで猶更氣嫌よく、

「うむ。お前がさう思つてくれると、私も嬉しい。」

と、満足さうに言ひました。

「けれども、陛下。」

と、楊貴妃が言ひました。

「何ちや。」

「このやうな美しい牡丹を見たことのない者がたくさんありませうから、大勢を呼んで見せてやりたいと思ひますが、如何でせう。」

これを聞いた玄宗は、ほんと膝を叩きました。

「それはよいことを思ひついた。なるほど、さうしてやれば、みんな喜ぶに違ひない。では早速呼び集

答へたのは、妃の楊貴妃でした。

「何と美しい眺めではないか。」

「立派になりました。それに、今日は何といふよい日でせう。」

楊貴妃は二足ばかり歩み寄りました。人の心を酔はせるやうな強い香ひがそこらいちめんにたゞよひました。

「うむ、ごらん。いまが見頃だ。あの花一つは、お前の腕よりも重いかもしれない。」

氣嫌のよい玄宗の顔が、牡丹の花に照つた太陽の反射をうけて、若人のやうに紅く輝いて見えました。

「さようです。私は牡丹が好きです。牡丹の花は私を慰めてくれるのです。陛下、この美しい花を大勢に見せてやりたいと考へますが、いかゞでございませう。」

「おゝそれはよい思ひつきだ。私もさう思つたところだつた。ちやうどよい、すぐに酒宴の用意をさせ

めることにしよう。』

そこで皇帝からのお使ひは、方々へやられたのでありました。やがて大勢の人々が、後から後からと宮城へ詰めかけてまわりました。そして城の中は、たちまちのうちに、いつばいの人で埋つてしまひました。

玄宗はにこ／＼として、この様子を眺めてをりましたが、家來の者に云つて、酒や肴を運ばせて、『さあ、みんな遠慮なくやるがよい。』

と、一同に向つて言つたのでした。そこで家來たちは、思ひ思ひめい／＼に酒を飲んだり、歌つたり日の暮れるのも忘れて遊んでゐたのです。

その時、楊貴妃は玄宗に向つて、

『陛下、樂士を呼んで唱はして下さい。』

と、言ひ出したのでした。

『よろしい。では李龜年を呼べ。』

そこで、李龜年といふ樂士が呼ばれて、酒宴の場

『それはあの李白がよい。』

『お、李白でございますか。李白はどんなによい詩を作るでせう。陛下、私はそれが楽しみでございます。』

楊貴妃は待ち遠さうに言ふのでありました。李白といふのは、有名な詩人で、いまでもこの人の作つた詩は、大さう人に好かれてゐるのであります。

間もなく、詩人の李白は宴會の席へまわりました。どこにゐたのか、ひどく酔つて眞赤な顔をてら／＼光らしてをりました。

『む、李白か。よく來てくれた。まあこちらへ來るがよい。』

玄宗は氣嫌よく、手を舉げて李白を招いたのでした。

李白は、ふら／＼泳ぐやうな格構で近づいてきました。

『陛下、今晚はわざわざお招き下さつて有難う存じ

へまわりました。

『何か今日の會に似つかはしいものを、お唱ひなさい。』

楊貴妃が言ひました。樂士の李龜年は、すぐに樂器を執つて、彈かうとしました。

『待て。一寸待て。』

かう言つてとめた者があります。それは玄宗でありました。

『何故、おとめになるのです。』

楊貴妃がかう訊き返しました。

『とめるのはほかでもない。貴妃、もう日も暮れてこんなよい晩になつたではないか。だからこの庭に灯をつけて、もつと明るくしよう。そしてこれまでにある古い詩では面白くないから、何か新しい詩を作つて、それを唱はせたら面白いではないか。』

楊貴妃もそれには大賛成でした。

『誰に詩を作らせるのでございますか。』

ます。どうかたくさん飲ませて下さい。人間は酒を飲まなければ駄目です。あは／＼／＼／＼。』

『さやうか。お前はそんなに酒が好きなのか。前からその話はきいて知つてゐる。今晚はお前の飲めるだけ飲むがよい。その代り私は頼みがあるのぢや。』

『お頼み？ 私に出来ることならば、何なりと仰せつけ下さい。』

『さうぢや、頼みといふのはお前でなければできないことなのだ。李白、貴妃が樂士に唱はせたいといふのだけれど、古い詩はもう聞きあきてしまつた。そこでお前に新しい詩を作つて貰ひたいと思ふのだ。』

『なるほど。』と、李白は合點いて、

『それならばわけのないことです。』

と、言ひました。

李白は、霧のかゝつたやうに呆然した目を細く開いて、考へるやうに庭を眺めるのでありました。

何と
いふ美し
い庭の景色
だつたでせ
う。咲き崩
れた牡丹の紅
い花は、今に



も笑ひさうでした。白い花は、よい聲を出して唱ひ
出しさうでした。そして明るい灯の光が、その花を
ばつと照らしてゐるために、大きな黒い影が、葉の
上に落ちてゆら／＼動いてゐるのです。

『よい眺めだ。』

李白はかう言つて感じ入つたやうに、ほつと吐息
をしましたが、

『筆と紙とを。』

と、呟きました。

家來はすぐに二つの品物を李白の側に持つてまわ
りました。李白は筆を把つて、たつぷりと墨を含
ませると、すら／＼と手を運ばせました。

『陛下。ごらん下さい。』

李白はそれを差し出しました。玄宗が受取つ
てみると、それには次のやうな詩が、立派
な文字で書かれてありました。

雲想衣裳花想客
春風拂檻露華濃
若非群玉山頭見
會向瑤臺月下逢

この詩のほかに二つの詩が

あつたのです。意味はだいふむ

づかしくなりますから略しますが、

どの詩もみんな、牡丹の花の美しい

こと、楊貴妃の美しいこと、を歌つ

たものでありました。

玄宗はいよ／＼愉快でたまらなくなり

ましたので、すぐにそれを樂士たちに唱は

せることにしました

上手な樂士たちは、めい／＼樂器を手にとりまし

た。そして李龜年は、美しい聲を張り上げて唱ひま



した。その何とも言はれない快い音楽をきいてゐる人々は、まるで魂が天國へ飛んで行くやうな気持ちになつてしまつたのでした。

玄宗もやつぱりそんな心持ちになつてゐたのでした。唱ふのが終つた時に、

「私はこれを聞いてゐると、ずっと昔のある晩のことを思ひ出さないのであらねない。」

と、言ひだしたのです。

「どんなことでございますか。お話をきかせて下さい。」

楊貴妃がかう言ひました。玄宗はお氣に入りの楊貴妃に頼まれたのですから、

「では話すことにしよう、貴妃もよくおきき。それからみんなも聞いてくれ。」

と言つて、さてその話をする前に、なみなみといであつた酒をぐつと一息に飲んだのでした。

「それは不思議な話だ。八月の十五夜の晩のことで

「ではお前たちに連れて行つて貰はふ。」

と言つてみた。

「陛下。お疑りになつてはいけません。まづ私たちがすることをぐらん下さい。」

かう言つて二人は座を立つた。二人は妙な術を知つてゐて、鳥のやうに空を飛ぶことなどは難作なくやるのだつた。で私も「二人の奴、何をするのか。」と、ちつと眺めてゐた。

すると二人は指を組み合せて、目を閉ぢて、何か呪文を唱へてゐるのだつた。すると間もなくである。

空から白い雲がさつと下りて来て、私のゐた高樓と天上とに橋を渡してしまつたのだ。

「さあ。」

かう言つて二人は、私の手を執つた。が私は氣味が惡くてたまらないのだつた。といつて今更怖いとも言はれない。私は覺悟して二人のする通りになつ

月が美しくつた。空には雲もなくよく晴れてゐたが、風がすこしあつた。私は、ただ一人で、いろいろなことを考へながら月を見てゐたのだつたが、ふと月の世界へ行つてみたいと思つたのぢや。

ちやうどその時だつた。大勢の女官たちがどやどやと來た後から、申天師と鴻都客といふ二人の幻術師も見えた。私はその時二人に向つて、

「私は人間の世界で、してみたいと思つたことは何でもした。天上の世界は變つてゐるだらうと思ふけれど、これほど面白くはあるまい。」

と言つたのだつた。すると二人は、

「陛下がもし行つてみたい、と思召すならば、これから天上へ御案内いたしませう。」

と、かういふではないか。私は、あんなに驚いたことはない。でも二人が嘘を言つてゐるのではないかといふ氣もしたし、行けるものなら行つてみたいと思つたので、

た。先づ雲の橋に足をかけてみると案外しつかりしてゐた。二人はづんづん進むのだ。私もつゞいた。

間もなく私たちは月の世界へ着いた。入口に大きな門があつて、中の方にはたくさんのお客が見えてゐたが、それは美しい光の中でゆら／＼動いてゐるのだつた。そして、冷たい寶石のやうに輝く露が、袖にも袂にもしつとりと下りて寒いくらゐだつた。私はぞく／＼寒くなつたので、

「おい。寒過ぎるよ。」

と言つた。けれども二人は黙つたまゝで、物を言つてはいけないといふやうな顔をするのだつた。

ふと氣がついてみると、門の中には白い劍を抜いて持つてゐる兵士達が、行つたり來たりしてゐた。

「あれは何者ぢや。」

と、私が訊くと

「樓門を護る兵士です。見つけられると面倒ですから、お静にして、私たちのするやうになさつて下さ

い。」

と二人は聲を低くしたのだ。そして私の袖を捉へて「えいつ」と空中へ飛んだーと思ふと、私の身体はふわりと浮き上つてしまつたのだつた。私は、自分の身体が、霧か雲になつてしまつたのではないかと思つた。」

玄宗はこゝまで話して、ほつと一息休みながら、楊貴妃の顔を眺めたのでした。

「まあ。陛下、それから何う遊ばしたのでございませうか。どうぞ早くおきかせなすつて下さい。」

と楊貴妃は、早くその先を知りたくてたまらないやうに言つたのです。

「さうぢや。それからが不思議なのだ。私がびつくりしてゐるうちに、たうとうある高殿の屋根の上に運ばれてゐた。何ともいへないよい心地だつた。空氣の中には何かよい香りがして、着物も冠もその香が泌みこむかと思はれた。下を見ると、寶石を並べ

とは思はなかつたくらゐだつたので、その翌晩も、連れて行つてくれるやうに申天師に言つたが、それきり申天師はつれて行かない。でも私はあの天上の音楽だけはちやんと覚えてゐる。」

玄宗のながい物語りはそれでおしまひになりました。

「私もいちどせひ行つて見たうございます。」

楊貴妃はさう言つたのでありました。

楊貴妃は、玄宗皇帝のお氣に入りますから、したいと思へばどんなことでもできるわけですから、いくら勢があつても、月の世界のこととは自由にならないのでした。

夜が更けましたので、宴會もおしまひにしようと思つた。その時、誰かぐう／＼寝てゐる者があ

たやうに美しい野原が、すうつと目の届かないほど遠くまで續いて、真白い鶴に乗つた人達が、ひらひらと飛び歩いて遊んでゐるではないか。私はあれほど人を羨しいと思つたことはなかつた。

しかし進めば進むほど寒くなるのは困つた。が引き返すのも残念だから、私は齒を食ひしばつて我慢しながら、二人の後に續いて行つたのだつた。

行けば行くほど美しいところだつた。緑の色が青葉のやうに輝いて、眩しい光りがさつと照してゐたが、私はそこで、これまで見たこともない物を見たのだ。

十人ばかりの女が、白い大きな鳥に乗つて遊んでゐたのだが、何を話してゐるのかわからなかつた。

あれが天女といふものに違ひない。で私がうつとり見とれてゐる時、優しい不思議な音楽が聞えてきた。

「陛下、もうお戻りにならなければなりません。」と申天師が言つたけれど、私はすこしも歸りたい

「誰ぢや。寝てゐるのは。」

すると、むく／＼起き上つて、きよろきよろとあたりを見廻したのは、詩人の李白でありました。

「どうしたのだ。」

玄宗は苦々しげに言ひました。自分の話をきいてゐなかつたと思つて、すこし氣嫌が悪くなりかけたのです。

「あは、ゝゝゝ。」

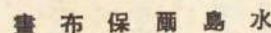
李白は哄笑して、大きな欠伸をした後で、兩手を空ににゆつと上げて言ふのでした。

「陛下。お酒はよいものです。私を眠らした上に、あの月宮殿の夢を見せてくれました。」

玄宗の眉はたちまち晴れました。

「うむ、よし／＼。」

李白は、いつもかうして我儘を許されてゐたので



かけました。それでも馬太郎は澄まして、威
 張りながら歩いてゐました。
 馬太郎がお調子にのりなかつたので、百姓
 は拍子抜けしたのか、今度は大きな聲で、
 『馬鹿太郎やい。』
 と、怒鳴りました。
 『何ちやい。』
 馬太郎の馬鹿太郎は立止つて、同じ位の
 大きな聲で返辭をしました。
 『あれだ呼んだが聞こえなかつたのかい。』
 『聞こえたから返辭したのぢや。』と馬太郎は
 言ひました。
 『お天道さまはどつちから昇りつしやるか、
 お前御存知か？』
 と、百姓は訊ねました。
 『そんなこと朝飯前ぢや。四方八方からお昇
 りになるんぢや。』
 馬太郎はさう答へて澄ましたものです。
 百姓は、クスリと首を縮めて笑ひました。
 馬太郎はそれから、村一番の物識りと言
 はれてゐる李兵衛爺さんに會ひました。
 お爺さんは馬太郎に訊ねました。
 『馬さん、どこへゆくのかや』



「お前、何やら言ひました。
『知つとるなら、お爺さん聞かせて呉れ。』
『いんや。わいは後でいふ——はア、よめ
た——馬さん、お前こそ知らんぢや。』
馬太郎は又、噴飯しました。
『お爺さんは老人だから忘れなさんな。——
人間はナ……みんな、死ぬために生きとるん
ぢや。』
さう言ふと、馬太郎はさつさと、そこを立
去りました。



李兵衛爺さんは氣を吞まれて、ガカンと立
つたまい、考へ込んでしまひました。
子供達がその先の方で悪戯しながら遊ん
でゐました。
馬太郎の姿をみつけると、みんな彼の周
圍を取り巻いて、

馬さん十八
わが歳知らぬ
毎日
蛙ン子と遊んでる
蛙ン子の友達
馬鹿太郎！

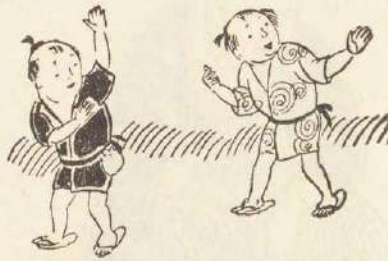
と、唄ひ乍ら、どつと嘲してました。
馬太郎は、いきなり、腰の木刀をスラリと
引つて拔きました。
『やあ、抜いた。抜いた。』
『斯れるゾ。斯れるゾ。』
子供達は又嘲してました。
『武士に向つて無禮であらう』馬太郎は子供

と、言つてしきりに責めつけました。

三

その頃、馬太郎は野ウサギで一人遊んでゐ
ました。
草の實で、蛙を釣りあげたり、蛙と駆けつ
こなしたりして喜んでゐました。
後には遊び疲れて、草の上に長く横たつたま
ま、馬太郎は眠つてしまひました。
お月さまが、東の空にボツカリ白く見え初
めました。
『馬の馬鹿が寝てる。』
百姓達は、日が暮れても起きさうにない
馬太郎を見て笑ひ乍ら家の方へ歸つて行きま
した。誰も呼び起すものもありませんでした。
お月さまだけが、次第に明るくなつて、馬
太郎の寝姿を照らしてゐました。

『さうとも、さうとも。お前は馬鹿ぢやあな
い——あいつこそ馬鹿ぢや。だから……もう
泣くんぢやない。』
子供は、父親の百姓の言葉に機嫌を直し
て泣き止みました。
でも、李兵衛爺さん一人だけは、何と思つ
たか、
『馬太郎は馬鹿ぢやない。あいつはさつと偉
い奴になる。——もしかすると、こつちの方
が馬鹿かも知れんぞ。』



ある日のこと——
この國の殿様の行列が村を通りました。
お乗物の周囲には、大勢の家来達が、附添つ
てかためてゐました。
人の話では、この國のお殿様も、馬鹿殿様

達を覗みつめました。
『袴もはいてない士があるもんか』と子供の
一人が言ひました。
『馬さん！馬鹿とは誰のことか、知つとるか
い？』又、他の一人が言ひました。
『お前のこつちやよ。』
馬太郎はさう言ふと、どんだん行つてしま
ひました。
それから間もなく、百姓と、李兵衛爺さん
と、子供達がいつしやに出會ひました。
『馬太郎は、いよいよ真正正路の馬鹿ぢや。
お天道さんが四方八方から身ると言ふた。』
百姓が初めにさう言つて笑ひました。
『父ちゃん！馬太郎は俺を馬鹿と言ふたよ。
俺のことか……』
子供は一人は、口惜しさうに、べそをかき
ながら、父親の百姓に近づきました。
『よし、よし、泣くな——あんな馬鹿の言ふ
ことを真にうける奴は馬鹿ぢや。』
と言つて百姓はなだめました。
『俺は、馬鹿ぢやないよ。さうだらう——父
ちゃん！』
子供は、さう念をおしました。

といふ評判でした。

『片よれ——先のけつ！』
お供先には、仲間が先づかをして、村の子
供達を追ひ散らしました。
百姓達は道の兩側にへたつて、地べた
に頭をすりつけ乍ら慄へてゐました。
その時でした——

どこからやつて来たのか、馬太郎がその
お供手をふつてお供先を横ぎりしました。
『無禮者奴ッ』
さう言ふ聲といつしやに、家来達が二三人
バラバラと駆け出して来て、馬太郎を引捕
めました。昔は、お供先を横ぎると討首にされ
る規則になつてゐたのです。

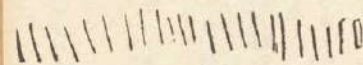
急に、お供先が騒々しくなつたので、お乗
物の中のお殿様も氣づかれたのでせう。
『何事か？』と旗をあげてお訊ねになりま
した。

『はッ。只今、お乗物先をこの村の馬太郎
と申す馬鹿が横切りしました故、召捕へまして
ござります。家来の一人が恐る恐る、さう申
し上げました。』
『うん、なに……馬鹿とな。それは近頃耳よ

りぢや。さうしない。これへ呼べ」と、これは又、殿様の御機嫌は却つていいのです。『でも、先方は土百姓の馬鹿で……』『百姓も土人間に變りはない。そち達の知つたことではない。——早う呼べ。』『はッ。』

さう言はれたので、家来連は馬太郎と殿様の前へ引立て、來ました。馬鹿太郎と馬鹿殿様の話はどんだらう」といふので、家来連は澄ましたが、聞き耳をたてゝゐました。

「馬鹿の馬太郎とはその方か？」殿様が先づさう言はれました。『左様でふります。』と馬太郎が答へました。『余はこの國の領主ぢや。見知り置け！——そちが當年幾歳ぢや。』『存じませぬ。』『さうか。歳などは存ぜぬ方がよい。』家来連の中で、クスクス笑ひ聲が聞こえた。



四

馬太郎は討首にされるどころか、とんだ出世をしてしまひました。馬太郎は今度こそ、本當に斬れる大小なした立派なお士になりました。『馬鹿太郎、おちはどう思ふ？』馬鹿殿様は何かあると、一も二もなくお氣にいらの馬太郎に相談されました。



馬太郎は一つそれにお返事申し上げて、どれもこれも御意に叶ひました。殿様がそんな風だから、國は亂れてしまひさうな譯ですが、それが不思議によくなつて行きました。

でも、馬太郎だけは、いつまでも馬鹿太郎でした。殿様にはお妹様が居りました。お妹様の花のやうに、美しい上に、それは非常に利巧なお姫様でした。ある日のこと、お姫様は、庭先で殿様といつしよに、弓のお稽古をしてゐる、馬太郎を御覽になりました。

五

馬太郎もお姫様とは、それから大の仲よしになりました。そして、殿様のおすゝめで、二人は御夫婦になりました。——今はもう誰も、馬鹿太郎と言ふものはありません。でも、そんなに出世しても、馬太郎は時どき、妹や體と遊んでゐなさうです。勿論、その時はお姫様も御いづしよに仲よく笑ひ興じてなされました。



五百七號室

三井信衛

寺内萬治郎畫

七〇

「前號までの梗概」東京放送局の放送から二時間半の後、何處からともわからず、夜毎ラヂオから聞える鐘の音、それがこの物語の発端であつた。

滋の家は寶石商店で、父は三年ぶりにフランスから歸つたが、翌朝上海から電報が来て、再び旅に出た。するとその後店では、寶石類が度々偽物と變り、それのみか市内では、毎夜七軒づゝの奇怪な騒音がはばかれた。ある少年店員の夏海

や謙と共に、滋がラヂオをきいてゐると、そこから洩れたのは「滋、神な」といふ父の聲であつた。その次には又も、聞きなれぬ恐ろしい聲がした。三人が不審がつてゐると、意外にもそこへ歸つて来たのは父で、「今までカミオン商會といふ悪漢の裏切に、監禁されてゐた」と話す。ところがその父の話の最中、又もラヂオから洩れたのは「滋、神な」といふ聲である。滋が不思議に思つてラヂオに近づくと、そ

の聲は止んだが、滋の後には、見るも恐ろしい顔面の怪人が立ち、ピストルを突きつけてゐる。滋は逃れる術もなく、五階から街上に飛んだ。

怪我をして榮心堂病院に入つた滋は、様々の不思議な事件に出會つた。見舞に来た松本支配人と夏雄と謙一の三人が、突然何者かに掠られたこと。同じ病院の手術室で、滋の家の店員だった奥原が、秘密に手術を受けて、その数日からグイ

ヤの珠が出たのを、偶然見たこと。病院の裏門で、父の結玉石のネクタイピンを、滋が拾つたこと。それ等である。

手裏の役、突然奥原が死んだ。滋は店から来た守屋青年と、奥原の室に入つた。と、その病床から出て来たものは、ラヂオの鐘の暗號を書いた一枚の紙片であつた。ところがその室には、一つのクロス・ワードが書いてある。どうもそれが、何かの暗號のやうに思はれてならない。果して何の暗號だらう?

その五 クロス・ワード・パズル

1 冥想法守屋青年

もうすつかりと春になつて、日本橋通りの洋風の草花屋にも、句ひの高い花々が、今を盛りと咲き誇つてをりました。さうしてたく

さんの人々は、晴れやかな着物を着て、華やかなパランルをさし、今も樂しげに往き來をしてゐます。けれども、只一人三階の一室に腰かけた滋少年は、その大通りの春らしい有様さへ、淋しげに哀しげに眺めてゐたのでした。

クロス・ワード・パズル! 本當に、奥原の遺した紙片がさうであるやうに、この事件はまるであのクロス・ワードにも似て、迷宮から迷宮へ入つてしまひました。

滋が再び寶石店へ歸つて来たのは、丁度奥原の死んだ一週間目。その奥原の遺骨は、奥原の故郷である福島県の親たちが、受けとりに來ました。さうして奥原によつて得た事件の光明は、只このクロス・

ワードとラヂオの暗號の外は、何一つとしてなかつたのです。

滋が歸つて間もなく、あの謙一少年の包みの中に、病院で滋に渡さうと思つて書いて來た、ラヂオの鐘の記録が入つてゐたのを、後から気づきました。さうです、その記録は滋が病院にゐる間に、毎晩々々店のラヂオで鐘の放送をきいて、それを怠らず書きとめ、その明の日の店を始め、その他東京市内の店々に、事件があるかないかを書き加へたものでした。その忠實な謙一のことを思ふと、滋はもう一刻も、ちつとしてほられなかつた。

ともあれ、何をおいても、悪漢の居所さへわかれば、この事件の

謎にも、目鼻がつくといふもので
す。その悪漢の居所は、與原の還
したクロス・ワードによつて解く
外には、何の方法もありません。
だが、そのクロス・ワードとても、
果して悪漢の居所を示すものであ
るかどうか、それは全くの疑問で
はないでせうか？」
「滋さん、滋さん。」
「あゝ、守屋さんでしたか。」
「如何です、例のクロス・ワード
は判断が付きましたか？」
「いゝえ、ちつとも……。」
今は誰をおいても、この守屋青
年が只一人の味方。人一倍考へる
ことの好きな守屋は、その時何を
思つたのか、滋の顔をちつと見つ
めて、

「滋さん、僕に一つ、考へたこと
があるんですが……。」
「え？ 考へたこと？ 何です？」
「滋も思はず目を睜つたのでした。」

2 クロスワードの研究

「外でもありませんが、このクロ
ス・ワードですね。」と守屋もまた、
例のクロス・ワードの寫したものを
テーブルの上において、「これは
あの與原が、何かの心覺えに、人
に覺られないやうに書いたものに
違ひありませんね。」
「それやア、勿論さうですよ。」
「ア待つて下さい。ところが、
何よりも大切なのは、このクロス・
ワードが、一體何の暗號かといふ
ことです。ラヂオの鐘の暗號は、

ちやんと明瞭に書いてあるんだし
——えゝ、さうです、勿論あれだ
つて、滋さんだから、ラヂオだと
いふことが分つたんで、外の人が
見たら、火事の半鐘のつき方みた
いで、何のことだかわかりません
よ——それは兎に角、さうすると
その外に、暗號として現さなけれ
ばならないものは何でせう？」
「悪漢團の秘密の規則ですか？」
「それもありませんね。……しかし
僕の思ふのに、何はともあれクロ
ス・ワードといふものは、滋さんも
去年遶り随分やりましたね、横の
鍵と縦の鍵の謎があつて、それか
ら文句を作るんでせう？」
「あゝ、さうだ。僕は馬鹿だな、
今までそれをうつかりしてゐた。

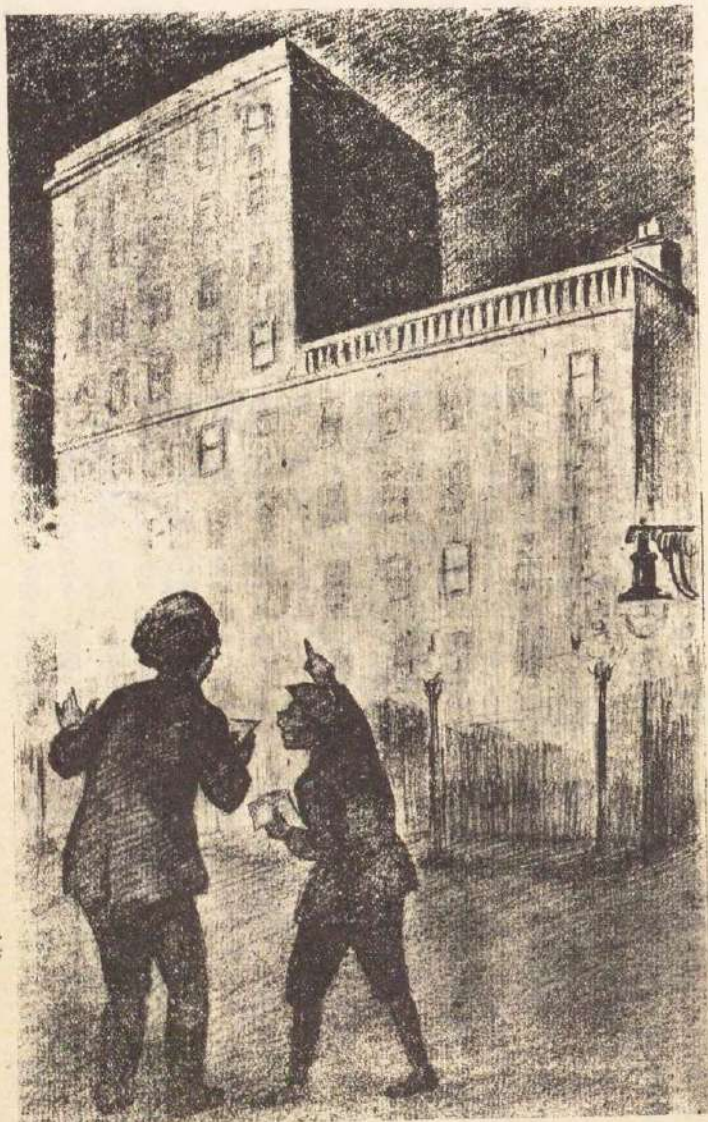
成程、守屋さんの言ふ通りだ、こ
のクロス・ワードには、鍵の文句が
ない！」
「さうでせう？ 僕も最初は、或
は別に、鍵の文句を書いた紙が、
何處かにあるんぢやないかと思
つたんですよ。しかし、ごらんな
さい、これがクロス・ワードとし
たら、白い角の中に、1とか2と
か3とか、小さく番號が打つてあ
る筈ぢやありませんか！」
「ふう、さうだ！ ふゝう、さう
すると守屋さん、これはクロス・ワ
ードぢやないんでせうか？」
「それはまだハッキリ答へられま
せんが、それからもう一つ、こん
な不可解なものを作る以上は、餘
程の秘密でなくてはなりません

ね。」
「さうですとも。」
「悪い奴等にとつて、餘程の秘密
といふのは何でせう？ 第一に悪
漢團の居所、盗んだ財寶の在處——
さう言つたやうなものぢやない
でせうか？」
「だけど守屋さん、悪漢團長の居
所や、寶の在處ぐらゐなら、何も
こんな覺え書をしなくつたつて、
頭の中へ入れておけばいゝぢやあ
りませんか？」
「うゝ、滋さん、よく氣が付きま
した。さア、そこでさよ、成程仰
有る通りです。しかし、その反對
に、覺え書をしなければならぬ
程なら、その悪漢の居所や財寶の
在處——さう言つたものが、非常

に複雑だといふことになりはしま
すまいか？」
「ふうむ！」
「僕は悪漢團の主魁といふのが、
逆も一人や二人ではなくて、たゞ
さうな悪漢團が一つになつて、又
大きな一つの團を成してゐるのぢ
やないかと思ふんです。」
「おゝ！」滋はこの頭のいゝ守屋
青年によつて、一步々と謎の解
けてゆく心地がしました。さうし
て急に元氣に、その目を輝かせて
來たのでした。

3 七！

「それに又、暗號の鐘を使つて、
ラヂオの秘密放送をしてゐるくら
ゐですから、逆も大仕事なんです。



「一寸開けて下さい！開けて下さい！」

「あっ！謙一君だ！」

思はず二人がバツと手を放すと同時に、崩れるやうに飛び込んだのは、お、謙一少年その人！

4 謎が解けて又謎となる

「おッ、謙一君か！」

「謙一君ぢやないか！」

「滋さん！守屋さん！」

「お、無事だったか、無事だったか！」

「有難う！有難う！」

三人の目からは言ひ合したやうに、ぼろぼろと熱い涙が流れて、長い／＼間、お互ひに轟と手をつ合つたのでした。

「……それにしても謙一君、君は一體どうしたんだ？どうして逃げて来たんだ？」

「全く驚きました。気がつくとも、松本さんも夏雄君もいません。暗い、牢屋のやうな地下室なんです。幾日も、そこに監禁された僕は、幸にも外の一室に移されたやうとしたのです。その時、番人の隙を見て、力一杯地下室から逃げて来ました。そこに御主人や松本さんや夏雄君が、あるか何かを確かめて、どうかして救ひ出したいとは思ひましたが、到底僕一人の力ぢや敵はないと思つて、一先づ歸つて来たのです。」

「謙一君、それは一體何處だ？」

「お、肝腎のことを忘れてゐま

した。僕が地下室から逃れて、やつと裏口に出て、初めて気がつく、全く驚きました。ふつと見上げると、高い／＼大建物——東京の真中も真中、あの丸の内の神岡ビルディングではありませんか！」

「えッ？神岡ビルディング！」

「え、さうです。あのこの間建つた、神岡ビルディング——その地下室でした！」

「おッ、守屋さん！守屋さん！あの、ラデオから聞えたお父さんのお聲が「神を、神を」と言つたのは、神岡だったのです！」

「それにしても……」と守屋は眉をよせながら「あの二度目に歸つたお父さんが、カミオン商會と

七九



若山牧水選

詩年幼

バラのみ (賞)

千葉縣 高吉 長三

バラのみ赤い
赤い實が三つ
ばらのねつこに
おちてゐる

評、美しいその實ばかりか、枯れた様な枝
まで見えます。(牧水)

寒い朝 (賞)

會津喜 高畑 襄
多方町 (十三)

どつかでひよどりが
ないてる
みんな白い息を
はいてる
義ちゃん
寒い朝だね

評、本當にさむさう。(牧水)

くらしい夜 (賞)

千葉縣 田丸 清治
岡校高二

くらしい夜
外に出たよ
そしたら
東京の方は
あかるいね
評、千葉の平野が思ひ出されます。(牧水)

井戸が

使へなくなつた譯 (推薦)

伊澤幹雄

寺内萬治郎畫



八〇

「え、本當だともね、本當に井戸が使へなくなつたんだよ。井戸には、冷たい水がたくさん湧いてゐたし、他の者が見たら、何故使へなくなつたんだらうと、不思議に思はれる位だつたよ。」

お爺さんは、かう言つて話を始めました。皆んなは炬燵に當り乍ら、耳を澄ませました。

「田舎と言つても、ひどい山の中に、昔は、さぞ立派だつたらうと思はれる、大きなお寺があつたんです。故あつて、私は一時其處で修行をしました。十四の時でした。」

元は由緒のあるお寺だつたが、もう其の時は草に埋もれて、お庭も本堂も、庫裡も荒らされるまゝに、ほうつて置かれたのです。

風が吹く時には、本堂の裏の廊下へは、伸び放題に伸びた草が、なびいて來ました。

古いお寺には、此の方が却つて、つりがよいと言つて、住持は其の儘にして置きました。

え？ あゝさうだとも。廣

い境内が一面、こんな風だつたので、狐や、狸や、其の他の色々の獸の棲家になつて居ました。晝間でも本堂の土臺の陰に隠れて居るし、夕方からは絡が大



聲で鳴きながら、餌を見つけてのそ／＼出かけたものです。

夜かね——夜なんか、お前、食物など持つて、寺の前を通ると、狐がよく見え隠れについて行つたさうだよ。」

「それでどうして、井戸が使へなくなつたの。」次郎が待ち兼ねて聞きま

朝 日

群馬縣 峰木 きん
大島尋四

朝日がさした

やぶのなかへ

しづかにさした

評、竹の影が静かにうつつた。(牧水)

雨 上 り

甲府市 豊島 泰
佐度町

雨上り

お空のくもの

早いこと

評、俳句になつてますね。(牧水)

めんめん

埼玉縣山 高野豊太郎
根校尋五

めん／＼のした

とんとんのした

うどん粉つけて

めん／＼のした

とんとんのした

白く廣くなりました

せまく白くきりました

評、おいしくあつたかくだらう。(牧水)

か も

千葉縣平 平戸 光
四校高二

もずのなく聲に

夕日が淋しいよ

かもが

赤く光りながら水もぐつた

またもぐつた

評、おとなの時に似てゐて、大人のより自然でいい。(牧水)

した。

「井戸かい。井戸はな、其處に棲んでゐる狸が使へなくしたんだよ。」

お爺さんは、さう言つて、話を續けました。

「秋の事でした。何時もの様に、夕方のお勤めが済むと、私は、住持とそれから、今一人の勝手仕事をしてお婆さんと、ランブの下で火鉢を圍んで、無駄話をしてゐました。」

其の晩も良いお月夜なので、座敷の戸は半分程明け放してありました。なせつて。お月夜の晩はさうするのが、住持のくせでした。

其の中、座敷の縁側で、がたり！と音がしました。

「狐だよ。」と、住持は言ひました。

「餌を探しに來たんだろ。」とお婆さんが言ひました。私もそんな事には馴れて居るので、さうかな、と思つて、しよい！と言つた儘、立たうともしませんでした。が、暫くして、又、はと、はとと障子をたたくんです。

「誰？」住持は誰か悪戯をしてゐると思つたのでせう。障子を明けて見な」と言はれて、私はがらりと障子を明けました。と、それと一緒に黒いかたまりが、ふいと縁の下へ下りた様でした。私は急に氣味が悪く

なつて、

「狐があんな事するだらうか？」と住持に聞いたのです。住持は平氣で

した。

「するとも。たちの

悪い奴は——」

一晩おいて、次の晩

も、そんな事があり

ました。住持は「い

やな奴だな。」と苦い

顔をして居ました。

私は大聲で追ひまし

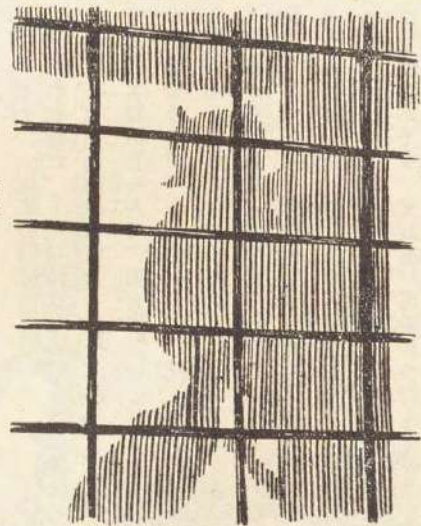
た。が、又何時か忍

び寄つて、はと、は

と、はと、はと、障子をたたくのです。どうするだらうと暫く黙つてゐる

と、やがてたたくのをはたと止めて「今晚は！……」と云ふのです。そ

れが狸なんだよ。私はぞつとして肩をすくめました。丁度月が傾いて、明るい月光が軒をすべつて、柱の影を障子に黒くうつしました。其處にはあり／＼と、柱によち上つた狸の影がうつつて



雨ふり

青森縣七 戸館 かつ

今日は一日
雨ふりだ

學校のさかは
かのお祭
評、かつちゃん蛇の目か番がさか。(牧水)

本箱

専五 横山 總平

わたしの本箱
よい本箱

もとはうちの
うどん箱
それが今では
本箱じや

わたしの本箱
よい本箱

評、うどんの匂ひがすこうしすると御本が
いひました。(牧水)

風

群馬縣大 倉持 たつ

かせがすごう ふいてゐる
はんの木のためころが

うごいてゐる
ほこりもいつしよに
とんできた

すずめ

専五 柳橋 太郎

ちいさなめ

のです。

「畜生！」私は急に腹立たしくなつて、立ち上りました。「狸め、だまされるかい！」といふ氣になつて。私は其の時、お婆さんがとめなかつたら、太い鐵の火箸を、狸に投げつけたかも知れませんでした。

「畜生だもの。後でどんなわるさをするかも知れんに。」とお婆さんは言ひました。

「あきれた狸だ。こんな馬鹿な真似をする狸は始めてだ。何處からかまされこんだ奴に違ひない」と住持も言ひました。お婆さんはそれに續いて、「こゝはわし一人で、誰も居ないよ、さあ、早う歸れ——」さう言ひさかされたのです。さうするとな、狸はすぐと下りて歸りましたよ。お婆さんの言つた事が、わかつたものと見える。

それから狸と私が仲よくなつたんだよ。すぐ歸つた事を思ふと可愛くなつてな、次の晩やつて來た時「今晚！誰だい？」と返事してやつたんだよ。奴、嬉しうに柱を上つたり下りたりしたつけ。馬鹿なもので、障子へ影がうつるのも知らずに「祐善さん、祐善さん！」と私の名を呼ぶんです。又其處が可愛かつたんだが——。私は、斯うしていつも返事をしてやつたんです。

やはり月の明るい晩でした。一寸した用事で、私が使ひに出た留守、

例の狸が來たのです。お婆さんは、

「祐善かい。祐善は使ひに行つたよ。」と言つたさうだが、暫くして。私

を迎へに出かけたら、山門のあたりに、黒い獸

が歩いてゐたさうです。確にあの狸に違ひない

と、お婆さんは私に話しました。

二日ばかり雨が續きました。三日目の

晩、相變らず、ほと、ほとと戸

をたたく音がしました。來たな、と思つてゐると、やがて私の名を呼ぶのです。

「祐善さん！祐善さん！」

「祐善さん！祐善さん！」



それでみえるか
ちいさなめ

お舟

茨城縣
古河町

日向野良一
(十才)

おほりのお舟
たいくつだ
ゆらりと
たいくつだ

葱

京都府海
部校尋五

松田まつ子

霜が
消えた
そこらの
葱が

青い

たんぼぼ

芝罘白
金嶺町

吉村 貞子

庭の隅にたんぼぼが
もうさいた早いな
もう春だ早いな

たこ

東京三田
四國町

千代田愛三
(十四)

風上れ
風上れ
みんなおいこせ
僕のとんび風

私はふと、先日のお婆さんの話の本當か、どうかためして見やうと思ひました。可哀さうな事が起らうとは、其の時は少しも知らずに。……そこで「祐善かい、祐善は井戸へ水汲みに行つたよ。」と言つて、障子の穴からそつとのをぞいてゐたのです。そして、狸がばた／＼と井戸へ向つて行くのを見て、吃驚しました。

次の朝の事です。

「狸が井戸へ落ちてゐるぞい。」お婆さんが大聲で井戸端からどなりました。「仕様の無い奴ぢやないか。」と住持はぶん／＼腹立ちました。私は、はつとして、昨夜の出来事を住持に話して、悪い事をしたと思ひました。住持は「ふーん」と言つた儘「不思議な事もあるものだ。」とつぶやきました。

さつと、私を見つけに行つて、待ちくたびれて、足をすべらせて井戸に落ちこんだに違ひないと思つて、私は急に淋しくなつて、つひほろ／＼としました。

狸かね——、其の狸は住持と二人で、手厚く葬つたが、住持も其の事を思ひ出すと、何となく哀れに思へて、お茶もおしく飲めない、と言つて、たう／＼其の井戸の水は汲まない事にしたのです。けれど、私の話はまだおしまひでは無いのです。」

お爺さんは斯う言つて、次の様な話をつけたしました。

「年の暮になつて見ると、そんな荒れ果てたお寺でも、人並にお正月の支度をしなければなりませんでした。

或る日、私は住持と一緒に煤掃きをした揚句、本堂の裏を片附けると其處の材木の蔭に、狸の巢を見つけました。驚いた事には、其處には、親狸が、まだ生れて間もないらしい子狸を抱いた儘、ひからびて死んでゐた事です。子を生んだ後、身體が悪かつた母親と其の子が、父親の狸が井戸へ落ちた爲に、食物が取れずに、餓えて死んでしまつたのでせう。私はそれを見て、たまらなく淋しくなりました。何となく氣がとがめてもう其のお寺には居た／＼まねなくなつて、たう／＼暇を貰つて、其のお寺を出てしまつたのです。

かりそめの私の行ひが、そんな所まで響かうとは、全く夢にも知りませんでした。

え、その井戸かい。あゝ今でもその儘になつてゐるんだよ。だが、いくら考へても腑に落ちないのは、何故あの病氣の親狸とその子狸とを置いて、あの狸が遊びに出たかといふ事です。」

お爺さんは、さう言つて、鼻をす／＼りました。

(住所 神奈川縣高座郡大野小学校内)



童謡

野口雨情選

(大人篇)

春の日に(賞)

宮尾 進 (臺北)

河瀬を水は

ちよろ ちよろ

光る

麥の穂の丘に

かげろは

ゆれる

雪とけお山に

お月さんは

高い

んび

ひよろゝも

ないてまはる

つくみ(賞)

河野 砥吉 (朝鮮)

つくみ来い来い

お日和ちや

里では梅も

はや咲いた

つくみ来い来い

里に來い

梅のお花を

見せてやろ

羅紗賣り

はざますな子(英城)

異人さんは 異人さんは

遠い

遠い

國から來た

羅紗賣りに來た

羅紗が賣れずに

お國へ歸へりたくなつた

異人さんは 異人さんは

あかい

あかい

入陽見てゐる

空から 山から

夕焼だ

兎さんの目

三島 定市(鳥根)

兎さん

お目々は

何故赤い

赤い木の實を

喰べたからさ

兎さん

見るもの

みな赤い

赤い目だから

皆な赤い

數雀

名方 和郎(大阪)

河原の竹數

數雀

雀ががやく

しやべつてた

鳥の姉さん

かみ結つて

西のお山へ

嫁入りだ

夕焼河原の

數雀

なんでもべちやく

しやべつてた

芒

中村 利雄(大阪)

河原の芒ア

ばけ芒

里の子 コーイと

呼んでるさ

今夜のお月さんは

十三夜

河原の芒ア

ばけ芒

子雀だまして

ゆれてるさ

お星さんは

一二三四五

春

賤機多味男(静岡)

とうとうねむい

春が來りや

お玉杓子の

尻尾はとれる

軒の小雀 チユツチユツ巢立ち

仔馬は草原とびたかろ

兎さんの目



春の野

湊 一訓(東京)

ほろほろほろ

鳩が啼く

櫻の花は

さくら色

乳母車の

中で見る

おちゝ色した

畫の月

森の子鳩

古村 徹三(大阪)

この森夕焼

日が暮れりや

森の小鳩よ

ほろ ほろ

ねむれ

夢みて小鳩よ

ほろ ほろ

ねむれ

母さの胸毛は

ぬくからよ

五月の友

水守電之助
岡本帰一画



どつちがうまいか……

すつばいか……

さいたら何といふだらう……

治郎さんは、何を考へるともなく、ふとこんな文句を呟きました。すると、真黒な顔に眼ばかりきらきら光つてゐるが、その柔和さうな彼の唇には何ともいへぬ氣持のよい微笑が綻びました。

それは、彼がうたつた唄のやうなものが、自分ながらおかしかつたからではありません。彼は今日も自分一人で父のお墓にお参り出来る嬉しさから、思はず笑ひがこみあげて來たのでした。そして、お墓といふのが、老ひたる梅の樹の蔭にあるので、つい、青い梅、黄い梅といふやうな文句が口から出たのでした。

やがて治郎さんは晝でも暗い程茂つた簾蔭の荒れた墓地に辿りつきました。外には暮らしい暮が幾つ

九〇

初夏らしい明るい輝かな日光が天にも地にもみち溢れてゐました。治郎さんはその光を頭から一ぱいに浴び、身體が汗ばむのを感じながら田圃路を急いで行きました。歩くと草いさが一種の香氣をもつてぶーんと鼻を衝きました。

治郎さんは誰か見てゐやしないかと前後左右を見廻しましたが、遠くの方では野良で働く人影が認められた外は、近くには犬の子一疋眼に入りませんでした。それで、やつと安心したやうに、また、元の俯向き加減の姿勢になつて、すた／＼と歩き出しました。何といふか名も知らぬ青い色をした小さな虫が藪から無數に飛び出したりしました。

青い梅……
黄い梅……

がありました。治郎さんが恭々しく頭を下げたのは隅っこにある如何にも見すばらしい、唯、自然石をおつ立てたばかりのものでした。でもその前には竹でつくつた花筒もあり、あけびの實なぞがちやんと供へてありました。

「お父さん！ 退屈だらうな。僕、また、來ましたよ。でも、話も何んにも出來ないからつまらないな。お、さう／＼お父さんこの間ね、お母さんと山へ蕨探りに行きました。その時はどつさりとおつて來ましたぞ！ 僕、直ぐお供へに來ようと思ふたんだけど、忘れてしまふてすみませんでした。その代り……、今日はね、裏の簾の垣にあつたぐみの實をもつて來てあげましたよ。ははは……、こんなにちつとはかりだけど、よく日光が當つてゐるので、おいしさうに熟れとるだらう。さあ、あげませう。」治郎さんはさながら生きてゐる人にいふやうにくどくどと呟いてゐましたが、懷中から一握りのぐみの實

九一

をとり出して、墓前にある壊れた小皿の上にばらばらと落しました。

青いぐみ……

赤いぐみ……

どつちがうまいか、澁いか……

赤いがうまいにきまつてらア……

でも、青いのだつて——

治郎さんはまた、こんな出鱈目な唄のやうな文句を頭に浮ぶまゝに呟きましたが、あとがどうしても續きませんでした。彼はふとお父さんの前で、この位な文句につまつたりしちや恥ぢだとも思つたのか、一生懸命に後に續ける文句を考へてゐましたが、

青いのだつて可愛いなア！……
いんまに眞つ赤に化粧して……

いまに眞つ赤に酔つ拂ひ……
裏の簀で——

かういひかけた時、近くに獸でも草を踏み分けるやうな音が聞えて來ました。治郎さんはふつと口を噤んで、用心深くそこらを見廻しました。が、何者の姿も見えません。大方、犬でも通つたのか、それとも自分の空耳だつたのかと治郎さんは、かすかに波立ち初めた胸を静めようと努めました。そして、わざと、

いーまに眞つ赤な着物きて、
いーまに眞つ赤に酔つ拂ひ、
ぐみさん、みんなで踊りませう。
五月の日向で汗かいて、みんな一緒に踊りませう——

と、大きな聲を張りあげて歌ひ終ると、後ろの方で、突然に笑ひ聲が起りました。それを聞きつけると、流石に治郎さんはびくりしました。その聲はどうしても、あの平常から仲の悪い三太に違ひないと思つたからであります。

二

三太君の蒼黒い顔に、意地悪さうな細い眼と、治郎の赤黒い顔に、圓らな大きな眼とが、墓地で相對して立ちました。

『おい！ 治郎公、君は矢張くだらんことを歌つてゐね。』



三太君は冷笑を浮かべながらゑらさうに申しまし

「うん、おれか、おれは唄が好きだでな。お前ら歌つて見たらどうちや。え、歌へないなら教へてやるが……」治郎さんも負けてはゐませんでした。

「そんな阿呆らしいことが出来るかい。おれは忙しいんだせ。これからは、荷掘りちや！」三太君はさも自慢さうにいひます。

「荷掘りか、お前とはどつさりあるちやらうな。」治郎さんはふと羨しさうに獨語のやうに呟きました。

「何に？ もう一べんいふて見ろ。どつさりあらうが、少からうが餘計なお世話ぢやないか。お前、盗んだりしちやいかんぞ！」三太君は相變らず減らす口を叩きます。

「何に？ 盗んちやいかんて？」治郎さんはむらむらと癪癪が起つて來たのを抑へることが出来ないで

うと、ちつと抑へつけずにはゐられませんでした。ちらと三太君の方を見つたゞけで、無念さうな表情をしながらも、ちつと俯垂れてしまひました。

「どうちや、何んにもいへないのか、態ア見やがれ。ははは……」三太君はさも勝ち誇つたやうに、かういつたかと思ふと、こそこそと簾の中へ潜り込んでしまひました。

治郎さんはさつとその後ろ姿を見送つてゐましたが、矢張、くだらない喧嘩をせずに済んだことを父の靈に向つて感謝しながら、眼には涙さへ光らせてゐるのです。

三

お父さんが遠くブラジルで病氣の爲に亡くなられたのは今から丁度三年前だつたと治郎さんは思ひ出しました。その時治郎さんはまだ九つでした。お父さんはこちらにゐてはどんなに働いても貧乏か

堅く／＼拳を握つて怒鳴りつけました。

治郎さんはお父さんが、荷が非常にお好きだつたといふことをよくお母さんから聞かされてゐました。しかし、自分の家は貧乏で持ち簾がないので思ふやうにお父さんに供へることが出来ませんでした。

た。それを残念に思つて居る矢先だつたので、どんなに口惜しく腹立しく思つたか知れませんが、恥ぢしめられたのが、お父さんの墓前だつた爲に、父の靈までが侮辱されたやうに感じたのであります。

「さうちや、盗んちやいかんといふたのが、何んで悪い？」三太君は手にした尖つた細い鍬をおどかすやうに持ちあげて見せました。

（馬鹿に相手になるな、つまらぬ喧嘩をするな。汝は大切な身體ぢや。父に代つて母や、妹の面倒を見てくれねばいけぬ！）治郎さんの耳にはかういふ優しい、而も嚴かな父の聲が聞えて來るやうな氣がしました。それを感じると、彼はどんなに腹が立た

ら通れることが出来ないで、思ひきつて、妻子は後から呼び寄せる覺悟で、他の澤山の連れと一緒に、その一年ばかり前に南米移民の一人として渡航して行かれたのであります。

南米ブラジルといつても日本全國の十三倍半もあるのだと治郎さんは當時、學校の先生にわざ／＼訊いて教はつたことを忘れてゐませんでした。お父さんが行つたのは、その中のサン・パウロといふ小さい州で、有名な珈琲の産地なのでした。そこに着いてやれ／＼と思つて働くやうになつてから僅か一年足らずで、お父さんは不幸にも肋膜炎を患ひ三ヶ月餘りも病床にゐて、たうとう亡くなつたのであります。その知らせが來たのは村の人達は田植最中でまことに賑やかな騒がしい時でした。が、じ／＼とした梅雨は歇んだかと思ふと降り、降つてゐるかと思ふと歇みして、さながら治郎さん達母子の悲みに同情してゐるやうな天候でした。

治郎さんの思ひ出は神戸の棧橋で汽船に乗らうとするお父さんにお別れた時のことに移つて行きました。その時、お母さんは眼に涙を浮べてゐられたけれど、お父さんは非常に元氣で、まるで、お酒に酔つたやうな緒ら顔をして、「治郎や、温和しく待つてゐろ！ 直ぐに迎ひに来てやるからな。」と、頭を撫でながらいはれたのでした。

その時の治郎さんは唯もう周囲の物珍らしい光景と、賑かさに酔はされてしまつて、躍りあがりたいやうな氣持で爆いでゐたのでした。今から思ふと、それ等はすべて昔の夢となつてしまひました。——カチン、カチン——と、三太君が一生懸命に笛を掘つてゐるらしい音が、鈺を返すやうに響いて來ました。治郎さんはその音の爲にふつと眼ざめたやうに我に返りました。その時、治郎さんはお父さんが神戸を出發なする時に買つて下すつたいゝろんな置土産——鉛筆と、繪草紙と、硝子のメソコと、お菓

子と、今でも大切にかくして持つてゐる一個の筆箱でした。それはブリキを黒く塗つて造つたバネ仕懸のもので開けたり、閉めたりするものでした。いつか三太が非常に欲しがつてゐて、何かととりかへつこしてくれとせがんだのを、こつちで聞かなかつたので怒つてしまつたことが思ひ出されて來ました。治郎さんは妙にさびしい氣持になりました。以前にはあんなに仲好くして、大きくなつたら一緒にお伽噺にあるやうに、どこか遠い／＼國へ出かけて行つて、その王様に會つたり、また、珍奇な土産物をどつさり持つて歸らうと誓つたりした三太だつたといふことが思ひ出されたからでした。それが、今ではまるで反對の敵同志のやうな仲になつてゐるのだと考へると、急に悲しくなつて來るのです。

四

——どこへ行くんですか。

林や、森になつてしまひましたね。

面白いだらう。今少しの間だから我慢をするが好い。

何をです？

何をつて、お前の會ひたい人のことさ！

僕が會ひたいつて、一體、誰のことなんですか。

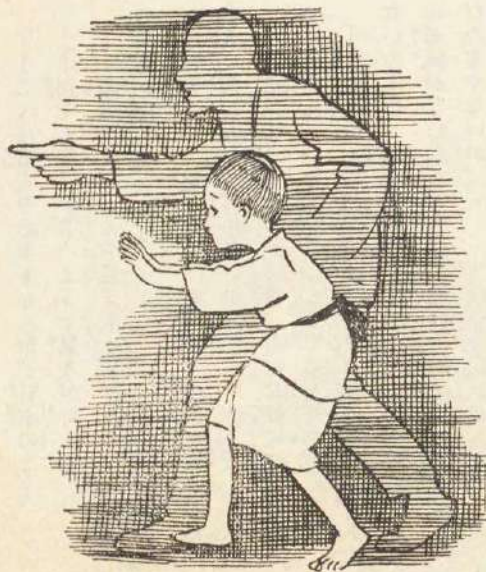
——おや！ もう忘れてしまつたのか。忘れつばい奴ちやね。さつき、自分の方でいひ出した癖に……。

——僕、何もいひませんよ。

——馬鹿をいふな！ お前があゝいつたからこそ、かうして遙々と遠いところをつれて來てやつたのぢやないか。

——さうですか、ちや、僕は寢ばけてゐるのかしらん？

——ほら、見ろ！ たうとうやつて來た！



——どこでも好いから、黙つてついて來るが好い。——でも、こんな砂漠のやうなところは、どこ迄行つても界限がないでせう。

——これが砂漠か、見ろ、緑林があるぢやないか。——おッ！ いつの間にか、すっかり周囲が緑の



起きあがつて、眼を睜りました。そして、
 「三太君ぢやないか！」と、叫びました。
 「君もどうしてこんなところにひとりあるんだい？」三太君は懐しさうに訊きました。
 「ぢや、君はどうしてこゝへのこゝやつて来たんだい？」治郎さんはにやりと笑ひながら訊き返しました。
 「僕か、僕はいつ迄も釜のなかで箸掘りしてても寂しいからだよ。」三太君は以前とは打って變つて人の好さうな表情をして見せました。
 「箸掘りは面白いだらうが……え？」治郎さん不思議さうに訊きました。
 「面白いかも知れんが、僕は遊ぶ友達がないので仕方なしに掘つてたんだよ。」三太君は惜げ返つた調子になりました。

「こゝは藪ぢやありませんか。日本の……。
 何でも好いから、よく見るが好い！
 藪ですよ。いくら見ても……、おや、何か掘つてゐる音が聞える！
 — そりや、當り前さ。お前は何か掘つてゐる人に會ひたいんぢやないか。
 — あッ！ あいつか。僕、あんな奴に逢ひたかありません。いやです！ いやです！
 — 嘘をいふな。お前は心の中ではあの人に逢ひたいのぢや。逢ふて仲好くしたいのぢや。だが、その勇氣がないから、わしに連れて来てくれとせがんだのぢやないか。
 — あッ！ あいつがこつちを向いた。あッ！
 笑つてゐる！ あッ、こつちへやつて来る。来ちやいけない！ 僕の方から行くから来ちやいけない……
 — ぢや、こつちから進んで行くが好い！

「あッ！ たうとうやつて来た！ おや、君はそれをくれるのかい？ おゝ、本當か、嬉しい！嬉しいなア……。」

治郎さんはふつと眼を覺しました。日光はくわつと顔や、胸や、手足に照りつけて、頭や着物に手を觸て見ても火傷するかと思ふ位熱くなつてゐました。今のはお父さんに連れられて、遠くの藪で箸を掘つてゐる三太に逢ひに行つた夢だつたのだ。自分は墓地の裏手の短い草ばかりの斜坡に身體を横へてゐるうちに、とろ／＼と眠つて、さうした夢を見たのだ。——治郎さんがかうはつきりと悟つた時、眼の前の明りを遮るやうにして、黒いものがすう／＼と立ち閉りました。その瞬間、彼は父の亡霊が現はれたのかと思つた位でした。
 「治郎君！ 僕だよ！」と、黒いものが呼びかけました。治郎さんは、その聲を聞くと、むくむくつと

治郎さんの胸にも、ある強い——感情が泉のやうに湧き上つて來ました。それは、初めて三太の氣持が分つて、彼も自分の氣持と同様だつたのかと、やつと知ることが出來たからであります。で「君も連れがなくてさびしかつたの？ 僕だつて、僕だつて同じことだよ。」と、治郎さんは草の上に腰を下ろしたまゝ、さも——感に堪えなうに、また、心から訴へるやうにいひました。

「君は、毎日のやうにお墓參りしてるやないか。僕はちよい——君の後からついて來ることがあるんだよ。そして、ものをいはう——と思ふんだけど、いふと直ぐ喧嘩になつて……」三太君は手にしてゐた筈を投り出して泣き出しさうな顔をしました。

「さうか、僕も悪かつたね。君、勘忍してくれない？ 僕達は何んでもないことで喧嘩したんだからね……」と、治郎さんは立ちあがつて、つか——と三太君の方へ近づいて行つて肩に手をかけて、相手



怪談 お寺の拍子木

西川 喜平

水島 爾保 布畫

の顔を差覗くやうにしていひました。

すると、三太君は黙つてうなづいて、ちつと治郎さんの顔を見返しました。二人の見合はせた臉には美しい友情から浮び出た涙の珠が宿つて光つてゐました。そして、互ひに、つと笑ひ合ひました。

治郎さんと、三太君とは以前と同じやうに、仲好しになりました。そして、どこへ行くのも一緒だといつて好い位でした。筈を堀りにゆく時は治郎さんとかつゝいて行き、お墓參りをする時は、三太君が後に従ひました。

「君、大きくなつたらブラジルへ行かない？」

「行くよ。サン・パウロ州だらう？」

「うん！」

「一緒に行かうね。」

二人はこんな生意氣さうなことを、ある日、墓地で語つたことすらありました。

(をはり)

龍泉院は、その名をそのまゝに、村の名に呼ぶ、龍泉村の村はづれ、小高い丘の上にある古い寺でした。

寺こそ小さいが、近郷、近在に名も高く、内所は中々裕福な寺でありました。

住職の和尚さんと云ふのは、年の頃六十あまりの赤ら顔のデツブリと肥つた、見るから丈夫さうな坊さんで、年を老つた下男と、只二人で住んでゐました。

住職は部屋の障子を閉めきつて、お經の本でも讀んでゐるのかと思ふと、机の上へ算盤を置いて、帳面を見ながら、パチ——と勘定をしてゐました。

縁側の障子を開けて顔を出したのは、年を老つた下男でした。

「旦那さま。お願いでございますが、四五日お暇を

1011
「ただきたいので、チョツクラ國へいつて参ります。」

住職は眼鏡の上から、額越しにデロリと見て、

「ナニ國へ行く、何か急な用でも出来たのか。」

「へい今朝、國の家から郵便が来ましたので………婆さんが、久しく逢はないからと、云つてまゐりました。」

「アハ、……、婆さんに顔を見せに行くのか、いゝ年をして元氣なものだな。一體婆さんは、いくつになるのだい。」

「へい、今年六十五になるので、嫁に來ましたのが五十年前で、その時わたくしと五つちがひでしたが今でもやつぱりその通りで。」

「それはいくつになつても同じことだ、四五日ならいゝから、早く行つて早く歸つて來てくれ。」

「へい有難うございます。それで私のゐない間、旦那お一人ではお困りでございませう、代りに村の若

い者でも頼みませうか。」

「イヤ村の者は御免だ、働らかずに金ばかり取りたがる、質のよくない奴等はかりだからな。」

「そんなら御不自由でも御辛抱なすつて、チョツクラいつて参ります。」と、下男はソコ／＼に、支度をして出て行きました。

後に住職は帳面を片付けながら、

「二人でゐると、無駄飯食ひだと思つてゐるが、獨りとなるとやつぱり淋しいな。この頃、村の若い奴等が、夜になると、悪る遊びの元手を借りに來るが、うるさくてしやうがない。今夜から寝た振りをしてゐる方が、面倒がなくていゝ、………だが夜番には困るな。隣り村の安福寺で、夜番をやめたらその晩スグ泥棒に入られたと云ふ話した、ト云つて一人雇ふには無駄な金を拂はなくてはならない、誰か無給金で辨當持ちの夜番はないかな。」と獨り言を云つてゐました。

1012
若い者は、見るなり聲をかけて、

「龍泉院の爺やさん、何所へ行くのだい。」

爺さんはニコ／＼しながら、

「皆んな揃つていゝ機嫌だな、チョツクラ國へいつて來るのだよ。」



三

「ナニ國へ行くのか、それじゃあ中々歸れまい」
 「どうして、おそくなれやお旦那からお目玉だ
 ホンの四五日さ。」

「それでも和尚さん一人では困るだらう、手傳ひに
 いてやらうか。」

爺さんは手を大きく振つて、

「ダメ、今もそれを云つて叱られたの、何し
 る二度目の奥様を貰ひたがつてゐるのに、年はいく
 つでもいゝが、毎月米の二三俵も背負つて来る者が
 欲しい、と云ふのだから話しにならないよ、……
 そんなら行つてくるよ左様なら。」と、爺さんはスタ
 行つてしまふました。

「アハ、、、面白い爺さんだ、何しろ和尚さんの
 やうな、シミツタレは珍らしいな。」

「この間チヨク、元手を借りに行くが、中々貸さ
 ない。今夜も出かけやうと思つてゐるのだ。」と口々
 に勝手なことを話し合ひながら行きました。

「今じゃあ立木を、和尚さんが賣つたので、明るく
 なつたが、龍泉院の森下で、入山の樵十がお寺から
 借りた傘を道端へ置いて、荷物を背負ひ直してゐた
 ら、その傘へ目鼻がついて、一本足で歩き出したの
 で、荷物をはふり出して逃げて來た事もあつたが、
 今じゃあそんなことは、見たくも見られない」と年
 寄り達が話してゐると、後の方でチビ、酒を呑ん
 でゐた若い者が口を出しました。

「ところが龍泉院で、不思議のことがあるのだ、思
 ひ出して、なんだか氣味がわるいよ。」

「フウあのお寺で何が不思議なのだ。」

「おとゝひの晩のことだが」と若い者は、膝をのり
 出したので、ほかの者も、皆んな眞面目になつて、

「どんなことがあつたな。」

「お寺の爺さんが國へ立つた晩だ、已は和尚さんに
 用があつて出かけたのだ。庫裡へいつて、トン、
 たゝいたが開かない、これあ爺さんがゐないので、

村の中を流れる小川の堤下に、酒、肴と障子に書
 いてある、一軒の休み茶屋がありました、

この家は村の人達が、閑な時に寄り合つて、世間
 話に日を暮らす所になつてゐました。

今日は朝から、シト、雨が降つてゐるので、夕
 暮れから村の年寄りも、若い者も、集つて面白さう
 に話し合つてゐました。

「こゝいらも、だん、開けて賑やかになつたが、
 わし等の若い時分には、よく狐や、狸が出て、いた
 づらをしたものだ。」

「そう、向ふ原へ工場の出来ない時分には、あの
 あたりは随分淋しい所だつた。新田の駄六が酔つた
 まぎれに、小橋の通りを若い女が行く後から、から
 かつたら、振り向いた顔が、ノッペラボーだつたの
 で驚いて川へはより込んだ事があつた。」

和尚さんが早く閉めたのだと思つて、庭の方へ廻
 ると、和尚さんの部屋の方で、グ、の聲がす
 るので、もう寝たのかと、門を出て石段を下りると
 幽に後の方で、いつもの夜番の拍子木の音がするの
 だ。誰か夜番に來てゐるのなら、開けてもらはうと
 引き返して庫裡の方へ行くと、バツタリ拍子木の音
 が止んで、戸をたゝいてもガタリともいはいない、已
 はなんだか、氣味がわるくなつたから、歸つて來た
 のだ。」

「それなら已も出逢つたよ。」と、また一人が話し出
 しました。

「昨夜更けてから、あの門の前を通ると、お寺の方
 で拍子木の音が聞えるのだ。和尚さん一人だと云ふ
 のに、夜番をさせては氣の毒だと、戸をたゝいて、
 聲をかけると、拍子木の音が止んで、シンとして何
 一つ音がしない、已もうす氣味がわるいから、歸
 りかけると、またカチ、カチ、墓場の方から、人の

影も見えないのに、拍子木ばかり宙をあるいて……
「ア、ビックリした。それあほんたうに出たのか。」
「ナニサ、そんな事があつたら大變だと、逃げて來たのだ。」



「ナンダ馬鹿々々しい、いゝ加減におどかさなよ。」
「なにしろ、龍泉院に怪しい事があるとすると、他村へ聞えてもこの村の恥ぢだ、これから行つて和尚さんに逢つて、拍子木のことを聞いて見やうではないか」と年寄りが云ふと、皆んな口を揃へて、
「よからうゝ、もし化物が出たら、つかまへて生體を見現はしてやらう」と、そこにゐた者は揃つて出掛けました。

四

夜更けになつて雨は止みましたが、朧月が出て、生温い風が吹き、氣味のわるい晩になりました。
村の者は、龍泉院の門を入りましたが、
「たゞ和尚さんに逢つて、拍子木のことを聞いたのではつまらない、その前に化物が出たら、つかまへて手柄にしやう。」と、相談をして、前の晩のやうに、庫裡の戸をトン／＼とたゝいたが、寢てしまつ



たのか、シンとして音もしないので、本堂の方へ廻ると、奥の方で、
「カチカチカ、チ」と、拍子木の音がしました。
「ソラ出たゝゝ。」
「靜にゝゝ」と、デット耳をすまして聴くと、力の

ない拍子木の音が、きれたり、つゞいたり、陰氣に聞こえるので、氣味のわるいながら、勝手を知つた本堂の裏手から、ソット忍んで入り、抜き足、さし足して、だん／＼奥へ行くと、拍子木の音は仕職の居間らしいので、いよ／＼不思議と、廊下づたひに這ふやうにして忍びより、息をこらして、たてつけのわるい障子の透き間から、怖々／＼覗いた一人は、小手招きをするので、後につゞいた者は交る／＼覗いたが、一人が思はず、
「ブツ」と吹き出すと、たまらず一同は、こらえかねて一度にドット笑ひました。

居間の真ん中に、寢床を敷いて、夜着をスツボリかむつて、丸いはげ頭が見えましたが、夜着の襟から、スツト出た太い手は、拍子木を持つて、
「カチカチ、カ、チ」と打つてゐました。

(をばり)



あゝ無情

久米 舩一
柳田 謙吉 画



一〇八

少女のコゼットは、テナルディニの宿屋で、毎日辛い仕事をさせられて居りました。或晩コゼットは、遠い森の中にまで、水を汲みにやらされました。その水桶が重くて困つてゐると、其處へ一人の見知らぬ男がやつて来て、桶を持つてくれました。見知らぬ男と云ふのは誰れでしたらうか？

一 コゼットの嘘

男は太い聲で覗きました。
「お前のうちでは何をやつてゐるのかい、商

云ふよりは、居酒屋と云つた方がいゝかも知れません。そんな汚い家でした。
「只今、」コゼットは蚊の鳴くやうな聲で、恐るゝ云ひました。

「誰だい？ コゼットかい？」
家の中から太い聲が聞えて、テナルディニのお上さんの、豚のやうに肥つた姿がそこに現はれました。

「今頃まで、どこをウロツキ廻つてゐたんだい。」お上さんは頭から怒鳴りつけました。

コゼットは思はず後へ退つて、
「お上さん……この方が、今晚泊めて貰ひたいですつて。」

お上さんは怖い顔に和けて、
「おや、それは……」と云つて、男の姿を鋭い目でデロ／＼と見廻してゐましたが、服装に似合ひの金を持つてゐる人だと思つたのでせう。

「さア、どうぞこちらへお入りなすつて下さい。今晩は随分冷えなすつて、すつと、こつちのストーブの傍へ御下下さい。」
男は傍の椅子に腰かけて、あたりの様子なめしました。

「はい。」

「宿屋よ。」

「え、宿屋？ それは丁度いい。ぢやア私は今晩そこへ泊ることにしよう。」

男は桶を持つて、コゼットと並んで歩きだしました。

やがて二人は門へ這入りました。

「おちさん。」

「なんだい。」

「あのね……」
「なにさ、云つてこらん。」

コゼットはこの寒空に、シヤツワ一枚で凍へてゐました。昔では美しかつたコゼットも、今はもう全く瘠せ衰へて、蒼いしなびた顔をしてゐます。身体は處々に、赤や青のあざがあるのは、お上さんに鞭で打たれた跡なのでせう。兩手には凍傷が出来て、それが崩れかゝつてゐるのを見ると、可哀さうで涙がこぼれさうでした。

其時、お上さんが思ひ出したやうに云ひました。

「おい、それからパンはどうして？ コゼット。」

コゼットは、ハツと思ひだしました。さうだ！ パンを買つて来るのを忘れてしまつた！ 併し彼女は、もう嘘をつく事には馴れてゐましたので、

「あのう……隣り窓にパン屋へ寄つたんですけど、お店の戸が閉つてゐましたの。」

「閉つてゐた？ パン屋が？」とお上さんは疑ひ深さうに聞きかへしました。

「ぢやア、先刻の十銭銀貨をお返し。」
コゼットは手をポケットへ入れました。併し銀貨はそこにありませんでした。先刻水

「あのね、おうちが近くなつてきました。」

「それがどうしたつて云ふの？」

「だからね、その桶を私に持たせて下さい。」

「アに、いいよ。重いからおちさんが持つて行つてあげよう。」

「でも……その人に桶を持つて貰つてゐるのを知れると、お上さんに打たれますから……」

「……」

「……」
男は黙つて、云はれる通り桶を渡しました。間もなく宿屋へ着きました。いゝ、宿屋と

を渡む時に、奥の中へ落してしまつたのです。コゼットの顔は見る／＼蒼くなりました。

「どうしたの？ 落したのかい？」

「……」
「黙つてゐたら分らないぢやないか、コゼット！ こつちへおいで！ さア銀貨はどうしたの？」

お上さんはかう云つて、壁にかけてあつた腰に手に取りました。その恐ろしい様を見たコゼットは慄へ上がつて、

「ごめんなさい、お上さん、もうしませんから……」

「……」と、泣聲で云つて、卓の下に小さくなつて這入りこんでしまひました。

お上さんは、コゼットを引摺り出さうとしました。

其時、例の男は、誰れにも気づかぬやうに自分のポケットを探つてゐるやうでしたが、やがて、

「あ、一寸待つて下さい、お上さん。今、その娘さんのポケットから何か落つて落ちて來ましたよ。」と云つて、身なをためて床の上から銀貨を拾ひ取る眞似をしました。

一〇九



「あ、こゝにありました。ホラ、これでせう？」
 男の差出したのは、十銭ではなくて、貳拾銭貨でした。併しお上さんは、それで幾らか徳なすと思つたのです。
 「あ、それです。まあそんな所にあつたんですか。」お上さんは銀貨をポケットへ藏つて、
 「コゼット、もうこれから落したりすると承知しないよ。さア、あつちへ行つて仕事をかゝ。いつたい何時になつたらあの靴下が出来上がるんだい？」
 「お上さん、まあ一寸の間、遊ばしてやつたらどうです。」
 「御注意ありがたうございます。ですが、これの子だつて御飯を食へますから、少しは働いて貰はねばなりません。」
 「いつたい、なにをさせるのです。」
 「靴下を縫ひんです。實に樂な仕事ですよ。」
 「その靴下は、縫上るとおちになるんです。」
 「安ら、五拾銭です。」
 「五拾銭？ では私にそのやりかけの靴下を五圓で賣つてくれませんか？」
 お上さんは呆れたやうな顔をして、男を見

ましたが、やがて、

「よろしうございます。そんな事がして見たいなら、いかにもその靴下を五圓で賣り致しませう。」
 男は、古びた皮の財布から、五圓札を一枚とり出して、卓の上に置きました。
 「さアお前。」と、男はコゼットの方を向いて、

「もう遊んでもいいのだよ。お前さんの仕事は私が買つたのだから……」
 ……と、やさしく云ひました。

二 お人形

併し、コゼットは、臆病さうに聞きかへしました。

「ほんとですか？ お上さん。ほんとに遊んでもよろしいのですか？」
 お上さんは、憎くて堪らないと云ふ風に、
 「お遊び！」と言つて、向ふをむいてしまひました。
 コゼットは毛糸の編物を放り出して、暫くの間、何なしで遊んだものかと考へてゐる風でしたが、やがて臺所の隅から、お菓子

の箱を持つて來ました。

それはコゼットの玩具箱でした。中には、往來で拾ひ集めたばらおれだの、折れ釘だの、人形の片足だのが混入つてゐました。
 その中に、一つの鉛の剣がありました。大きさは三寸ぐらゐもありましたが、これがコゼットのお人形でした。
 コゼットは、その剣に、ぼろ布を巻いて遊びだしました。それでもコゼットは愉快に見えて、低い聲で子守唄みたいなものを唄つてゐました。

其時、テナルディユの二人の子供は、ストイアの傍で、ほんとお人形を持つて遊んでゐましたが、やがてそれにも飽きたと見えて、今度は輪本をひろげました。
 お人形は、床の上に仰向けに抛りだされてゐました。

コゼットは、ふとそれに眼をとめました。鉛の剣などでない、ほんとお人形！ コゼットはどんなに羨ましかつた事でせう。我知らずその傍に近寄つて、そつと自分の腕に抱き上げました。

コゼットはうつとりとして、その人形の

髪の色、頬の赤、可憐い手などを見てゐますと、運悪く子供の一に見つかつてしまひました。
 「ア、子供は頭、驚な聲を立てました。そして、大急ぎで母親の所へ云ひつけに行きました。
 「お母さん、お母さん。」
 「なんだ、騒々しい。どうしたつて云ふの？」
 「コゼットが……コゼットが……」
 「コゼットがどうしたんだい？」
 「一寸來てちやうだいよ。よう……」
 お上さんが店へ來て見ると、どうでせう。コゼットが自分の娘の人形を持つて遊んでゐます。お上さんは、ビクリと太い眉が動かしました。

「コゼット！」
 雷のやうな聲に、コゼットはハツとして飛び上りました。
 「コゼット！ お上さんは又怒鳴りました。コゼットは悲しうな顔をして、もう一度お人形の顔を眺めました。そして、大事な服れ物を裁かふかのやうに、細く／＼静かに

お人形を床の上へ置きました。
コゼットは両手を組み合せ、それなくねら
せて、何時までも人形を見つめてゐま
した。今日一日中に起つた色々の辛い悲しい
事、森の中の暗い道、水桶、お上さんの恐ろ
しい聲、そんなものに出會つても流れなかつ
た涙が、とうとう今流れました。コゼットは
すいり泣きはじめました。
不思議な男は立上つて、静かに傍へ寄つて
来ました。
「一體、どうしたつて云ふのです？」
「まあ見て下さい、お前さん。コゼットが内
の娘の人形に手をつけたのです。」
「それで、こんな騒ぎですか？」
「男は何かちいさな考へてゐましたが、やが
て扉を開けて外へ出て行きました。その姿が
見えなくなると、お上さんはいきなり靴でコ
ゼットを蹴りつけました。コゼットは烈しく
泣きだしました。
やがて男は歸つて来ました。見ると、腕に
は大きな人形を抱えてゐます。それは、町
の人形屋の飾窓にかざつてあるもので、身
の丈は三尺からあり、紺色の髪の色、青い美

しい眼、紅い唇を持つた立派なものでした。
村の子供達は、みんなその人形を欲しがつ
てゐました。
「さあ、お前」と、男は人形をコゼットの
方へ差出したが、
「これをお前さんに上げます。」
コゼットは涙に濡れた眼を睨つて、男の顔
を見上げました。コゼットには、その意味が
分らなかつたのです。
「これは、お前さんの人形です。あつち
へ持つて行つてお遊びなさい。」
男は人形をコゼットの方へ差出しました。
コゼットは、その人形を恐れるかのやうに、
だん／＼後ずさりをして、到／＼、卓の下へ
小さくなつて這入りこんでしまひました。
「どうしたの？ そんな所に隠れたりして……
……さあ早く抱つてこして頂戴。男はほ、え
みながらお人形を差出しました。
「コゼット。旦那が折角あつちやるのだか
ら、頂いておきな。」
お上さんは何んと思つたか、いやにやさし
い聲で云ひました。それを聞いたコゼットは、
はじめて、卓の下から仰ひ出して来ました。

「ほんとですか、お上さん。ほんとに頂いて
もいいのですか？」
「あ、いいともね、お前が戴いたのだから
ね、よく御禮をお云ひ。」
コゼットは走りよつて、男から人形を受
取りました。その顔は喜びにハチ切れさうで
した。若い顔にも、生々とした血の色が浮ん
でゐました。
コゼットは、その人形を椅子の上に置か
けて、自分はその前の床へ膝まづき、ち
い／＼とその顔を見つめました。
ただそれだけで充分でした。たゞ見てゐる
だけで、この上もなく満足だつたのです。
テナルディユの二人の子供は、今度は羨
しさにこつちを見てゐました。
三 翌る朝
翌る朝になりました。
男が荷物をまとめてゐると、そこへお上
さんが這入つて来ました。
「お早よう、お上さん。」
男は自分の方から聲をかけました。
「どうです、お上さん。この土地は儲かり

ますかれ。」
「それがね、旦那。一向駄目なんですよ。
近頃はあつさりお客が減つてしまひました。
それに、飛んだ騒つぷしの厄介者までゐるん
ですからね、とてもやりきれません。」
「騒つぷし？」
「ホラ、例のかとんぼの事ですよ。」
「あゝコゼットですか。……さう
ですか。そりや丁度いい。私が
その厄介者が貰つて行つて上げ
ませう。」
「えッ、あの厄介者を貰つて下
さる？ ほんとですか？ それ
は有難うございます。ぜひさう
して下さいませ。」
「では、コゼットを此處へ連れて
来て下さい。あ、それから勘定
な拂はなければなりませんね。お幾ら
ですか？」
お上さんは幾らか躊躇しながらも、書附け
を差出しました。それには「二十五圓」と書
いてありました。「男は流石に驚きました。



「え、くく、勉強の所を申上げたの
でございませう。何しろ物が高いございませ
うね。」
男は併し、何んとも云はずに財布から紙幣
を出して、卓の上へせました。

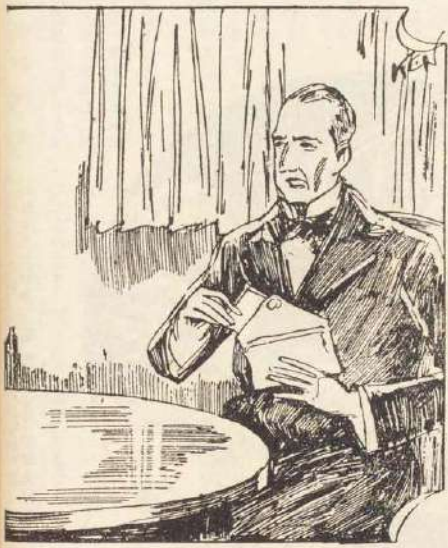
「では、コゼットを連れて来て戴きませう。」
その時、
「一寸待つた！」と云ふ聲が隣の室から聞
えて、酔つぱらひの亭主のテナルディユが、
赤い顔をして、コ／＼と出て來ました。
「一寸待つた。旦那の宿賃は二十六圓でい
へんだ。」
「二十六圓？」お上さんは叫びました。
「さうだ、二十六圓だ。だがな、コ
ゼットの事についてやア、一寸相
談があるんだ。」
亭主はかう云つて、どつかと椅子
に腰を下ろしました。亭主は、お上
さんよりも、もう一つ上手の事を考
へてゐたのです。
亭主は、男に向つて、コゼットを今ま
で養つてゐるのに、どんなに金がかつ
たかと云ふ事を話しました。自分達がそん
なに裕福でもないのに、コゼットの小さい時
から面倒を見てやつて、着せたり食べさせたり
する費用が、大へんな額に上つてゐると云
ふ事を、くどくどと云ひなてました。そして、
最後に聲を改めて云ひました。

「旦那。私は千二百圓入用なのです。」
男は何んとも云ひませんでした。暫くの間、
ぢいつと亭主の顔を見つめてゐました。やがて
例の皮財布から三枚の大きな紙幣を取り出して、
卓の上にのせました。男は、その紙幣の上を指で押へて、
「コゼットを此處へ連れておいでなさい。」
と、命令するやうに云ひました。

コゼットは直ぐ呼びよせられました。男は自分の持つて来た包みの中から、七八歳の女の子の着る立派な毛織の着物や、毛糸の襪、巻物、可愛らしい靴などを取り出しました。それは皆んな、コゼットにやる爲に豫め用意して来たものでした。

四、嵐の前

冬の朝日が軟かく四壁を照らしはじめる頃、



男は腕にコゼットを抱いて、村の本通りを歩いてゐました。近所の人々は皆んな驚きの眼を睜つて、この二人の姿を見つめてゐました。
デナルデイユの宿屋では、亭主とお上さんが向ひ合せて腰をかけて、黙つて卓上の紙幣を見つめてゐました。二人はかうして、たやすくお金が手に這入つて見ると、なんだ

かそれだりでは足りないやうな気がして来たのです。
お上さんは紙幣の上から眼を離して、亭主に向つて云ひました。
「お前さん、これぢや少し足りないぢやないの？」
それを聞いた亭主は、慌て、立上りました。

「さうだ、お前の云ふ通りだ。失敗つた！ 帽子を取つてくれ。」
亭主は一散に、不思議な男の跡を追かけました。そして、村はづれの所で、やつと追付きました。
「一寸待つて下さい、貴方。その娘を連れて行つてはいけません。その娘は、娘の母親が、でなければ、母親からの書附けを持つた方だけはお渡し出来ないので。失禮ながら貴方は書附けを持つてゐますか？」
男は黙つてゐました。そして、懐から皮財布を取り出しました。
「うまいぞ、もつと金を呉れるのか。」
男は、ゾクリとする程、嚇しになりました。併し、男の取り出したのは、一枚の紙切れ

でした。それには、

「この方に、コゼットをお渡し下さい。母親、フアンターヌ」

と、書いてありました。亭主は返す言葉もありませんでした。その紙を受取つて、スゴゴと家へ歸つて行きました。



お父さんのやうに思つてゐました。そして、毎朝起ると、一緒になつてお人形遊びをしたり、まことなしたり、本を讀んだりしました。

ジャンバルヂヤンの今までの五十餘年間の生涯は、全く一人ぼちの寂しいものでありましたが、彼は今迄嘗て、人を愛したり、又、人に愛せられたりした事はありません。十九の時から監獄に入れられて、それから何

十年の長い間、人々から罵られ、辱かしめられて、一生を涙の裡に送つて来たのでした。

そのジャンバルヂヤンが、コゼットに會つた時以來、不思議にも乾からびた心に潤ひが出て來ました。ジャンバルヂヤンは、丁度母のやうな心を以て、コゼットを愛しました。コゼットも又よくジャンバルヂヤンになつき、二人は大へん幸福にバリーの郊外で暮したのでした。

併し、この例へば、山狭の湖のやうな静けさは、何時まで續いたでせうか。それから後、もう二度と恐ろしい嵐は起らなかつたでせうか。ジャンバルヂヤンは何時までもコゼットと一緒に、楽しく暮すことが出来たでせうか？

(前篇をばり)



童謡

野口雨情選

(子供篇)

紅殻さんば(賞)

神奈川

岩月輝代詩
(十四)

紅殻とんぼが
赤い帯しめて
お山の方から
飛んで来た

たんば(賞)

千葉 大川

政雄
(尊五)

たんばは寒いよ
こがらし吹くよ
誰かが遠くで
しばもすよ

お馬

京都 東 政二郎
(十四)

雨に濡れ濡れ
お馬はひとり
馬おひさんは
まだ来なさるぬ
日暮れになるに
雨に濡れ濡れ
お馬はひとり

こがらし

埼玉 計谷利兵衛
(高二)

ゆふべのこがらし
どこ行つた
けさはしづかで風もない
庭の木の葉を
はいたまゝ
ゆふべのこがらし
どこ行つた

子すゝめ

朝鮮 河野正三郎
(十四)

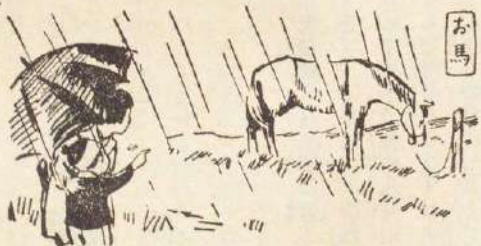
巢から首出した
すゝめの子
表の通りを
みてるのか

夜

秋田 石川とし
(尊六)

静かな夜だ

お馬



雨だれが
何か言つてゐるやうだ

一一六

青いお空を
みてるのか

雲雀

熊本 森本 康雄

ヒバリ
チユチユク雲雀
晝ばかり飛ばす
夜飛んで
お星様と
あそばぬか

青の芽

京都 松田まつ子
(尊五)

こゝにも
伸びた
青の芽だ

のろい言ひ方だ

梅の花

群馬 金子 リセ
(尊五)

にはでぼんやり
みた
梅の花
一つさいてた
つばみもたくさん
でてゐた

学校のわき

千葉 恩田由太郎

どこのちゃんだか
学校のわきを
通つて行つた
寒むさうに
うで組をやつて行つた
毛糸の深いしやつぽを
かぶつて行つた

一一七

なくのかな

小川

群馬 神村 とめ
(尊五)

小川がさら
ながれてる
月がちら
うつつてる

朝のお山

兵庫 三木
(十三)

朝のお山はね坊だよ
もやのふとんに
ねむつてる
にはとりないても
まだ起きぬ
朝のお山はね坊だよ

狐のなき聲

東京 堀口 花子
(尊五)

狐のなき聲
どこじやらはい
お山で
コン
なくのかな
それとも
たんばで

（傳説童話）

金紙銀紙（選外）

石橋 宗雄

寺内萬治郎畫



肥後國の高瀬驛の近くに、兩八幡といふ神社があります。それは二つの八幡様が隣り合つて立つて居るのですが、毎年八月の祭の時には、奇妙なことをする習慣があります。

お祭りの日になると、娘を綺麗に着飾らせて、肩にのせて、その背後から金紙と銀紙で作つた、直径一間もあるやうな大團扇で娘をあほざながら参詣をするることになつてゐるのです。そして之と同時に、

お社に詣つて、大暴風雨などが起らないやうにお願ひして、娘を入れた箱を社の前に残して歸つて來るのでした。そして次の朝見に行くと、箱は空っぽになつて、娘の姿は無くなつて居るのでした。

このやうにして、毎年毎年、村の人達は、泣く泣く御供を上げなければなりませんでした。すると或る年のこと、何處からか一人の虚無僧がやつて來ました。そして一軒の百姓家に泊めて貰はうと思つて、

「ごめん下さい、私はごらんの通りの僧でございすが、もう日も暮れさうになりましたので、どうぞ一晩だけ泊めて下さることは出来ませんか。」と言ひました。すると奥の方から、

「出来ません。こんな悲しい日に、そんなことを言つたつてだめだよ。」とつつけんどんに言ふ聲が聞えました。それで虚無僧は仕方なしに又隣りの家に行つて、

直ぐ近くにある犬薬師様といふ社でも、盛な祭りがあることになつて居りま

この兩八幡様は、ずっと昔は非常に有難い、よい神様でありました。そして村の人を守つて、米や麥などの五穀がよく出來るようにして下さつたのでした。所が、いつの頃からか、兩八幡様が急に荒い神になつてしまはれたのです。そして毎年の祭の前になると、きつと娘の居る家に白羽の矢が立つやうになりました。

その白羽の矢の立つた家では、必ずそのお祭りの日に娘を人身御供に上げなければならぬのでした。若し娘を人身御供に上げないと、それからはいつも大暴風雨が續いて、家は倒れ、大洪水などが起つて、五穀は何も出來ないのでありました。そこで、白羽の矢の立つた家の人は泣く泣く娘に白い着物を着せて、白木の箱に入れて、村の人達みんなと共に

「泊めて下さることは出来ませんか。」と丁寧に頼みました。すると中から一人の男が出て来て、不氣嫌な顔をして、

「だめだよ、今日のやうな日に来たつて。」と言つて、ぶいとお奥に入つてしまひました。

そのやうにして、どこに行つても泊めて呉れる家はありませんでした。大體ならば何處の家に行つても、直ぐ快く泊めて呉れるのに、どうしたことであらうと思ひながら、一軒の家の前に來ました。そしてとても、駄目だらうと思ひながらも中に入つて行くと、家の中ではみんなの人が、わい／＼と泣いて居るのです。その真中には、一人の娘が白い着物を着て坐つてゐました。

やがて、中の一人が、

「さあ、もう諦めて下さい。日が暮れてしまはない中に上げて來なければ大變ですよ。」と言ひました。そこでやつと皆の人は立ち上つて、そこにあつ

社の前に置いて、逃げるやうにして歸つて行きました。その後で虚無僧は拜殿の隅にちつと隠れて様子を窺つて居りました。

だん／＼夜は更けて行きました。やがて丑滿時になると、怪しい風がさつと吹いて來て、忽ちどこからか、真白い大きい化物が現はれて來ました。金色の眼がガラ／＼と輝いて、銀の箭のやうな毛が生えた、猫のやうな姿をした恐ろしい化物です。化物は白木の箱の前まで來ると、大喜びで、そこらをつぐるぐると周つて踊り出しました。そして踊りながら、

肥前の國の

恐しい

金紙銀紙が

知らなけれや

俺はいつでも

太平樂

た白木の箱の中に娘を入れました。そして又わいわいと泣き出しました。虚無僧はあんまり不思議なので、そこに居た一人に、

「皆さんは何を悲しんでいらつしやるのですか。」と尋ねました。するとその人はびつくりしたやうに虚無僧を見て、

「人身御供を上げるのだよ。」と言ひました。

これを聞くと虚無僧は、さつきから村の人達が悲しんで居るわけがよくわかりました。そして、その神様が、八幡様だと言ふことを聞くと、不審に思はずには居られませんでした。

「八幡様なら、人間の守り神だから人を食つたりされるわけはない。これはきつと化物の仕業に違ひあるまい。」と考へました。

それから村の人達は、泣きながら、娘を入れた箱をかついで、森の中の社へ持つて行きました。虚無僧も後からついて行きました。やがて村の人は箱を

太平樂

と歌ひました。それから暫くすると、白木の箱に跳びかゝつて、蓋を開けて、中から娘を出して食つてしまひました。そして何處へか消え失せてしまひました。

怖しいのをちつと堪へて見て居た虚無僧は、夜が明けると直ぐそのまゝ、肥前の國へ出發しました。虚無僧は、あの化物が恐しいと歌つて居た「金紙銀紙」といふものを見つげようと思つたからです。

それから肥前の國中を尋ね歩いて、やつと虚無僧は「金紙銀紙」と言ふものを見つけ出したのです。

金紙銀紙といふのは、二匹の犬だったのです。金紙の方は金色の毛を持つた犬、銀紙の方は銀色の毛を持つた犬でありました。

虚無僧はその金紙銀紙を連れて大急ぎで、この村へ歸つて來ました。そしてやつと、お祭の日に着く

ことが出来たのです。
いよいよ宵になると、一人の娘は、白木の箱に入



れられて、例の如くに社の前に持つて行かれました。
そして村の人達は泣く泣く歸つて行きました。虚無
僧はその二匹の犬を連れて、拜殿の隅にちつと隠れ
て居ました。すると、だん／＼夜は更けて行つて眞
夜中になりました。忽ちさつと怪しい風が吹いて來
ました。二匹の犬は耳をきつと立て、身構へまし
た。と、何處からか又怖しい化物が現はれて、白木
の箱の前に来ると、大喜びで、ぐるぐるとそこらを
廻りながら踊り出しました。そして踊りながら

肥前の國の
恐しい
金紙銀紙が
知らなければ……

と歌ひ出しました。この時虚無僧が「それッ」と
言つて二匹の犬を放ちますと、待構へて居た金紙と



銀紙は「ウオー」と吠えながら化物に跳掛かつて行
きました。化物はびつくりしましたが、金色の眼を
ギラギラと輝しながら、二匹の犬に立ち向ひまし
た。そして物凄しい格闘が始まりました。二匹の犬は
力を合せて化物に噛みつきました。化物は死物狂ひ
で荒れ廻りました。
凄じ恐しい格闘は、朝まで續きました。そして二
匹の犬はやつと化物を噛み殺してしまひました。然
し可哀いさうに、金紙銀紙も深い傷を受けたため、
そのまゝ死んでしまつたのであります。
それから、この村には又平和な、楽しい時が來ま
した。八幡様は昔のやうに有難い、よい神様になり、
村の人を守つて下さるやうになりました。そこで村
の人達はこの勇しい金紙銀紙の二匹の犬のために犬
薬師といふ社を建てたのです。それが今も残つて
居る犬薬師様であります。(をばり)

島か山へ塞

((語。物。朝。爲。))

三島霜川

寺内萬治郎畫



身は松山に音をのみぞ啼く

爲朝の焼首は京洛へ上せて、二條京極に晒されました。歴史や物語でも、爲朝は箱に火をかけ、腹を掻切つて、孤島の霧と消えたとしてあります。もし、然うだとしたならば、この物語も、これで「終」になるのですが、しかし、世の中には、死んだ者が甦るといふやうやうな奇蹟さへあるのです。で、平家の軍勢が、爲朝の首だと云つて、京洛へ持つて行つた焼首は、爲朝の首でありました。んぐした。それは、眞んとは鬼夜叉の首でした。つまり、鬼夜叉が、爲朝の身替りになつて、箱へ火をかけ、腹を切つたのです。さうして、黒焦になつて、爲朝と見せかけたのです。

爲朝は、どうしたのですしょう。それから半年ばかりして、正しく云ひますと、嘉應二年の秋の本の頃に、爲朝は、讃岐の松山といふところに、ひよつくり現はれて参りました。その姿はと云ひますと、どこか、川舎のつまらない

武士が、流浪して、國から國へと旅をして廻つてゐる――まあ、さう云つたやうな様子でした。

松山から少し離れて、白峯といふ、ちよつと險しい山がありました。そこに、崇徳上皇の御殿がございました。爲朝は、保元の亂に、上皇の方へお味方なした御縁がありました。それで、流離に離れて、大島を脱出すると、伊豆相模の海を乗りきつて、三崎といふ浦に着きました。それから、下野の足利の方へ行つて、風に乗せて捨てた朝帷に逢ひました。さうして、山を越え、海を渡つて、はるばると、この松山までやつて來たのでした。

上皇は、保元の亂の後、間もなく此の松山に流されて、九年の間、浦の古屋を假の御所とあそばしてお過ごしになりました。

横千鳥 あとは都に迎へども

何んと、おいたはしい御製ではございませんか。このお歌には、都の空をなつかしく思召した涙が溢れてゐるやうでございます。しかも、上皇は、御自身にお寫しになりましたお經を、都の寺へ納めようとおそばしても、それさへも許されませんでした。上皇は、魔道に入つて、この恨を晴らすと、憤りになつて、御髪も御爪も延ぶるがまに、恐ろしいお容姿になられました。さうして、四十六といふ御年で、南海の草の庵に御隠になりました。その御有様を拜した者などは、ひそかに、上皇が天狗におなりおそばしたなど、云傳へました。

爲朝が、白峯に参拜したのは、上皇が崩御になりましたから、凡そ五年程経つて後のことでした。尤も、爲朝よりも前に、名高い歌よみの西行法師がこの白峯へ参拜しました。そして、

「よしや君、昔の玉の床とて、かゝらむ後ちに何にかはせむ」といふ歌を同向して参りました。

爲朝は、御殿のこなたに踞つて、終夜、香を焚いたり、經を誦したりして、一夜をそこに明しました。そして、父の爲義や兄の義朝の、いたましい思出に耽つて、源氏の没落を歎きました。月は暗く照つて、蟲の音も細々と、悲しい夜でした。大きな望を抱いてゐる爲朝も、切りに涙を流しました。

猪退治

阿蘇の山は深かつた——行つても行つても、ろくに人家のない、峻しい山と谷と溪河とがつゞいて

ゐました。爲朝は、いつか、路に迷つて了りました。そして、どう方角を見極めて進むで見ても、人里のあるところへ出ませんでした。幸に干飯を用意してゐましたから、それで飢は凌ぎましたけれども、もう三日も山から谷へと迷ひ歩いて、體が、すあぶん、疲れて了りました。

「困つたなア。」

爲朝は、眞ん中に弱りきつて了りました。そして、とある岩角に、どツかと腰をかけて、「どうしようか」と考込みました——百萬の敵をも恐れぬ爲朝も、「何方へ行つたら人家のあるところへ出られるか。」と、只、それだけのことが解らないで、途方に暮れて了りました。

「かうなつては、猿の智慧にも及ばない。」

爲朝は、ツクツくと然う思ひました。

「これでは、やがて、狼の餌になつて了ふより他はあるまい。」

爲朝は、そんな情ないことも考へました。爲朝が、こんな情ない思をしたのは、まツたく、生れて、始めて了した。

するうちに、日が向ふの山の蔭に落ちて、そこらが、冷いやりと蔭つて來ました。山風が、びゅつと、吼えるやうに吹立つて、木の葉が、雨のやうにハラ／＼と飛ぶ——もう干飯も盡きかけてゐるので、爲朝は心細くなるばかりでし

た。

すると、何んですか——恰ど、荒馬でも駈け來るやうな、すさまじい物音が、山風にまぎれて、さツと聞えて來ました。しんとした深山です。耳を傾げると、踏かへず蹄の地響までが、ハツキリと聞えました。

爲朝は、きツとなりました。するうちに、およそ牛ほどもあらうかと思はれる大猪が、牙を反らし、鼻風を吹いて、哮に哮つて、爲朝の方を目掛けて、突ッかけて來るのでした。

よく向ふ見ずの亂暴な奴のことを、猪武者と云ひますが、それです。その亂暴な猪が、向ふ見ずにやつて來るのです。

「あいつの牙にかゝつては耐つたものではない。」と、思つて、爲朝は、ヒラリと岩の上に飛上がりました。そして、よく見ると、猪の背なかに獵矢が二筋まで立ってゐました。

「うまいぞ！」と、爲朝は、悦んで、子供のやうに躍上がりました。それは、獵師が近くにゐることとが解つたからでした。

猪は、傷を負つて、血迷つて居りました。で、爲朝の姿を見ますと、「うのれ、敵め。」とでもいふやうに、猛烈な勢で、岩の上へ飛上がつて來ました。爲朝は、ヒラリと身をひねつて、「やツ」といふ氣合と共に、岩から飛下りざま、鐵のやうな脛を飛ばして、ウンと猪

の鼻頭を蹴りつけました。蹴られて、猪は少し屈む。そこをもう一度蹴りつけて、双手で捻倒して、ボカ／＼と、眼のあたりを揉みつづける。猪は、だん／＼弱つて、ふら／＼呻きながら、へたばつて了りました。

と、そこへ、自然木の弓を持つて、さながら山男のやうな獵師が、息を喘ぎ／＼とツ、とツと、駈けつけて來ました。そして、猪の倒れてゐるのを見ると、「あッ」と驚いて、少く口もきかないでゐました。

「お前が、この矢を射たのか。」

爲朝は、さう云つて、たづねました。

獵師は、ギョロリとした眼で、
ジロ／＼爲朝の様子を見ました。
『そんなら、この猪はお前の獲物
だ。勝手に持つて行くが可い。』
爲朝は、息さへきらずに、に
こ／＼しながら、云ひました。そ
して、もう三日も、路に迷つて困

つてゐることを話しました。
獵師は、叮嚀に、びよ／＼お
辭儀をしました。『それは御難儀な
ことでござりましたらう。私は、
古くから此の山に住んでゐる獵師
でござります。今夜は、私の小屋
にお泊りなされたが、宜しうござ
ります。明日は、私が
人家のある方へ御案内
致しますよう。』
ボク／＼した言葉で
したか、獵師は、親切
に云ひました。

爲朝は、獵師といふ
のに、スツカリ安心し
て、その小屋に一夜の
宿を頼みました。

不思議な猿酒

獵師は、爲朝に半肩貸して貰つ
て、獲物の猪を丸太でさし荷にし
て、その小屋に歸つて來ました。
それは、丸太と丸太とを組合はせ
て、それを藤や葛の蔓で搦めたや
うな、ひどい小屋でした。しかし、
雨や風を防ぐには充分でした。圍
爐裏も切つてあつて、獵師の妻は、
ドン／＼薪を焚いて、夕飯の粟を
煮て居りました。

爲朝は、その火に暖まつて、四
日ぶり、やツと人間の『仲間』
に歸つて來たやうな或る安心を致
しました。氣も弛みました。

『お客さん、お疲れになりましたら
う。今夜は、まア、ゆるりとお休



みなさるが可い。』
と、さう云つて、獵師は、にこ
にこしました。そして、

はゞ天然の酒でござります。』
『それは珍らしいな。』
『はい。飲つて御覽なさい。疲位

は、不思議に、すぐになほツて了
ひます。』
その言葉には、妙な誘惑があり
ました。爲朝は、それに氣がつき
ませんでした。そして、勧められ
るまゝに、一杯二杯と、杯をかさ
ねて、その酒を飲みました。甘露
のやうに甘い、しかし、強い、芬
の高い酒でした。

獵師も、少しづつ二杯ほど飲み
ました。

『うまいな！』
爲朝は、何度となく然う云つて、
感心しながら、六杯七杯と、すゝ
ぶん、飲みました。さうして、體
が、とろ／＼と溶けて了ふかと思
はれるやうな、好い心もちに酔ッ
て了ひました。するうちに、恐ろ

しく眠氣が催して來ました。それがまた、何んとも云へぬほど好い心もちで、ウト／＼、ウト／＼してゐるうちに、やがて、グウ／＼鼾を立て、眠って了ひました。獵師は、獵師の妻と顔を見合はせました。そして、「何うだ、すてきな壯者だらう。猪をやつつけた手並を見ても、役に立つぞ。近頃の大獲物だ。」と、云つて、眠りを覺させようとするやうに、二三度、爲朝を揺つて見ました。しかし、爲朝は、正體がありませんでした。獵師は、妻に、何やら目配をしました。妻は、うなづいて、用意の麻縄を持つて來ました。さうして、夫婦は、爲朝の手足をグルグ

ル巻に、厳しく縛つて了ひました。それでも爲朝は、目を覺しました。獵師は、松明をともして、外に出ました。そして、何か合圖をするやうに、向ふの山に向つて、松明を振りました。しばらくすると、これも獵師のやうな姿をした大の男が、二三人づつ、一ツしよになつて、やつて來ました。それが十人ほどにもなりましたが、そのうちには、鹿の装を着た怖ろしさうな奴もゐました。この十人あまりの者が、爲朝を宙にかき上げました。そして、山坂を登つて、何處へともなく擔いで行きました。それでも爲朝は、

正體なく眠つて居りました。

山塞の女王

坂を登り、谷を渡つて、凡そ半里ほども行くと、そこに、丸木の柵を構へ、櫓を上げた、塞がありました。爲朝は、この山の塞の奥深く、擁ぎ入れられて、丁ど廣庭になつたやうなところに轉して置かれました。そこには、篝火が焚いてありました。怪しい奴も大勢居ました。丸木の縁のついた廣間には、弓、矢、薙刀などが、たくさん、かけ列ねてありました。――まるで「陣所」のやうな嚴しい構でした。しばらくすると、奥の方から、年の頃四十位の、ゴツ／＼した阿

爺が、やはり、熊の裘を着て、出て來ました。

縁の上から、爲朝を透して見て、「ム、此奴か。だいぶ圖體の大きい奴だ。猪を撲り殺したほどの奴なら、少しは役に立つだらう。まづ、いつもの藥を飲ませて、酔を覺させるが可い。」

と、臆で、指圖をしました。そして、其のまゝ奥へ入つて行つて了ひました。

その後で、大勢の一人が、水を汲むで來る。獵師は、懷ろから藥を取出して、爲朝の口に啣ませました。さうして、皆、何處へか居なくなつて了ひました。後には、只、篝火が、夜寒の山風に煽られて、淋しく燃えてゐるだけでした。



爲朝は、やはり、死んだやうになつて眠つてゐました。また、少く經ちました。爲朝は、

ふと目を覺まして、びつくりして了ひました。手が、後手に縛られてゐる、足も縛られてゐる、それ

で、寢返りをすることも出来ないのではありませんか。

「これは、可けない。また、しくじつたな。平家の奴等に捕つた時は、病氣上がりで、弱つてゐたところだつたから、仕方がないが、今度は……おかしいぞ。一體、おれは、どうしたといふのだ。」

爲朝は、眼をバチ／＼させて、考へて見ました。するうちに、霧が消えて行くやうに、だん／＼心がハッキリして來ました。

「あツ。おれは、あの、うまいうまい酒を飲むだ。あんまり、うまい酒だつたから、つい、飲過した。それから……」

爲朝は、ハツとして、「こりや、やられた!」と、思ひました。し

かし、もう何うすることも出来ませんでした。

爲朝は、齒嚙をして、口惜がりました。『あの獵師は、山賊だつたな。こゝは山賊の頭の棲家なんだらう。』

爲朝は、無理に、體をひねくつて、そこらを見廻して、さう思ひました。

そこへ、以前の、ゴツ／＼した阿爺が、松のともし(小さな炬火)を持つて、先きに立ち、その後から、女王のやうに、氣高い、美しい女が、小具足をつけて、やつて来ました。

阿爺は、松のともしを、爲朝の顔に照らして、その女王のやうな女に見せました。

『や、もう目を覺して居ります。御覽じませ、なか／＼立派な奴でござります。』

女王のやうな女は、黙つて、うなづきました。そして、じつと、爲朝の顔を見つめました。爲朝も、『どんな奴か』と、その女の顔を睨めつけるやうに見上げました。双方の眼と眼とが、ビタリと合ふ……

『や、あなた様は……』

女は、びくくりして、さつと、顔色を変えました。爲朝も、呆れて、自分の眼を疑ひました。

『紀平治、このお方は、殿ではなにか。』

『殿……殿は、大島で御自害をなされた筈ではござりませぬか。他

人の空背とやらでござりましたよ。』

ゴツ／＼した阿爺は、哄ふやうに云ひました。それでも、松のともしをかげ、もう一度、よく爲朝の顔を覗いて見ようとししました。

『見忘れたか、紀平治。』と、爲朝は、苦々しげに、にっこりしました。

『や、や……』と、紀平治は、飛上るやうに、びくくりしました。

『と、と、殿、殿でござりましたか。これは／＼』と、慌て、ふためいて、縛つた縄を解きにかゝりました。

女王のやうな女は、爲朝の妻の

白縫でした。白縫も、眼のうちに涙を光らせながら、急いで、爲朝の足の方の縄を解きにかゝりました。さうして、爲朝の手足は、程なく自由になりました。

爲朝は、さつと拾四年ぶりで、妻と、家来の紀平治とに、めぐり逢つたのでござりました。しかも、そこは、怪しい山寨でした。

夫婦主従、三人は、鼎の足のやうに對坐つて、保元の戰以來のことを、互に語合つて、その夜を明しました。

爲朝は、大島で、爲朝、朝雅など、三人の子を儲けたことや、その子の母の影江が、自分の身替に死んでくれた鬼夜叉と一緒に、船に火をかけて焼死んだことや、朝雅を嵐に乗せて、海に棄てたことや、平家の軍船を一艘、射て沈めたことなどを話し、さうして、

りませんでした。

爲朝は、うか／＼と、二年あまりな、この山寨に暮らして喜びました。さうして、白縫は、男の子を生みました。

すると、この男の子の生れる朝のことでした。爲朝が、都へ伴れて上つた「金札の鶴」が、何處からとなく飛んで来て、山寨の屋根にとまりました。さうして、二聲、清らかな聲で啼くと、其のまゝ南方へ飛んで行つて了りました。

爲朝は、不思議な祥瑞だと云つて、大そう、悦びました。そして、その子に「昇天丸」といふ名をつけました。

昇天丸は、年と共に、丈夫に、そして、愛らしく伸びて行きました。爲朝は、その愛に引かれて、また五年ほど、山寨に暮らして喜びました。さうして、昇天丸は、六歳になつて、赤ちやんから「若君」と云はれるほどに大きくなりました。

柿の花 柘榴の花

若山牧水

寺内萬治郎畫

柿の花はまつ白

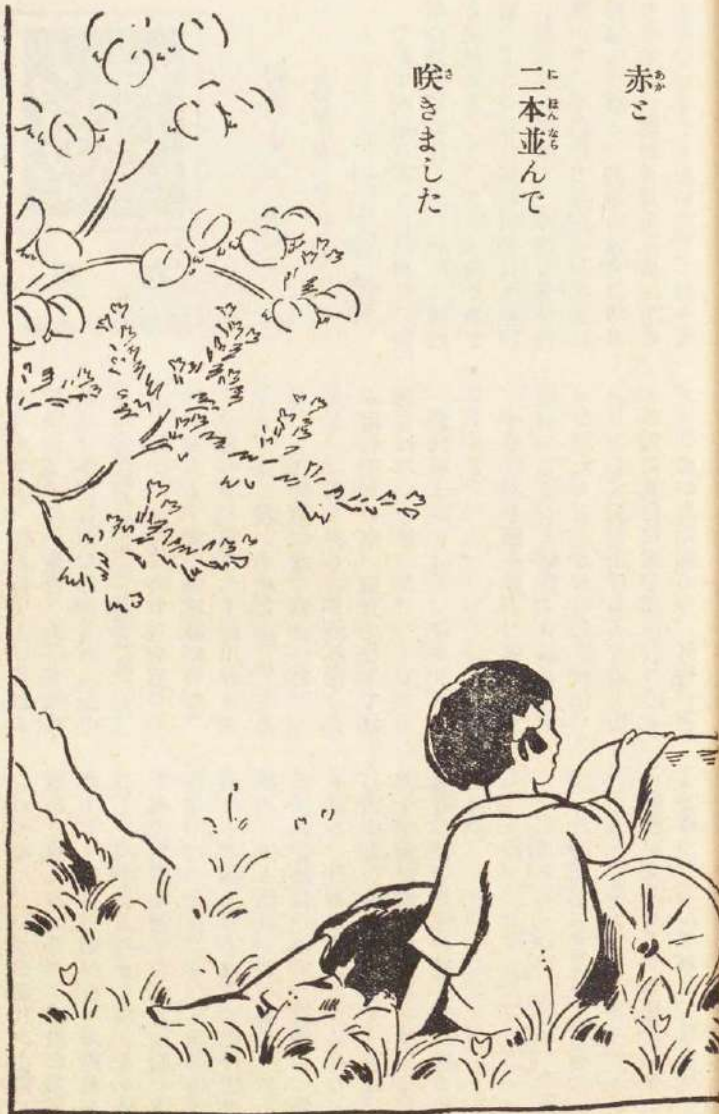
柘榴の花はまつ赤

白

赤

二本並んで

咲きました





方 綴

選 郎 次 佐 藤 齋

長野まで (賞)

長野縣北佐久郡小諸女學校一年

小 口 壽 萬 子

やがて私達を乗せた汽車は、發車合圖の笛の音と共に靜かに構内を通してうすれた様な朝の日に車内に射し込んで來た。車内は暑い程暖かで、手袋持った左手が次第に汗ばんで來る。列車の速力は早まつて來て、窓から見える枯れ芝の土手が目まぐるしい程早く行き過

ぎてしまふ。體が持ち上げられる位ゆれる。外の景色に飽いて來た私は、昨夜買ったばかりの『金の星』三月號を初めから讀み出した。ふと靜かになつたので立ち上つて外を見ると、次の停車場だつた。すぐ目の下に青色の千曲川がウネウネと長く續いて北に流れてゐる。とけた田の水に朝日が射して美しい。空も美しい。澄み切つた本當に美しい空。田舎でなくては見られないと思つた。
又汽車は動き出す、ゴツトリゴツトリと。
半分程本を讀み終へた頃、叔父様が『ちよつと御覽、日本アルプスが見えるよ。』とおつしやつた。ハツとして顔を上げると、山と山との間に眞白に雪を頂いたアルプスの山が見え初めた。汽車が進

むにつれて、いつの間にか山陰に隠れて見えなかつた。車内に人が多くなり煙草の煙がむせる程鼻をつく。川中島を過ぎる頃、人々は下車の用意を始めた。『昔は此の邊皆な川だつたんだよ。』と叔父様が云れる。間もなく汽車は長野驛の構内へ滑り込む。切符渡して外に出て『金拾錢』の乗合自動車へ乗り込み、汽車の時よりゆられながら市中をいく曲りかして、私達は赤十字病院前で自動車を下りた。長野にはまだ雪が消えずに残つてゐた。

淋しいけんか (賞)

神奈川縣高座郡大野小學校高一年

高 坂 金 一

學校から歸ると、もう皆んなこまを持つて遊んでゐた。私は早々

飯を食べて、風呂をたきつけて、こまを持つて出かけた。昔んなの仲間入りをして、勝つたり負けた



「スケッチ」(賞)

千葉縣東金校

小 林 ひ で

りしてゐた。なんとかして勝ちたいと思つて、少しむりな事をした。『正ちゃんがおこつてしまつた。くやしくなつたので、正ちゃんのこまを、思ひつきり投げてやつた。すると、尙おこつて私の悪口を言つたので、だまつて居られない。』
『落第、落第』と言つてやると、ひどくおこつて、泣くやうな顔をして家へ行つてしまつた。が、間もなく又來て、こま遊びを見てゐたが、私は風呂を見るので家へ歸つてしまつた。その後で、何時までも私の悪口を言つてゐるやうだつたが、私はかまはず家に居た。
やがて母は水汲みに出かけた。其の時、正ちゃんと言ひつけたと見えて、母は歸つて來ると、『金。お前は正ちゃんの事を、落第落第と言つたんべえ。』ときいた。私は

だまつて居た。父は、『病氣で休んでゐて落第になるか。言ふに事をけいて言へ』としかつた。
母は又水汲みに行つたが、今度は正ちゃんにあやまつてゐるらしかつた。くやしかつたと見えて、正ちゃんは何時までも泣いてゐた。私はそれを前の道に出ては見えて居たが、母は中々歸つて來なかつた。
正ちゃんはうす暗くなるまで、泣いてゐた。母が歸つて來た時、私はしかられるかと思つて、胸をどき／＼させてゐた。が、其の事を父に話しただけで、私はしかられなかつた。後になつて、病氣の正ちゃんの事を思ひ出して、あんな事を言ふではなかつたと、淋しく思つた。



（賞）先生の頭

和歌山縣 歌山寺 藤邦一

云はれたので、いや／＼歩き出した。おまはりさんは末だ機械をまはしてゐる。

新ちやんの浅草行

東京市深川區伊勢町三四
沖津清琉

日曜日の事でした。

「兄さん今日どこかへ連れてつてよ」今年六歳になる新ちやんに聲をかけられた僕は今童話を書いてゐる最中で「うるさいな」としかる様に新ちやんをにらみつけて、小聲で「ねーお父さんに連れてつてもらいよ」と云ふと、新ちやんはしぶ／＼奥へ行つたが、「とーちやん遊びに連れてつてよ」と云ふ聲が聞えた。

すると今度はお父さんの聲で、「えーまたかい。どこへ行くのさ

銀座通り（賞）

麹町區中六番町五五
井關正子
（十三歳）

昨日お父さまに連れられて銀座へ行つた。もうお正月のかざりも取れて、すつと通りが廣くなつたやうな気がする。もう七草もすんでしまつたのだと思ふと、おつかけて行つてお正月をつかまへたく

——浅草だらう。お前の行く所は浅草にきまつてゐるんだもの。えーそうだらう」と云はれた。今度は



「やさいもや」

和歌山縣妙寺町

森田愛藏

なつて來たので、何の氣なしにかけ出すと『どどこへ行く。』とお父様に言はれたので、急に氣がついてまつかになつてしまつた。それからすつと行くと、一層人通りのはげしい所に來た。お父様は尾張町だとおつしやつた。おまはりさんが旗をもつた人と一緒になつてあばれてゐる。それと一緒に青や赤の機械がぐる／＼まはつてゐる。あまり急がしいので、おまはりさんがかはいそうになつて來たので、機械のまはるのをじつと見てゐると、お父様に「又、又」

新ちやん元氣のよい聲で「あー花やしき。ねー連れてつてねー」と云つた。今のお父さんの口振りでは、てつきり連れて行つてもらへるものと思つたのでせう。するとどうしたのか新ちやんは／＼して僕の所へやつて來た。そして何か言ひたそうな顔つきをしてゐたので「どうしたの、連れてつてくれるッて。」僕は新ちやんの顔をのぞく様にして聞くと、新ちやん首をふつて「兄さんと一緒に行つて」さつきことわられたので今度はこわ／＼云つた。「なんだつて、僕と行つて、いやだ、兄さんは今急がしいんぢやないか。他の人と一緒に行きなよ」とはねつけた。とう／＼新ちやん泣きだした。何だか可哀さうになつたが、なほも知らぬ顔して原稿を書いて

わたら、臺所の方から母の聲で「新三郎や母さんが御用をすませて連れて行つてあげますから、泣かずにはまつてらつしやい。」と云はれたすると新ちやん急に泣きやんで臺所の方へどん／＼走つて行つたが、しばらくたつて出て來た時には、ちやんと、よそ行の着物に着替へてニコ／＼してゐた。

金の星が出るまで

東京府下瀧野川町田端九七

川島秀雄
（十五歳）

「只今。」弟が歸つて來たのだ。先刻から床の中で、ちり／＼して居た私は、弟が靴をぬいで居る間も待遠しくて「省三。一寸……」と呼んだ。

「なアに、またあれ？」上つて來て、弟はさも承知してゐるらしく



風景「京都市本町三啓本」

言ふ。「うん、「金の星」三月號ね。もう今日は、きつと出てゐるだらう。」私はさう言つて蒲團の下から藁口を出して五十錢銀貨を弟に渡した。それを持つと弟は直ぐ出て行つた。「今日も未だ出ないかしら。でも、もう十三日だから、出る筈だ。いつもは九日か十日に出るのに、今日は何て遅いんだらう。」そんな事を思つたりして弟の

り過ぎると、軽い失望を覚える。「おや、向ふの方から駆けて来る足音。あ、あの足よりは確に弟だ。「金の星」は出たらうか？」胸を躍らせて居ると、案の定、玄關にはた／＼と駆込む様子。「兄さん、未だ出ないツて／＼」未だ座敷に上らない中から大聲で叫ぶ。「え！」私はがっかりして床の中に身をうづめてしまつた。

蛇

又あと一日待たなきゃならない。「あーあ。」溜息を一つして私は目を閉じた。——早く明日になれば早く。その瞬間だつた。バサリ、と音がして私の枕もとに何か投げられたのは——私が驚いて頭を上げると、目のさめるやうな美しい表紙の「金の星」ではないか。そして弟がにこ／＼した顔つきで、立つてゐる。「さ、十錢おつり。」「何だい。嘘つき——」半分微笑した目で弟を睨んで、床の上に起直つた。私はいそ／＼と頁をくり始めた。

京都市下京區西洞院通松原下ル

東 政二郎 (十四歳)

ある細道を上つて行くと、路の真中に真黒な蛇が殺されて居た。氣味悪く思ひながら跨いで通らうとすると、尾のあたりが微かに動く様に見えた。「まだ生きてるよ。」友の聲に、よく／＼見ると、頭は石で打たれて、顔一面血に塗れてゐる。僕等は其儘上らうとすると、何と思つたか、其蛇が頭をもたげた。そして血まみれの顔を、僕等

の方に向けた。その様は實に物凄くも亦憎らしかつた。「生意氣だな。」といひながら、僕はそこにあつた竹の杖で、そつと其頭をいぢると、蛇は凄まじい勢で飛びかゝつた。僕は「何だ失敬な。」と口には言つたが足は二三歩後へ飛び退いた。友が「僕に貸し給へ。」と言ふから其竹を渡すと、またいぢり始めた。今度は前よりもひどく飛びつた。二人は始めのうちこそ氣味悪くも、かはいそうにも思つたが、今は却つて面白くなつて、友が「やつつけよう」といふに、僕は二も三もなく同意した。それから長い

竹を持つて来て、さん／＼に突いた。蛇もいよ／＼怒つて、終には尾の所七八寸で立つて、竹に噛みついた。蛇は死物狂ひだが、こちからはいよ／＼面白い。しかし蛇の元氣はいつまでつぞかう。七八回の後には疲れ切つたと見えて、又初めの様に動かなくなつた。僕等は興が盡きて山に上つて行つた。夕方さきの處に歸つて来ると、蛇はどうしたのか姿が見えない。二人は口にくそ言はね、いやな思をしながら歸つた。

電車の中で

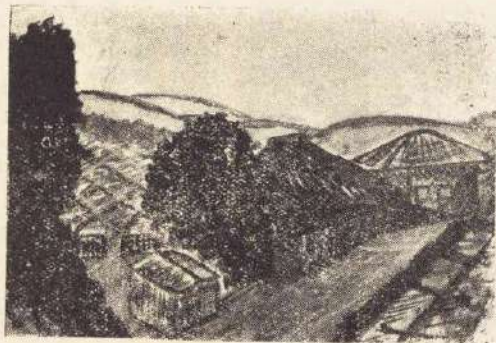
東京市泰明校 尋四

高 木 實



雪の朝「和歌山縣寺町三浦久一」

僕が電車道へ出ると、ちやうど向ふから大塚行の電車がこちらを



めがけて走つて来た。僕は急いでその電車へのつた。思つたよりもすいて居た。春の夕陽が電車のま

どがらすを真赤にそめてゐた。いつもより遅かつた。その中になんだか車中の人が僕を見て笑つて居る様な気がし始めた。
『いやなやつだなあ。顔に何かついてゐるのか。』
僕ははらが立つた。べつにおかしい所もないはずだ、と思ひながら隣の人を見た。その人は僕を見て笑つた。僕ははつとした。なんだかたいへんな事をしてしまつた様な気がした。まどから外をながめると、夕方の街はにぎやかであつた。
僕は落ちて行く夕陽を見た。すると、夕陽までが僕を見て笑つてゐる。
僕は、かばんから讀本を出して、讀むとはなしに讀み始めたが、ちつとも頭へはいらない。

一四二
顔に墨がついてゐるのかしら？
僕は又思ひなやんだ。
その時だつた。右足の指がなんとなくくつめたいやうなので、そつと目をやつた。それとどうじに僕はかつとなつた。底のむがはがれた運動靴がばつくりと大きな口をあいてゐる。僕のかはは真赤になつた。そして、そつとくつをひつこめた。皆の笑つた事もわかつた。又どうして口をあいたのか、今朝家を出た時は何ともなかつたのに……
『え、次は大塚しうてん。』
車掌の聲は強くひびいた。大塚と聞いた僕はごむ人形のやうに飛上つてあたふたと電車をとび下りた。



讀者だより

▼金の星四月號うれしく拜見致しました。表紙のいゝこと、何とも言へません。口絵これも又近頃にないいものと思ひます。小島先生の愛犬物語、早く讀まが見たい。五百七號室も益々面白くなつて行きます。怪談童話皆大好きです。今月はい、繪が澤山あつて、本當ににぎやかでした。又来月もうんとお讀き下さい。寶藤野口の諸先生の御健康を祈ります。さよなら。(TK生)

着。どうしても狐が……。誰か本當にお好きかどうか雨情先生に知れないやうにこつそり知らせてくれる人はいないかな。ついでに猫もネ。これは別だが當選作『三日月の姉さん』は短くて整つたよい作だと思つた。(東京、ボヤシ)

▼湊一訓氏の推薦童話大變に嬉しかつた。實に、近頃の童話欄では、檀上兄、名方郎兄、はさますな子さん等がお奮ひの傑です。私も今に、さうです。一年後でも二年のちでもかまはない。今に仲間入りなさせて戴きたいと思ひます。だが現在の私は、餘りに拙い者です。掲載外佳作に名が出るだけでも満足してゐる私です。笠原兄、近頃『金の星』誌上に御名が見えぬやうですが、お奮ひ下さい。
▼今宵も若く月が照つてゐます。窓に凭れて、淋しい胸を抱きしめます。懐かしい、水色の夢も、幸福の青い鳥も、冷たい私の心から去つて仕舞ひました。夜が更けて、四邊が静かになると、凍てついた様な星が、私のハートを凜凜と照らす様に思はれます。兄姉たち幸ひ安らげき事を祈ります。
(東京、橋田香津美)

▼記者様お變りはありませんか。私は去年の八月號から取つてゐますが、自分の力が足りないので投書する事が出来ませんでした。今月の岡本錦一先生の繪を拜見しまして有名な方は鉛筆の跡を消されないのであらうかと思ひました。土橋里木君の童話は非常にいいと思ひました。(岐阜、太和田)

▼春が来ました。春が来ました。ほかくと照る太陽の光は、北國でも、あかるくなつて来ました。これから、凡てに勝つて伸びるでせう。私の童話も、しばらくの間、會心の作もなかつたのです。来ましたが、御高評をあほざかと思つて、投書いたしました。どうぞ、御眼を通して下さい。『愛犬物語』は『金の星』のほこりで。(秋田、太下孝)



通信

自由畫選評

山本 冊

△今月は数は多かつたのに佳作が甚だ乏しい。もつと傑作を振つて送つて下さい。

△林ひで子さんの「スケッチ」(推賞首席)は立つて居る方と、座つて居る方の顔がよくかけて居ますが、この鉛筆の線をほき／＼とせすにおかき下さい。

△齊藤邦一君の「先生の顔」(推賞次席)は色にも筆にも冴えがあつてよいが、形がくつれて居ます。もつと鈎合などに氣を配つて形の自然をつかまへるやうにして下さい。

△森田愛蔵さんの「やさしいや」こういう風俗を繪にする事は大いに面白い事です。もつと／＼かきこんで下さい。

△岡本啓三さんの「風景」物の見かたは、ていれいですが、描き現し方は少し勢が足りない。それから影に用ひたピオレント

綴方の選後に

齋藤佐次郎

▽前の月は傳説童話で澤山の眞をとつた爲めに、一回お休みにしたので、二ヶ月分の綴方を一度に選みました。随分澤山なので、大層骨が折れました。しかし、面白い作が澤山なので、嬉しい氣もしました。

▽入選された作が澤山あり過ぎたものには困りました。載せなくてはならないものが随分ありましたが、眞が足りないものが残念です。佳作のはじめの方は十分入選するだけの価値があつたので、その残りで作作欄の名前を見て下さい。

▽井關正三さんの「裸座通り」を讀んではあなたが三四年前によく描かれた自由畫を思い出しました。上手といふのではありませんが、生き／＼とした見方がしてあつて、

その點を大層面白く讀みました。殊に交通整理をしてあるおまはりさんを青いゝところから面白くありました。おまはりさんが旗を持つた人と一緒になつてあはれてゐる。といふ觀察など、自由畫を見るやうな面白さです。

△神奈川縣の大野小學校の作は皆な優れてゐましたが、中で「淋しいけんか」を選び出しましたが、この作などは、落ちつきのある、そしてよく氣持をあらはした作として推薦したいものでした。

▽神津清純さんの「新ちゃんの逢草行」は例の通り上手です。この人は書く力を十分持つてゐるといへるでせうが、しかし、讀者にまかせて、氣になつて書かないやうに御注意。

▽川島秀雄さんの「金の星が出るまで」は／＼／＼讀者をひきずつて行く力のこもつたところが大層氣に入りました。おとなしい、落ちつきのあるもの、ゆかしく思はれます。

▽東政二郎さんの「蛇」執念深い蛇をよゝ現してゐます。／＼／＼と書いてゐる此の調子を忘れないやうにして下さい。

▽小口壽萬子さんの「長野まで」壽萬子さんは熱情の人だと見えて、書くものには何時もその熱情を感じます。そして、キビキビしてゐます。むしろ男のやうな筆つきです。こんどのはいい作でした。

金の星誌友募集

△本藤浦子さんの「電話」電話がかゝつて来て胸をわく／＼させるあたり何ともいへない良いところがあります。

△思ひのまゝに／＼書いて行くところに、胸がスーとするやうな面白さがあります。

金の星の誌友を募集致します。誌友には色々な特典や便宜があります。すから、振つて御加入下さい。ハガキで本社へ御申越次第、早速誌友規則を御送り申上します。

誌友には毎月「小馬」と云ふ美しい小雑誌を無代進呈致します。「小馬」は誌友諸君の研究室であり、娯樂室であります。誌友の方々の、童話童謡に関する研究や、自作の童話童謡や、其他隨筆消息等あらゆる種類の原稿を掲げます。誌友の方々は、どし／＼御投稿下さい。

童謡の選後に

野口雨情

詩が散文に近づいて來たのをみて、詩の進歩であると思ふ人があつたらう。それは大

す。今回、皆さま方のお作を見ますに、本誌上に掲載のものは暫く描いて、その多くは餘程散文に近づいて來た感があります。散文童謡と言ふことが許されるならば、散文童謡として採ることも出来ませんが、左

募集童話に就て

記者 者

募集童話は前から推薦すべき作として擧げられてゐた「井戸が使へなくなつた譯」を今月號で發表した爲めに、外の推薦作を擧げることが出来ませんでした。本月は都合上推薦の發表を一回だけ延期することになりました。次號には必ず發表します。

編輯室より (記者)

△いい季節となりました。もう直き標が映きます。編輯室は今ややくや五月號の最後の締切をやつてゐる處で、大忙しです。皆な夜おそくまで働いて、もう／＼となつてゐます。しかし、皆さんに少しでも餘計面白い雑誌を作るために働いてゐることと思ふと實に愉快です。大にやります。△今月はめつたに童話を書かれない日本文壇第一の大家といはれる菊池寛先生の作を掲げる事が出来て、「金の星」の光栄いよいよ増しました。

自由畫掲載外佳作

森本 康雄(熊本) 石橋晋太郎(青森)
岩谷 眞三(秋田) 齋藤 重隆(和歌山)
永岡 武三(和歌山) 齋藤 重隆(和歌山)
沖津 義知(東京) 猪野 タニ(千葉)
瀧口 愛子(千葉) 吉田 榮三(京都)
三浦 久一(和歌山) 今井 明保(大連)
小林 みや(千葉) 齋藤 好治(和歌山)
龜井 滋子(京都) 河野正三郎(朝鮮)
東 政二郎(京都) 西川むめ子(千葉)

幼年詩掲載外佳作

東 政二郎(京都) 増田 徳(千葉)
末廣 朝人(山口) 高吉 重規(千葉)
鈴木とし子(千葉) 久保田美恵(長野)
清水梅三郎(群馬) 松澤すみ子(千葉)
根本 悦子(千葉) 河邊すみ子(神奈川)
高吉 長三(千葉) 中村 速生(大阪)
河野 浩朝(朝鮮) 中坂よし路(東京)
河野正三郎(朝鮮) 松原 千可(千葉)
市川 千吉(埼玉) 戸島 勲(山口)
山根 明山(山口) 土曜 繁雄(東京)
佐藤 治子(東京) 林 義實(山口)
内藤 卓二(愛知) 久保 勝久(埼玉)
小倉 正大(茨城) 齋藤 房(和歌山)

綴方掲載外佳作

小川 藤那(神奈川) 小宮 直作(神奈川)

童謡掲載外佳作

葛木 和夫(高知) 中村 利雄(大阪)
藤野 富久雄(大阪) 松井 純(東京)
石橋 宗雄(福岡) 川島 秀雄(東京)
福井 勝秋(東京) 河邊すみ子(神奈川)
前野 國利(鹿児島) 川口 洋(東京)
小野 伴三郎(新潟) 安島 雨品(千葉)
石原 孝(東京) 山本 静子(千葉)
横上 春之助(和歌山) 山内 正雄(大阪)

【子供篇】

大野 正美(香川) 前川 徳三郎(新潟)
大西 正五郎(京都) 沖津 清琉(東京)
石川 ちえ子(東京) 金子 豊作(福岡)
矢野 嘉三郎(京都) 山村カネ子(熊本)
林 繁三郎(東京) 茶木登美子(神奈川)
吉田 榮三郎(京都) 山村 加枝(熊本)
柳川 新平(神奈川) 保田虎之助(長崎)
高野 三蔵(長野) 伊藤 榮(千葉)
中山 喜代司(京都) 葉山 廣吉(京都)
岩下 幸吉(長野) 東 政二郎(京都)
伊藤 忠成(千葉) 山崎 ちか(群馬)
河野 正三郎(朝鮮) 田邊 都郎(山梨)
三浦 政實(秋田) 佐々木てつ(秋田)
鹽野 昇(群馬) 高木 實(東京)
舞鶴 あみ(京都) 岡本邦之助(和歌山)
染谷 高之助(千葉) 松井 英伸(東京)
桑名 正城(廣島) 松田はるゑ(京都)
編飼 泰子(福岡)

新誌友名簿

三高 信英(新潟) 後藤 賢三(東京)
館岡 行雄(神奈川) 三浦 公子(東京)
松本 宗吉(栃木) 池田 正一(東京)
波多 隆清(長野) 原田小太郎(神奈川)
渡邊 治朗(新潟) 岩井 雅子(奈良)
横井 修吉(京都) 松田 榮(北海道)
守政 輝雄(山口) 清水 治平(東京)
服部 敬二(東京) (以下次號)

◆世界少年少女第三篇 ネルリン

◆(三井信衛著) 偉人傳大系は、ジャンヌ・ダルク、シーザーに續いて、ネルリンが出ました。ネルリンは、皆様に御承知の通り、世界の偉人として聴かされた偉人です。その國を愛する赤心、己の責任を重んずる觀念は、誰が讀んでも立派な教訓になるお話しです。ホレイシオ・ネルリンの生立ちから、少年時代、それから海軍の生活に入つて、士官から、總司令官になり、トラファルガルの海戦に、大勝利の歡慶を聞きつゝ、死するまでの偉人の一生は、如何に讀者の血を湧かし、肉を躍らせるでせうか。『イギリス帝國は、各員すべて、その義務を果さんことを望む』とは、有名なトラファルガア開戦の信箋、我が東郷元帥の『皇國の興廢この一戦にあり。各員奮勵努力せよ』と共に、世界に鳴り響いた勇者の聲である。(四六判 横線本、一七〇頁、表紙口繪三色版、挿圖寫眞版數葉、定價金九十錢、本郷動坂町金の星社發行)

◆どんぐり山(沖野岩三郎著) かつて『金の星』誌上で大評判となつた沖野先生の長篇『どんぐり山』の外に、これ『金の星』で發表された同先生の『誌上講演、どちが偉いか』を一冊にした本です。例の狼のチョンが人間社會を批評したもので、狼はいはれて成る狼と認めるやうな面白

い話があるところに出て、近來での名著であります。東京市日本橋區數寄屋町 大阪 風説發行 定價金壹圓貳拾錢

◆兒童劇十八篇(澤澤青花著) 可愛らしい、無邪氣な、兒童劇十八篇。いづれも、輕い味のある、面白ものばかり。そこに、歌調や、諷刺のある、著者の自信のあるものを集めてある。装幀も小ジヤマリとして氣が利いてある。三五判 繪表紙二五頁、定價壹圓貳拾錢、京橋南船場町、實業の日本社發行

◆殺生石物語(逸見子鳩著) 古い傳説の九尾の狐の物語りを、わかりやすく書いた物語、筆もこなれて、中々面白く出来てゐる。藤澤梅彦の序は、九尾白狐の傳説について考證よく書いてある。四六判 繪表紙一三頁、定價壹圓貳拾錢、小石川宮下町三六、日本童話協會出版部

◆クオヴアチス(永橋卓介編) 世界名篇物語叢書の第三編として出た本書は、ローマのネロ帝が、基督教徒を迫害して、都を焼くはら火焔を眺めながら、詩を作つたり、圓形劇場に教徒を押し込んで、猛獸の餌食にしたたり、殘虐極まりなき暴君が、遂に悲慘の最期を遂ぐるまでの物語りは、讀者の筆によつて活躍してゐる。有名なエンキウウィツチの名作。四六判 横線本一七〇頁、三色版外挿圖數葉、定價九拾錢、東京上野込二八、金蘭社發行



金の星社 五月號

出版だより

童話讀本 (3)

びんぼう大黒

神野岩三郎先生著▽定価金六錢
神野先生の童話讀本は、第一編に『赤い熊』第二編に『金のつるべ』と出て、この第三編の『びんぼう大黒』が出ることにになりました。
童話讀本はこの頃の流行となつてゐる／＼の出版社から童話讀本と銘をうった本が出るやうになりました。しかし、童話讀本といふものを日本で／＼の最初に發行したのは金の星社で、その著者は神野岩三郎先生でした。童話讀本といふ名は、それまでに日本になつたのですから、最初は聞きなれないために一寸妙にさへ響きました。この頃ではすつかり普及してしまつたので、いろ／＼の

童話讀本が出るやうになつたといふことは、まことに喜しいことです。
しかし後々でも日本の童話讀本として本當に残るものは恐らく此の神野岩三郎先生のものであらうといはれてゐます。それ程神野先生の童話讀本は立派なもので、一度讀んだ人は誰でも先生の深い精神にふれて、何ともいへない深い感激に打たれます。上手な面白のお話を書く作者は外にも澤山ありませう。しかし氣高い氣持を與へるやうな話を書く作者は、恐らく神野先生を外にしてはありませう。

童話讀本第三編の『びんぼう大黒』は是非お讀み下さい。この集には神野先生の傑作ばかり十一篇が集められてゐます。
大統領様へ・びんぼう大黒・メロン・冬枯れ・賢い裁判官・

不思議國めぐり

(近刊)▽定価金九十錢
英國の少年少女がバイブルの次には必ず讀むといふ程有名であり、又非常に奇抜なお話である、『不思議國めぐり』が名著大系の第二十三編として發行になります。
原書の名は『不思議國のアリス』といふ名で發行されてゐますが、日本でも早くから／＼の雑誌で紹介されてゐます。『アリス物語』と云ふ道で紹介されたこともありました。以前『金の星』誌上で西條八十先生が『不思議國めぐり』といふ作を紹介されたことがありましたが、あれはこの『不思議國めぐり』の續篇です。
アリスといふおてんば少女の夢

黒八爺さん・身代り・守り役の神様・頭と足だけの從五位様・笛吹川・歸つて来た奥志・以上十一篇
裝幀と挿畫は、例によつて寺内萬治郎先生が腕をふるはれ、非常に立派なものです。

世界少年少女名著大系 (23)
物語りです。或日、お姉さんと一緒にアリスが草原に出て草をつんでゐるうちに、うとうととして眠つて了つて見た夢がこの長い物語りなのです。
で、から實に奇抜な面白くてたまらないものです。紹介者は大戸喜一郎先生で、挿畫は原書の有名な畫を澤山にとり入れましたから畫とお話とで大層面白く讀まれます。

金塔社叢書

二大特色

百四十頁もある立派な本が僅か貳拾錢で買へる。西洋の名高い挿畫が五十枚も入つてゐる。

日本出版界破天荒の大出版であります。皆さんが讀みたくてたまらない世界中のお話、毎月澤山發行される。安い僅か貳拾錢で買へるのです。すから、この叢書で皆さんの書棚をお飾り下さい。

第一編 アラビヤン・ナイト

第二編 驢馬の一生

第三編 ロビンソン漂流物語

第四編 盗まれた王女

四六判美本 内容一四〇頁
口繪三色版 挿畫約五〇枚

各册 定價貳拾錢
發行所 振替東京 五九五六番 金塔社

(金塔社は金の星社の姉妹社でありますから、御注文は金の星社へなすつても宜敷うございます)

懸賞創作募集

父戀し

森の祈り

労働の少年

赤い猫

金の釣瓶

神野先生の童話讀本の第二篇に、この篇におお先生の製作中の傑作として先生の大將に於て各地で話され、先生のお一人の讀りなほ、金釣瓶一、二つの讀りなど、義産讀んで忘れたれぬ名篇ぞろひです。猫一と共に是非愛讀下さい。

四六判箱入美本
內容一五〇頁
定價金壹圓
送料六錢

振替東京五九五九番
電話小石川三五八七番

この本に収められた童話は、いづれも規範的童話として大評判のものであり、この上野先生が童話を面白く感じたところから、童話の本質を深く究明しようとする意図が、この書に備わっているといえます。

四六判箱入美本
內容一五〇頁
定價金壹圓
送料六錢

銅山の工夫
孤山の工夫
で、兄のつ
味深い。又
りです。又
とい

內容二五〇頁
定價金壹圓
送料六錢

會しまし
 したす
 時
 都へ出
 へて富
 世閑し
 最獲
 その荒
 波に
 同も
 故郷
 のつ
 屏森
 ！相
 助
 祖父
 父は
 家な
 貧し
 暮き
 主小
 公校
 のの
 欺き
 師總
 父な
 貧し
 暮き
 主小
 公校
 のの
 欺き
 師總

四六判箱入美本
內容三二〇頁
定價金壹圓八拾錢
送料 六 錢

紀州の邊に伊吹子と明治といふ姉
と弟が或日船に乗つて海へ出たまゝ
たが來よせんとて父の行方を探れま
歸つて來よせんとて父の行方を探れ
する困難と戦つて父の行方を探れま
す。そして最後に濟洲で父にあたぐ
り合ふといふ涙と祈りの一大長篇で

四六判箱入美本
內容二二五頁
定價金壹圓
送料六錢

東京 本坂 郷町 金の星社

【意 注】 童 童 【意 注】 綴 幼 自

自由畫山本
幼年詩……若山牧
綴方……編輯部選

陳題は何でかまひません。諸君の日々見たり感じたりしたことや諸君のすきなものを、諸君のすきなやうに描いたり、詩なり、文なりや諸君がいてください。一人で何題出してもかまひませんが、姓名は學校や學年(または住所と年齢)とともにおとさないやうにして下さい。用紙は自由紙に書るべく、畫用紙に、幼少時や親方になるべく原稿用紙(または半紙)に書いてください。よく出来た方のは、『金の星』特製の賞品を差上げます。次號締切は四月廿八日(その以後は次號へ廻る)發表は七月號、宛名は東京市本郷區助坂町三五九番地金の星社。

謠…………野口雨情先生選
話…………齋藤佐次郎先生選

童謡は十五行以内、童話は二十字詰二百行以内、優秀な作品は推薦または「特選」として發表いたします。推薦の場合は童話には五回、童謡には二回づつ、特選の場合は童話には拾回、童謡には五回づつ、賞金として呈します。但し少年少女の創作童話にして「入選」の場合は「金の星賞」を呈します。締切、發表、宛名は少年少女の創作と同じです。原稿には必ず住所姓名を記して下さい。原稿はお返しいたしません。

送金 注文は必ず前金で御拂込み下さい
 金 送金は振替が一番便利で御座います
 注 切手代用は(壹銭切手)一割増しです
 意 何何番何號よりと書いてください
 住所姓名ははつきり書いてください
 廣告料は御照會次第お答へ致します

大正十五年四月九日印刷
大正十五年五月一日發行
總編輯兼發行人 齋藤佐次郎
東京市神田區西五十番地
印刷人 小嶋安之助
東京市神田區錦町三丁目十五番地
印刷所 安進堂
東京市神田區板町三丁目十五番地
電話柳田二二三三
發行所 金の星社
總發行所 東京五九五六番
電話小石川五三八七番

坊ちやんも、娘ちやんも、
あまい涼しい、

ライオンねりはみがきをお使ひなさい。

歯が白くなり、

美しくなり、

むし歯も出来ません。

